

---

# 僕に住む住人

不破 雷蔵

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕に住む住人

### 【Nコード】

N3789F

### 【作者名】

不破 雷蔵

### 【あらすじ】

大人と子供の間で社会というものとはある種かけ離れた不自然な道理が成り立つたらけた大学生活。そのふざけた生活の中で突如、白昼夢に悩まされ始める「僕」。現実と夢の間で出会った名前も知らない「彼女」。僕らは世界のどこからも隔離されたような部屋でひっそりと暮らし始めた。

## 0 はじめに（前書き）

念願の長編です。ほとんど見切り発車なので、まとまりのなさや誤字脱字もあるとは思いますが、少しずつ修正して完結まで頑張ろうと思います。お暇でしたら読んでやってください…。

## 0 はじめに

まず、今から始まるこの小説（のようなもの）が幾分断片的であることを考慮して欲しい。

これは思い出のようなものであって、そうでもない。ずいぶん昔のこのようであって、そうでもない。いつまでも色あせることなく鮮明であって、そうでもない。このようなどっちつかずな表現が稚拙ちせつで主観的でありながらも本質的には的を得ているようで、そうでもない。

こんな言い方は本来、表現とは言わないのだろう。

しかしながらこれをそう表現する外ないのは、僕自身の正直なありのままの表現の仕方であり、僕自身の表現の限界でもあるからだ。

ただ、この小説（のようなもの）が断片的であるのは事実、僕の目の前に現れるそれはいつも決まって断片的だからだ。そんな不完全なものであっても表現しなければならぬのは、それを持ってしか存在していくことができないう何か僕の中に存在しているからだ。

だから今、僕は君に語ろうと思う。

さて、僕はまず君に何から話せばいいのだろうか。

本当にどうでもいいことなんて僕の周りにはいくらでもあって、  
どうでもいいと思わなければ耐えられないことはいつも僕の頭の中  
に存在している。

不愉快なのはそういったものはいつも唐突にやってきて、僕には  
何一つ選べないことだ。

後悔は先にたたないというように、振り返ればいつもいつの時も  
後悔ばかりが思い出される。そして時は僕の目を盗んで瞬く間に現  
在まを過去へと変えてゆく。

ふと気がつけば塵ちりのような思い出が生きてきたぶんだけただただ  
積み重なっている。

楽しかった思い出や記憶はそうではない現状を否応無く認識させ  
るし、嫌な思い出はいつまでたっても嫌な思い出のままだ。今から  
遠ければ遠い出来事ほどそういった記憶はひどく曖昧で、幼なかつ  
た頃の思い出なんて嫌な思い出しか残ってはいない。

だから振り返る自分の過去はいつもずっと不幸だった。

例えば、いつか昔の若く若い春のこと。

大人になることは自分の行動や発言に責任を持つことだと思っていた。だから自分自身では責任を負えないようなことはすべきではない、それも思っていた。それでも実際、一般に成人といわれる二十歳を迎えてからも、責任を持つて行動や発言をしている人間に僕は出会ったことがない。そして誰に対しても何も言い返すことができず自分の意思で行動することができないような気弱な人たちに対しては、<sup>はか</sup> 谄ったように色んな物を押し付けて僕らは日々を生きている。この世界というのは単に子供の世界であることに気づいたのはつい最近のことだ。

この歳になるまで僕は実に多くのものを失い、その結果というかその結果の代償によって僅かばかりの教訓と自己発見を得た。

その一つとして、世の理は<sup>ことわり</sup> 等価交換であって何かをひとつ得るためには何かをひとつ失わなくてはならない。だからまず、何かを得るためには何かを先に払わねばならない。

これがその中のひとつ。

僕は今よりもずっと若い頃に自分の手の中に持てるだけの物をできる限り持っていていようと思っていた。

紆余曲折、悪戦苦闘、七転八倒した拳闘、結局はその持っているものの重さに耐えかねてすべてを落としてしまった。そしてその得ようとしたもののつけを今も払い続けている。

僕がこの世界で知ることのできたものは失ったものが自分にとっ

てどれほど大切であったのかという喪失感と、何よりそれらがもう二度と手に入らないことへの消えることない痛み。この二つは互いに複雑に絡み合っていて、体内に双子を孕んだかの様に僕の中で大きく育っていくことになる。

ともかく、僕は大概の人たちがそうであるように欲しいと叫ぶことで少しずつ自分自身を知り、手にしたものを失うことでこの世界を知っていった。

ここでより深く自分を振り返る。

僕はごくごく普通の家に生まれた。父、母そして姉の4人家族。それ以上でもそれ以下でもないどこにもあるありふれ過ぎた家族構成の中にあつた。

で、あるのにその中であつて僕は幼少時代に酷く体が弱く、よく病気にかかる子供だつた。

はしか、肺炎、とびひ、水疱瘡、りんご病といった子供がよくかかるといわれるような病気は片っ端からかかつていった。ひどい時には何をしていてもどこにいても頭は熱っぽくそこからくる体の大きさで意識はいつもぼうつとしていた。この頃に熱が四十度以上出ると気を失ってしまうことも知つた。当然学校も休みがちになり自分の家にいることが多く、非社会的で内向的にならざるを得ない状況下で育つた僕は、ひどく人見知りな子供だつた。

総じてみると僕の少年時代は何度かの死にかけるほどの病気に見舞われることと、気弱な自分への屈辱感との内に過ぎていったよう

に思う。

それでも僕は必死に生きていた。

それは決して生きることの意味を知るとか、生きる素晴らしさなんかを知ったわけではなく、病床の淵にあつて死ぬことの恐怖を嫌というほど知ったからだ。当時、死ぬことから逃げるのが僕の生きる意味だった。ただ自分が死んでしまうのではないかという恐怖に対して、日々苦しめてくる病気には何の救いも無く慈悲も無かった。頭痛、喉の膜を傷つけ血が出るほど止まらぬ咳、吐き気、目の前がちかちかと火花が散っているように見え出すほどの高熱など痛みを伴う苦しみの種類には事欠かなかった。

病気による脆弱な体力がさらに低下することをカバーするために毎日病院へ通い点滴を打ってもらいに行くのだけれど、針の打ちすぎた左腕は真っ青になり、その腫れた腕からでは血管を視認できず、右腕からも点滴するようになった。その腕の青さは体調が回復し学校に行けるようになってもしかばらくは残っていて、クラスの生徒にも随分と変な目で見られることが度々あった。

小学校5年の頃、そんな僕をみかねた両親の誘いで体を強くするために水泳を習うことになった。学校にあまり行くことが出来なかったせいもあり、あまりに泳ぎが得意でなかった僕はスイミングスクールの先生の泳ぎを見たところの判断で一番初級の小さな子供たちと同じように浮き輪のようなものをつけさせられて泳がされた。それは僕にとって屈辱的なものだった。キャツキャ、と騒ぎながら楽しそうにバチャバチャ泳ぐ子供たちの脇で僕は自分の情けなさに打ち震える日々が続いた。

この屈辱の日々を抜け出すために僕は出来るだけ早く上のクラスに行くことだけを考え出した。毎週必死で泳ぎ、その技術を先生に認めさせ、昇級試験を受ける。そこで泳ぎのフォームやタイムを計測され合格すれば次のクラスに上がれるのだ。もちろん、不合格な



らまた同じクラスで先生が昇級試験に受かるだろうと判断するまで泳がなくてはいけない。僕は一度として試験に落ちることなくそれに合格し続け、順調に上のクラスへと進んでいった。泳ぐというハードな全身運動とそれに伴う心肺機能の向上はゆっくりとしかし確実に僕の体を作り変えつつあった。そして一年ほど通った頃、気がつけば僕は病弱な時代をなんとか泳ぎきっていた。

ただ、中学に上がるときに水泳はきっぱりとやめた。何かを目指したわけじゃないし、その時は泳ぐことが好きか嫌いかなんて考えもしなかったからだ。

そこで何かが劇的に変化が起こったわけではない。

僕自身が人並みになったのは、あくまでも水泳によって得られた以前の自分と比べれば幾分マシになった肉体的健康だけなのだ。

僕のそれからは自分を他の人となんら変わりない人間であることを人に見せるための行動だけで過ぎていった。それは行うには至極大変でありながら、他人からすれば何の意味も持たない作業だった。誰にも知られることなく僕は僕なりに必死に一生懸命に頑張っていた。ただそれは一度として報われることはなかったけれど。

人と同じように生きていたって誰も褒めてはくれないのだ。

その頃はただいつも人と違うことを酷く恐れていた。他人と同じ

ようなものを見て、他人と同じ様なものを感じ同じ様なものを好きになる。気になるのは自分がどうしたいかでなく自分が人にどうみられているか、そんな意味も無い愚直な行動をこの頃の僕は望んで行っていたように思う。

いつの間にか僕はその行為に自信を抱いていた。自分は昔の自分ではないと。

それでもある時、この社会と接している自分はただのはりぼてで相変わらず弱い心と体を持った泣いている子供のままだったと気付いてしまった時、僕はなによりもまず耳と目を塞ぎ貝のように口を閉じて、誰もいない静かな海の底で生きてゆくことだけを望んだ。ただそのような生き方が現実問題としてできるはずもなく、それまでと同じような作り上げた自分を演じ続ける他はなかった。

そんな僕が人並みに生きている、いや生きているように見えることは奇蹟に近いことだったと思っている。

ただそれにはひとつの部屋とひとつの存在が必要だった。

ひとつの部屋、それは今までに生きていた人生の主演、弱く脆い自分という存在を閉じ込めて二度と他人の目に触れないようにしておくための部屋。そしてひとつの存在、それは閉じ込めた自分の代わりとなってこの世界の中で生きていかなくてはいけない存在、それが必要だった。

時が経つにつれ僕は本当に違う僕になっていった。ありふれた感情の揺らぎさえ自分の中では起こらなくなった。そのせいで人のいる前では、笑うフリ、起こるフリといった誰もがそうするだろう、という前提のもと僕は僕を演じた。その副作用として独りになるとより無気力無感動になっていった。

そんな自分をおかしいと思いはじめた頃、僕は高校を卒業した。

そして僕は自分の住んできた町を出た。

決して逃げ出したわけではないけれど、誰も知る人のいない世界に僕が住んでいることは、ある意味で素晴らしいことだった。

新しい生活、新しい関係、新しい自分、そういったものを僕は作り上げられるだろうと思いきんでいた。ある意味でごく一般的な期待感と不安の入り混じった新生活、そんな大学生活の始まりだった。それでもやはり、そこから始まるのが僕にとって思い道理には到底ならないことであることに気づくのはそう長くはかからなかった。

結果として自分という内側から見れば結局どこへいっても僕は僕だった。

この世界に生きている限り抗うことのできない力はどこにでも存在している。自分の存在を安定させることのみを望んでいたせいで、殴ることはもとより憎むべき対象さえも僕には見つけれなかった。

でも、僕は生きた。自分のできる限り。

先ほども言ったけれど、人に弱さを悟られぬように一生懸命生きていた。僕の不安定な心の水面に波を出来るだけたてないように静かに少しずつ自分を新しい世界へと馴染ませていった。

そしてその世界で僕は幾人かの忘れることのできない人々に出会

い、そしてその人たちの全てを僕の先の人生からは完全に失ってしまった。

その中の一人に出合ったときのことについて君に話そう。

0 はじめに(後書き)

完読感謝。つづく。

## 1・繰り返す始まりの季節

春、春の雨。

そう、思い出す始まりはいつも決まって春、遙か昔の誰かが決めた始まりの季節。身に染み入るような寒さがようようと居座るのをあきらめ、この世界の誰もが望んでいたように暖かみ始めた頃のこと。

こういう時期はいつだって、ほとんどの人々が少しその暖かさに絆され、ついつい気持ち緩み幸せな気分になっているように思う。

それでも僕が思い出すのは雨、せつかくのその暖かさを無残に打ち落とす糸のように細くそれでいて重く冷たい雨。

それが始まり。

その頃の僕は大学の二回生になりたてで、在籍するサークルの新生歓迎の花見に出席していた。当然一番下っ端である二回生の僕たちは花見の準備をしなければならない予定になっていた。

僕たちに対する仕事の役割の振り分けとして住んでいるところが花見の予定場所に近いものは前日から場所取りに向かい、それ以外のものは、酒やつまみを買い出しに行ったり、新入生の花見場所への案内等などの大まかな作業分担がある。当日は僕も新入生を花見場所へ連れてくる仕事に追われていた。

花見は大学の近くではなく、有名な神社の中で行うことになっていた。

花見の場所は円山公園。八坂神社の北側に隣接している回遊式日

本庭園だ。祇園の近くでもあつて旅行がてらの見物客も多い。特に花見の時期になると桜の名所にもなっているので、ひっきりなしに人が訪れるのだ。公園の真ん中には祇園枝垂桜といわれる枝垂桜の巨木があり、夜ともなればライトアップされて妖艶な姿を見せる。

その日は前日からの雨で地面はぬかるみ、散った桜が不自然な色合いで庭園の池に浮かぶ。他の花見客達の座っていたビニールシートも所々で水を浮かべ、今日の花見は散々な目に遭うと予想されたのだけれど、大学の正門前で待ち合わせた新入生達は予想以上に多く参加してくれていた。

僕たちの通う大学は高台にあり、正門から坂を下って最寄の近鉄電車から京阪電車へと乗り継いだあと、鴨川を背にして灰色に濁った空の下を大所帯で目的の場所まで歩いていく。雨に降られながらも彼等は楽しそうに歩いていく。僕自身は一年前の今頃どんな顔をしてこの花見に来ていたんだろう。最後尾で眠気からくる目の痛みに耐えながら、どうせ思い出せもしない過去を振り返りながらみんなの後についていった。

平日の午後に街を歩く人たちはみな僕らのような大学生が、その他はお年寄りばかりだった。大学生は僕たちと目的は同じようで、みなぞろぞろと新入生を連れて花見の出来る場所へと向かっていた。

とにかく花見へ連れて行けば僕らの仕事の大半は終わる。僕自身たいした仕事はしていないのだけれど。まあ、酒の席での僕の仕事なんて何一つない。僕はあまり大勢の席で酒を飲むのが得意ではない。無理に酒を進められたり、周りの人たちのノリに合わせることもだ。改めて自分のバックグラウンドを理由にくどくど説明しなおす必要も無く、つまりは僕という人間は協調性が乏しいのだ。

それでも花見は行われる。いまだしとすと雨も降るが、それでもそれなりに新入生たちとの花見は盛り上がっていた。そして僕は盛り上がるのを見ている。その輪には入っていないけれど、時間を潰すのには困らない。桜を綺麗と思う気持ちだって少しぐらいは

持っているし、終わるまでにうろつろしていても飽きないほどの花見の場所は街中にあった。この円山公園の祇園枝垂桜は、傍に立てられている立札の説明によれば二代目の桜であるらしかった。結構な老木らしく、桜の品のある花びらの薄いピンクを際立たせるはずの幹の黒さは、何かの薬らしい塗り物によって白く着色されている。桜を見に来た人にすれば少し興ざめしてしまうことだが、ビールシートの上で騒ぎはしゃぎ酒を浴びるように飲む人たちにとってはどうでもいいことなのかもしれない。情緒などは散乱するゴミのしたに押しやられてしまったようだ。必要なのは目的で無く名分、この国ではどこの世界にもありふれているものだ。

欠伸をかみ殺しながら僕は公園の池に掛かる橋の傍にある石でできたベンチに座り池に浮かぶ桜の花びらに落ちる雨粒を見ていた。

そうしている間に花見を閉めようと幹事役の先輩など数人が立ち上がって新入生たちに説明し始めた。花見の後の予定として二次会の店を用意していたのだけれど、思ったより盛り上がったために予定の人数より多くなりそうだったので、余りお酒の飲めない僕早々と二次会への欠席を申し出てその場を離れた。

それから暫く久しぶりに訪れた街の中をうろつき、友達のバイト先に行って大学では見られない真面目な態度をからかってみたりした。そのうち街が柔らかな灯りを付け、仕事終わりの社会人達がぞろぞろと花見の出来る場所へと流れ始めた頃、その波の合間を縫って僕は家に帰るために駅の方へ歩いていった。人の流れに逆らうように歩く自分がいた。

これからの人たちと、これまでの僕。

少し寂しい気持ちがしていた。その感情は僕の人生を通して何度か感じたことのあるものだった。

それでもじわじわと襲い来る眠気と格闘している今の僕にとって独りになるのは決して悪くはないことだった。雨は次第に止みだし



たし、家に帰るだけの身軽な身の上を喜ぼう。

夕暮れに急な気温の低下が呼んだ風が次第に強くなってきて、僕の体温を下げる。思わず寒気に体が震えた。

空は雨上がりで薄暗いながらも遠くの山並みは綺麗なオレンジ色をしていた。気温が下がってきたせいか、少しだけ空気が澄んできたような気がする。

円山公園の階段を下り信号を待つ。正面出入口なので信号待ちは人でごった返していた。

僕は人ごみの多い場所が好きじゃない。そしていつも人ごみの中にいると遠くの山や上空の景色に目を奪われてしまう。この日もふらふらと上を見ながら、駅へと歩いた。歩道には人が溢れていた。信号ごとに皆が立ち止まり一時的な密集を作る。見知らぬ人の肩が触れる、足取りが止まる、自分の歩幅で歩けない。イライラしてしまう。どうして日本の道は歩く人に不親切に出来ているのだろう。きつと歩道を作る人は普段歩道を歩かないのだろうか。ならなんでそんな人が作るのだろうか。社会人になれば分かるのだろうか。一介の学生の考えが及ばないさる理由でもあるのだろうか。くだらない疑問はいつまでも尽きないが、鴨川に沿った京阪四条駅に辿り着いた。改札を抜け階段を下りると、タイミングよく電車がやってきた。

丹波橋から近鉄線に乗り換えると、車内はまだ帰宅ラッシュの間でもなく、席は比較的空いていたので僕はゆったり椅子に腰掛けることができた。車内では花見の始まりを待つ間の暇を潰すために買っておいた読みかけの漫画を取りだし、それに集中しようとした。しかしながら前日に殆ど寝ていなかったため、同じところを何度も読んでしまい、物語は一向に進まなかった。結局僕は読むのをあきらめ、大人しく目に映る電車の中刷り等の意味のない情報に頭の中で意味のない言葉を吐きかけていた。

電車には普段あまり乗らない。僕の普段の行動範囲は狭い。大学内と原付バイクでいける範囲だ。原付で行こうと思えばとても遠く

に行けそうだが、僕は行こうとは思わない。よって電車を使わず動ける範囲以内が僕の行動範囲ということだ。ともかくあまり電車には乗らないので居心地は好くない。各駅で乗車下車が繰り返され、次第に車内にはだんだんと人が増えてきた。スーツ姿のサラリーマンから学生、おじさんおばさん老若男女が入り混じり車内はいつぱいになった。また人の混み合う状態に飽き飽きする。それでも窓の外を見れば、だんだんと見慣れた景色になってきている。見慣れた木津川を越える鉄橋の上を電車が走っている。河川敷で練習していた野球少年たちはグラウンドを均すためにトンボを引いている。こんな雨の日でも彼らは練習していたのだ。そんな彼らの姿は何故かは分からないが、いつ見ても懐かしい感じがする。後五分もすれば僕の住む下宿の最寄りの駅に着く予定のはずだった。

ここでまず、普段の僕というのは元来の人見知りと小心さのためにとても用心深く心配性である人間だといっておく。

しかし、その時の僕は産まれて初めて電車を乗り過ごすということをしてしまった。

僕が乗り過ぎに気付き、電車から駅のホームに降りた時には僕の降りるはずだった駅からは三十分ほどかかる駅まで来ていた。頭の中に薄い膜が掛かったようにうまく物事を考えることができないまま、電車のドアが閉まる直前に僕は崩れ落ちるようにホームへ飛び出した。

初めてのこの失態に落胆し、さらにその駅では家に戻る電車に乗るには一度改札を出なくてはならないことに苛立ち、追い討ちを掛けるように情けない自分を空腹が襲ってきた。各駅電車しか止まらないこの駅には電車はおそらく後十分は来ないはずだ。気持ちがこれ以上落ちることのないことを知った僕は空腹を満たすことのみを考えだした。その駅ではあまり人が降りなかった。車内との急な温度差に震えが来た。寝起きの体は気だるく、足はふわふわとしてうまく歩くことが出来なかった。

駅内のトイレで顔を洗い、眠気をさました。鏡を覗くと目にクマができた冴えない男が独り立っている。いつみても何かをやり遂げそうな顔をしていない。二十年程付き合ってきた顔なのにたいした愛着も沸いてこない。年齢不詳の地味な顔がそこにあった。そこで自分の存在に関してあれこれと考えそうになったけれど、全ては無駄なことなのでやめた。起きたことは過去のことであって、今ある自分はその蓄積でしかない。とりあえず先を考えて、今できることをしようと思う。実に前向きな考えだ。いつも初めからそう思えればいいのだけれど。

じつくりと背伸びした体の芯に冷えた空気が忍び込む僕はぶるりと体を震わし、そこで眠気が一時的に覚めたことを感じた。ただ空腹感だけが未だ残ったままだ。

改札を抜けとりあえず駅付近のコンビニを探した。僕がこの辺りに住みだして一度も降りたことのない駅だった。

雨上がりの空はオレンジの色をすでに落とす、濃く深い闇が辺りを包もうとしていた。誰も知る人のいない町だった。しかしながらその状況に以前に下宿生活を始めた時のような新鮮な感情を毛ほども抱くことはできないでいる。

近くでコンビニを探した。僕が出てきた改札とは線路を挟んだ向こう側にそれらしき明かりが見えた。どうやって向こう側に渡ろうかときよるきよるしている、駅から道路を挟んで百メートルぐらい離れた所に赤い提灯のぶら下がったラーメン屋が見えた。僕は空腹でしくしくする胃の痛みと湧き出る涎とえらの辺りの疼きを押さえながらわき目も振らずそのラーメン屋へと直進した。暖簾を潜り引き戸を開けるとむっとした空気が顔にまとわりついた。店は夕食時というのもあつてか、狭いながらもそれなりの賑わいを見せていた。僕は店の奥側のカウンター席へ窮屈に腰掛け、空腹の痛みを耐えながらラーメンの出来あがるのを待った。僕がラーメンを食べ始めた頃には中にいた客達は食事を終え、ほとんど席を立ち始めていた。僕は湯気に曇る眼鏡をはずし、一口目のほつぺたの痛みに耐え、そこからは無心に静かにラーメンをすすった。

初めて電車で居眠りをして落ち込み、とりあえず空腹を満たそうと目の前にあるラーメンに集中する人間に向かって見知らぬ土地で見知らぬ人が声を掛けた場合、なかなか気付いては貰えない。僕は肩を叩かれるまで、自分が誰かに話し掛けられていることに全く気付いていなかった。そしてそれが女性であることにも。彼女の顔には僅かではあるけれど頼みにくいことを人に頼む時に人が前もって作っておくような申し訳なさが前面に現れていた。

まあ、その頼みとはごく簡単なことで、お金を持ってくるのを忘れたということであれば貸して欲しいと言うような事であった。自分の家はすぐ近くであるので、付いて来てくれればすぐにも返

すと彼女は付け加えた。

彼女は僕が食べ終わるのを静かに待った。

今でも良く考えるのだけれど、この時彼女にお金を貸した僕の心情といったものがどうも思い出せない。いざそういう状況になれば誰でも貸すものなのだろうか。こういうことが2度も起こるとも思えないのだが、自分のした行動に理由も納得も持てないというのは何かむず痒い気持ちになる。ただ、今僕は雨が止み、水墨画のように薄暗くぼやけ、微かに霧がかつた見知らぬ街を初めて出会った女性の後ろを付いて歩く。

僕の乗り過ぎしてきた駅に沿って彼女の家まで歩いていく。駅のホームが終わり、道の片側には線路が遠くまで続いている。線路の向かいには住宅街であるのに誰もいないのではないかと思うぐらいひっそりとしていた。道の片側が線路だけになってから三百メートル程いったところで、彼女は住宅街側へと曲がっていった。それに付いて曲がった先には街の明かりのないよりひっそりとした住宅街が続いていた。

僕はこれからの事と彼女の存在に僅かに不安を感じ始めていた。あまり見知らぬ女の人の後を付いて行くものではないかと今更ながら思った。道は進むたびに傾斜を強めている。住宅地の裏には雑木林があり、その先は急な上りで最終的に小さな丘になっていた。大きな家と家に挟まれた林の手前にある場所が彼女の目指した場所だった。

そこには今の時代からは忘れられたといって良いような2階建ての古いアパートが建っていた。くすんだ白とはいえないような白い

アパートだった。本来の赤としての存在を見失ったかのような色をした階段は手すりに至る全ての部分において所々酸化され、塗料が剥がれていた。一階の何処かの部屋からテレビの音が漏れている。彼女は振り返り、自分の家はここであることを言い、二階なの、と指で指し示しながら僕の表情など気にせず階段に向かった。部屋へと向かう途中では薄暗い中で僕と彼女の階段を上る音が妙に大きい気がして他の住人に申し訳ないような気持ちになった。そんな気持ち彼女には全くないようで、サンダルの低いかかとを廊下にすらしながらスタスタと廊下の奥の方へと歩いていった。突き当たりがどうやら彼女の部屋であるらしく、ドアを半開きのまま部屋の中へ入っていつてしまった。僕は部屋の前でどうして良いか分からなくなっていた。といつてもどうしようもなく、正直薄暗い廊下にいるのも不快であったので、僕は半開きのドアの隙間からすつと顔だけを潜り込ませて覗いてみた。暗闇の中で彼女が電灯を着けようとしているのを見つけた。

電灯の明るさに一瞬の眩み、そしてその明るさによろやく目がなれた頃に見える景色に僅かな動揺。

部屋は六畳一間の真四角な間取り。

その中であつて彼女の部屋には家具というものがまるでなかった。あまり一人暮らしの女性の部屋というものにそれ程面識がないとしても、この部屋を創造できる人間は殆どいないといつていいと思う。部屋は六畳ほどの和室にキッチンが付いている、ただそれだけだった。家具、机そついつた物はいつさいなく、目に付くのは窓際の住みに乱雑に置かれた本の山だけだった。

彼女は僕を玄関へ残し直つ直ぐ押入れの方へ向かい、押入れの中に頭を突っ込んで何かを探し始めていた。

僕はといえば、卑しくも四つんばいになった彼女のジーンズと水色のぴつたりとしたTシャツの間から覗くあまりに白く細い腰の括れ

に僕は目を奪われていた。

何故僕はここにいるのだろうか。

自分の部屋へと帰る予定であったのに。本来ならば今日一日の花見での役割を終え、ゆったりと風呂にでも浸かり、寝不足の為に疲れていた体を癒すために早々と寝ていただろうに。今の僕は乗り過ごしてきた駅の側のラーメン屋で見ず知らずの女性にお金を貸し、それを返してもらうために来たこの部屋でその女性の腰の括れに見とれている。これは本当に現実なのだろうか。僕はひよつとしてまだ乗り過ごしたまま電車の中で居眠りをしているのではないだろうか。あまりのすることのなさや居心地の悪さに僕の空想は大きく広がりを見せている。

全ては無駄な考えだった。夢であろうとなかろうと僕は事態の流れに任せておくしかないのだ。夢ならば覚めるのを、現実ならば彼女がどうするのかを、どちらにしても僕には待つということ以外にはないのだ。

彼女は押入れから陶器で出来たような西洋風の人形の貯金箱を取り出して来た。人形は瞳孔の開いたような目であらぬ方向に笑顔を投げかけていた。そして彼女はその人形の下にある黒いゴム製の蓋を乱暴に取り外した。軽い金属特有の硬く高い音が畳に転がった。それをかき消すように畳の上には人形の下から吐き出されるように小銭がひんやりとした一山を作った。そして彼女はこの山を両手で救い上げた。小銭の山はそこで急に質感を変えた。掌によって小銭が暖められたのか、小銭によって掌が冷えたのか、彼女のその行為を僕は自分がそうした時のことを頭に思い浮かべた。彼女は立ち上がって僕の前まで歩いてきた。

この本当に貸した金額通りあるかどうかどうか分からない硬貨の山を差し出した彼女に僕はどんな顔をしていただろう。この時の僕は貰うべきなのだろうか、断ると何か同情しているつもりになってい

るのか、とある種嫌悪にも似た複雑な気持ちが自分の顔に出ているかどうかを必要以上に気にしていた。その自問自答にうんざりしてきたところで、彼女が口を開いた。

「こんな形じゃ、貰いにくい？」

僕は何も言わなかったけれど、そんな気持ちいっぱいだった。

「どうでしょうか？あたし今これ以外にお金ないんだよね」

本当のところ、その時は他の方法を彼女が考えていたのかどうかは疑わしかったけれど、彼女はふっと何かを考えるように窓の方を向いて暫く外の景色を眺めていた。

「まあ、とりあえずまた雨も降って来ているみたいだし、中に入つて。コーヒーでもいれるわ」

そう言つと彼女は部屋の入り口の脇に小銭を置いてさつと窓辺に向かい、カーテンを勢いよく閉め、すぐにやかんで湯を沸かし始めた。僕は未ださつきまでのお金の問題に独り取り残されたままでその場に縛り付けられていた。僕はどうしたらいいのか本当に分からなかったが、彼女の上がつたらという言葉にそれを断る術もなく静かに靴を脱いで玄関の先に座り込んだ。

それでも僕の不安定な気持ちは落ち着くはずもなく、なにかに無理矢理巻き込まれた時のような理不尽な力の流れを感じていた。そして僕はその流れへの案内人となった彼女に目を向ける。初対面であるはずの彼女の台所に立つその姿はとても自然でその場に馴染んだものだった。僕はその時初めて彼女の姿をゆっくりと眺めた。彼女の特徴としてまず最初に目に飛び込むのは不自然なその髪型だった。髪の長さとしてはショートヘアの範囲に入ると思うのだけれど、



その髪の毛は所々で長さが不均一で、全体的の輪郭は直線を繋いで描けそうな程だった。彼女の縦に細い体とその対極に横に広がりを見せるボサボサとした髪形は僕に何か掃除の道具のようなものを連想させた。後から聞いたのだけれど彼女は日常用の鋏を使い、自らの手で切っているのだそうだ。彼女の人目を気にしない度合いが見て取れると思う。彼女はこの時期にはまだ肌寒いと思われるＴシャツにジーンズといったラフな格好をしている。最初に出会ったときには気付かなかったけれど冷静になって眺める彼女の姿は僕の興味を引くには十分だった。

薬缶の蓋がカタカタと音を立て始めた。

不揃いのコップが二つ。一つはコップと言うよりは湯呑であるようだ。彼女がスプーンでインスタントのコーヒーの粉を均等に振り分けている。彼女の指は細く長く節のない滑らかで今まで見た女性の指の中で最も美しいものだった。僕は落ち着かず何度か座る体勢を変え視線を絶えず部屋のいたる所へと移してみるが最終的には彼女の姿に向かうのだった。

コンロの火を止め、やかんから沸き立つ湯気が二つのコップに移された。

彼女はコップの上辺を器用に指で掴みながら溢さないようにすり足で僕のほうに近づいてきた。その姿が少しだけ僕の居心地の悪さを緩めてくれた。それなのに彼女は思いのほか僕の近くに正座を横に崩したような体勢で膝の当たるぐらい近くに座るのだ。僕の居心地の悪さは緩まる前の二倍に跳ね上がる。

彼女は僕を見ない。コーヒーを溢さぬことに集中するために彼女の視線はコップに向けられていた。

「熱いから気をつけて、砂糖やクリームはないの。ブラックでいいよね」

まだ彼女は僕を見ない。そしてコーヒーに関して僕の意見は聞かれていない。僕はとりあえずそのコーヒーを飲むことにした。彼女のコップには取っ手がなかったけれど、僕のは付いていた。取っ手から熱さが伝わってきた。僕は慎重に熱を冷ましながらそっと口を付けた。インスタント特有の深みのない苦味が口に広がり、熱さが胃までの道筋を知らせている。

僕らは熱いコーヒーをすする。

コーヒーが普通に飲めるぐらいの温もりになったころ、彼女は突然かつ自然に自分のことに対して僕にしゃべり出した。ただそれは彼女のしゃべりたいことだけで、それ以外は何一つ含まれていないようだった。

「私ね、家を出たの。半年ぐらい前かな。それも計画的にね。この部屋も家出する前に下見しといたの。賃貸情報誌見て一番安いところを探して二つ下見したうちの一つ。安い意外に取り柄なんて全くないけどね」

決めた条件が安いからだけなんていうのは計画的というのだろうか。僕がその意見を押し殺したまま、彼女の話しは続く。

「家を出たのは親と喧嘩をしたからじゃないの。ただそこは私の居場所じゃないと思ったの。私の家は結構裕福でお金で苦労したことはないわ。家族構成は両親に妹が一人、家の近くに父方の両親が暮らしているの。お祖父さんもお祖母さんも八十近いけどとても元気、

二人ともとても優しいの。誕生日には必ずプレゼントをくれるし、お年玉もたくさんくれる。両親もそう、怒られたことなんてほとんどないわ。一度だけお父さんのライターで遊んでたときにひどく怒られたことがあったわ。でも、ホントそれぐらいね。妹も私によく懐いていたし、私も可愛がったわ。私のお気に入りの洋服やアクセサリーも何個かあげたの、妹がとても欲しがっていたし、私も彼女の喜ぶ顔が見れて幸せだった。どこにも嫌なところなんかなかった。それと、家族と血が繋がってないなんてことはないわよ。真正銘家族の一員、妹とも顔は似ているわ。家庭に原因なんてまるでなかった」

彼女は僅かに笑うように言った。そしてその顔は悲しんでいるようにも見えた。それはなんだか演技のようにも見えた。わずかに僕を見る。

そしてまたも嫌味な彼女の沈黙。視線は左斜め下、畳の綻び。

「他に原因があった？」

この間に耐えられなかった僕は彼女にそう聞いてしまった。自分の発した声が少し擦れ気味であることで僕は自分が彼女と出会ってからのこの部屋にくるまで何一つ言葉を話していなかったことに気付いた。

彼女はにやりと笑い、視線だけこちらに向けた。

「男の問題なんかはなかった、もちろん、女の問題もね。多分問題があったのは私のココね」

彼女は自分の頭を左手の人差し指で差した。本当に下手なB級ドラマでも見ている気になってきた。面倒くさい女性の話し相手になつてしまったなと思いいながらも、彼女は話を続ける。

「そのことには物心ついた頃から気付いていた。暖かい家族、幸せな団らん、その中で家のみんなと笑っている。でも、実際頭の中は幸せに満たされることなんて一度もなかった。どこにいてもそう、友達と遊んでいたって、彼氏といったってそう、私は退屈だった。楽しいフリ、笑っているフリそんなことに気付かない人たちにもそんなことをしている自分にも嫌気が差してた。それでもどうしていいか分からなかったの。そんなものだとか割り着るとしてた。」

彼女が一息ついて、コーヒーをすする。彼女の黒目がある一定の方向に固定されている。

その態度からはみても、今のところ僕は意識の外にあるようだ。何度か見たことがある何かを正確に思い出そうとしている人の行動だった。無意識な自嘲が彼女の唇を僅かに曲げる。彼女は続けた。

「妹のピアノの発表会するとき、私は風邪をひいてしまっていて一人で留守番をすることになったの。お祖父さん達が来ようかといったんだけど、どうせ眠ってるだけだから、と言って来ないでいって強く言った。それはよく考えると家に一人でいるなんて初めてのことであった。お母さんは専業主婦で出不精だったし、いない時はお祖母ちゃんがいたから。誰もいないなんてことは有り得なかったの。実際そのことを感じてとても寂しくなった。自分が一人でいること誰かを呼んでも返事がないこと。喋り声が聞こえないこと。どれも私にははじめての経験だった。初めての寂しさに出会ったの。でもそこには自分が自分らしくいるって確信できる何かがあった。いつも近くに誰かがいるっていう安心感とは違った。自分と向き合っている自分には見せない醜い部分を表に出したとしても誰も何も言わない。ただ自分で思うだけ。気にしなくていいの、誰からも、何からも。だからそれは幸せではないけれど、とてもスッキリしていて、自分を自分らしく感じられる」

その頃の僕にとって、彼女の言っていることには不思議と説得力があった。少なくとも冗談で言うてはいないと感じた。現に彼女はここで一人暮らししている。この行動力には意外に感心したのだけれど、同時に彼女の一方的な考えと自己中心的結論に何かムツとくるものもあった。無意識に言葉を発していた。

「じゃあ、家を出たのは正解だよ」

そう僕が言うと、彼女は少し驚いたような表情をした。

僕は人の一方的な考え方にイラつくことがよくある。人というのは基本的に自己中心的なものだとは思う。でもその自己中心的な考えを持ちながらも若干の（個人の度合いによるが）客観性は必要だとも思う。それが無い人たちは相手が自分の言っていることに対してどんな感情の変化を与えているのかを考えない。要約すると自分が正しいと疑わない人達のことだ。そんな人間に何を言っても無駄だ。それよりなにより自分の意思で自分の言いたいこと口にしたくなっていた。

彼女はまた微笑を保ったままだった。

「家族は心配しているんじゃない、とか普通は言うんじゃない？」

彼女はまた答えを待つように僕のほうをじっと見つめたまま微笑んでいた。自分が普段にはなく感情的になっっていることに気付いた。とても久しぶりに自分の気持ちガストレートに湧き出てきたことがなんだか恥ずかしかった。それを彼女に嗅ぎ取られているフシがあった。僕は少し考えるフリをした。そして、むすつとした顔を作って抑揚のない棒読みで言った。

「家族は心配しているんじゃない」

彼女の表情は待っていた言葉を聴いて満足げな笑みに変わり、こぞとばかり持っていた台詞を口にしました。

「そうね。あの家族だもの、きつと尋常じゃないくらい心配しているわ」

少しだけ笑い、そして少しだけ僕のほうを見た。

「でもね、私は私でいることからもう抜け出せない。自分を知ってしまったもの」

コーヒーに話しかけているみたいに彼女の視線はコップの中に向かっていた。

「いつかはきつと私のことを考えないで幸せを紡いで仲良く暮らしていくことが出来ると思うの。人は辛いことや思い出を忘れることで生きていけるんだもの、いつまでも同じことばかり心の中で反芻していても人は生きられない、そうでしょ?」

自分自身に言っているみたいだ。

僕は適当に相槌を打ち、コーヒーをすすった。

どうにもこういう状況は僕の許容の範囲外だった。悲観的なようであり、自分の考えにこうも自信をもった彼女にベラベラと私的な話を一方的に聞かされている。こういう状況は今までで初めての経験かもしれない。

「あなた、学生?」

初めての僕に触れる質問。

「そう、大学はここから京都方向へ電車で三十分位いったところにあるんだ」

「家はこの辺？」

「いや、大学のすぐ近くだよ」

「帰る途中だったの？」

「居眠りで降り過ぎした後だった」

「ドジだね」

「まったくね」

「よくするの？」

「人生で初めて。もう二度とごめんだけど」

「大学は楽しい？」

「講義以外は」

「他に何するの？」

「昼飯を食べる」

「大学じゃなくてもいいんじゃないの？」

「安いんだ。そして結構うまい」

「勉強に関係ないね、それ」

「講義は楽しくない、昼飯は結構うまい、それが僕の大学で学んだことだ。その二つさえ分かってくれば何とかやっていける」

「それを勉強したってどういうの？よくわからないわ」

「講義の内容を言ったらって同じだよ。よくわからないわ、っていうと思う」

「あなたかわってるわ」

君に言われたくない、と思った。僕はそうかな、とだけ言った。会話を途切れさせるタイミングをとるのは結構大変だった。僕は冷めた残りのコーヒーを飲み干し、カップを口から離れた勢いで立ち上がった。

「もう帰るの？」

「初対面の女性の部屋に居て、色んなことを話されて、僕は少しこの状況に混乱しているんだ」

「気にしているの、二人きりでいること？紳士的ね。困った人を助けたし」

軽くからかいのこもる微笑。リアクションのうまく取れない僕は、はやくこの場から逃げ出したかった。

彼女はお金のことを口にした。僕はコーヒーをご馳走になったし、



もういいと言った。でも、彼女は引かなかった。  
彼女はまたどうしようか、と考えるフリをした。

「うーん、ホント悪いんだけど、明日の昼ぐらいにまた来てくれな  
いかな。その日はバイトがないから。電車代ももちろん出すし」

「原チャリがあるから別にいいよ」

「そう、悪いけどお願いできるかな？ 駅から来たから道も分かるで  
しょ？ いいよね」

何気に僕がまたここに来るということが前提になってしまっていた。  
ここに来て初めての僕に選択権のある状況が来たような気がし  
ている。そんなものなかったと気づいたのはだいぶ後のことだった。  
僕はいいよ、と言った。どうでもいいよ、と言いたかった。

部屋から出ると廊下は真っ暗だったので僕は平衡感覚をなくしふ  
らついた。体を支えるのに手をついた壁は埃だらけだった。手につ  
いた埃の質感はひどく不愉快で僕はあとタメ息をついた。今日は  
本当についてない。

崩れそうな階段をとぼとぼと降り、舗装された道に出た後でアパ  
ートを振り返る。暗闇と怪しい林をバックに立つこのアパートには  
人を寄せ付けない雰囲気があった。住宅街には相応しくない建物だ  
けれど俯瞰ふかんして見ると何故か違和感がなかった。彼女の住んでいる  
部屋の窓を見上げる。そこには誰もいないようにも見えた。彼女の  
言っていたことなんてどれも聞いたそばから忘れられそうなものば  
かりだったけれど、自分が自分でいられることという言葉だけがじ  
つと僕の頭の中に残り続けている。彼女に自分が自分でいられるよ  
うな都合のいい場所なんてない、といったような嫌な気持ちにさせ  
ることを言っただけだった。きっと彼女を怒らせることだろう。

それでもう彼女とは会わずにすんだかもしれない。

誰かと話したときにはいつも後になって言っておけばよかったことが浮かんでくることがある。

でももう遅い、いつもこうだ。

答えはいつも必然的に遅れてやって来て、いつべき言葉は総てが過去に消えた頃思い浮かぶ。

すでに僕は坂道を下りきり、駅まで続く線路沿いの道まで差し掛かっていた。なんだか疲れ過ぎて考えることも鬱陶しくなっていた。

ふと思い出せば、降り出した雨はもう止んでいた。もちろん彼女の雨が降っていると言う言葉を信じればではあるが。僕は部屋にいる間、外を見る余裕なんて全くなかったのだ。彼女の部屋には見回せるところには時計がなかったし、後五分も過ぎていれば終電が出てしまっていた。口の中にはコーヒの苦味が、頭の中にはもう言葉ではなく、ただ彼女の黒い髪、細い指だけが残った。眠気はすでにどこかに消えていたけれど、どこまでが夢でどこまでがそうでなかが僕には分かりかねていた。

居眠りしないように気をつけながら電車で揺られて家に帰ったけれど、夢がまだ続いていたのかもしれないと今頃になってまた思っている。

1・繰り返す始まりの季節（後書き）

完読感謝。つづきます。

## 2・僕と彼女と眼鏡

ある人が言うには、夢というのはその日一日にあったことを脳が記憶として整理する行為の中で見るもので、人は90分を一区切りとしてその中で深い睡眠と浅い睡眠（レム睡眠と言われるようなもの）を繰り返すのだそうだ。そして眠りの浅い時に夢を見る。だから8時間ほど寝ればだいたい3回ぐらいは見るもので、起きた時に覚えているものはその中の最後の夢の断片だということらしい。それはある意味で示唆的であって、本質を捉えることは難しい。だから夢の中で起こることは実際の自分に当てはまるものではなく、不確かなものである。

確かなものは現実で、自分が触れているものでしかない。町の雑踏、脆もろそうなプラスチックでできたベンチのすわり心地の悪さ、新たにくわえたタバコ、ジツポの冷たさ。それでも今、タバコをふかしながらこの世界のいたるところに隠れている過去に触れ、僕は過去を振り返っている。きつと現実に見えている電車は過去のそれと同じであるはずがない。何より町の景色からして違うし、ここはあの頃住んでいたところからはとても遠くだ。にもかかわらず僕にはそれが同じに見える、いやそう感じる。

今でも僕にとってはあの頃も過去でなく今なのかもしれない。

あの頃に良く見ていた白昼夢のようなものは見なくなっただけけれど、僕は過去に起こった彼女との出会いから別れるまでの期間を何度も

何度も生きています。一時にせよ得たものをまた手に入れ、失ったものを失い続けている。

僕の中に生まれたこの平行世界を脳の片隅いまに抱えて現在いまを生きている。

そして、今君に話しているのはその平行世界の話。

決して自ら思い出すといったものではなく、生活の節々に隠れた共通の存在、もしくは過去において象徴的であった物体がその平行世界への鍵になって僕はあちら側とこちら側を行き来する。例えば先ほども言ったけれどこうして今もここから見えている電車、古ぼけたアパート、本屋に並ぶその当時読んだことのある小説、そういったものがどこやかしこで僕を待っている。

僕が扉を開けるのを待っているのだ、きつと。

いやむしろそれは扉のようなキチンと受け入れてくれるものではなく、実感できる正確なイメージで言えば落とし穴なのかもしれない。人が落ちていくのは下とは限らないのだ。

僕が記憶の内側へ落ちていくように。

ただそこへ落ちたとしても僕は今、現実問題として決して繰り返されはしない 往々にして同じように感じてしまうことはあるのだけれど 絶対的時間世界を生きている。

当たり前のことだ、人は歳を取る。

まだ春風と呼ぶには幾分若い風がタバコの煙を揺らす。

あの頃、もしくはあの世界では僕はタバコを吸っていなかった。

そのタバコを吸うという行為が自分にもたらずものが何一つないと思っていたから。

でも、僕はタバコを吸うようになった。

街の空気を吸うことも、タバコを吸うこともあまり違いがないように感じたからだ。

本当にどうでもいいことなのだけれど、どうでもいいことでもない自分が昔のまま変わってないような気がしてしまう。周りの世界は日々流れ変わっていくのに、自分はいつまでも変わらない、いや変えることができないでいるというような愚にもつかない感覚は今も昔も変わっていない。だからこの混乱はしかたがないことなのかもしれない。

もちろんこれは自分の内面での話。

自分のおかれた立場はいわずもがな、見た目など目にしたくも無いが、やはり確実に変わってゆく。

人は歳を取る。

あれからどれぐらいの月日がたったのだろうか。

社会に出て色々な理不尽なことがあった。

それを飲み込んで自らの糧かてとし、他人にその理不尽さをつき返すぐらいのことをし続けないと生きていけない社会。そのイメージは小さな頃からあったのかもしれない。

そう、ただ受験などと名前を変えてそこにずっとあったのかもしれない。

ただその中であって唯一区切られた世界、社会人と学生の狭間はざまにあつて宙に浮いた存在の大学生生活、僕にはそう感じられるものがあった。家族や昔から仲の良い友人たちと離れ、独りを感じながらも誰かの下において働いていないという状況のせいだろうか。何か不条理が平然と成り立つ世界。思春期を通り越したものの、酷く中途半端な立場にある心にはある意味でゆとりがあつた。

そんな学生時代。

僕の大学時代のことを話す。

僕は、大学を卒業するのに5年間かかった。

それはごくありていに言つて単純に遊んでばかりいて、女の尻尻(古臭い表現)を追い掛け回していたからでは決してなく、授業を受けていることに我慢できなくなったからだ。

大学の授業が高校までの授業と全くといっていいほど変化なく退屈で、同じ時間に同じ場所で同じことをするので、なんだか何度も

リサイクルして使われる牛乳瓶のような気がしてきたからだ。

牛乳瓶は、牛乳瓶である限り牛乳を注がれて蓋ふたをされる、そして牛乳として送られていく。この繰り返しでしかない（壊れない限りは）。

大学は自分で自分のことをしなきゃならない自由な場所だと言われた。ならなんで自分で選ぶことができないんだろう。小さな枠で決められた範囲でそれを選ぶことが自由ならやはり、自由とはごく限定された範囲でしか存在しない言葉なんだろう。

そう、これはパラドクスだ。

十代の反抗期みたいな青臭い言葉だけれど、これは事実、自分で考え自分で導き出したことだ。そしてこの自由というものの定義は現在に至るまで覆くつがえされることはなかった。ともかく僕は自分で自分のことをした。そして、僕は親の金で大学へ行き、大学生活の不満を言っている。

これもパラドクスだ。

そうか？

僕は自分を変えたかったし、変わっていきたくった。もちろん、成長するという意味で。

人は同じものを違ったように見ようとしているだけで、結局は同じ処ところに留まっているということに気づくのは随分あとになってから



のことだ。

つまりはこの頃の僕はそれに気づいていなかった。というか、違ったことを同じように解釈して、同じように間違いに気付き、同じように後悔している。僕は間違えるまでの過程を永遠繰り返し返している。牛乳瓶のように。

だからどうしようもない僕が成長をするために何かを始めたり、誰かと知り合ったりするという活動的で建設的な人間であるはずもない。出来ること出来ないことそれをしっかりと見極め、出来ないことを切り捨てる覚悟を持つこと、それが成長することだと思っていた。

先程言ったように自分が留まっていることに気づかず、部屋で一人答えのないような問題に時間を掛け、同じことをぐるぐると考え、繰り返し悩み、小さな海の中で溺れていた。

ブクブク。

当時僕が住んでいた所は、大学ができた後にとりあえず必要なものだけそろえようという感じで造られたこじんまりとした町だった。辺りにはさして興味をひくものはなく、賑やかな街に出るのは少し時間がかかった。そして深夜ともなると無人の街のように人も車もなく、鼻歌交じりに堂々と道路の真ん中を歩くことができた。その状態は僕に不安でなく、安心を与えてくれた。誰も周りをきけず

ることなく、何かから自分を隠す必要もない。安全な空間だった。

こんなことを思う僕は寂しく孤独な人間に見えるかもしれない。しかし、僕には当時でも仲のいい友達はいたし、それなりに学生生活を楽しんでもいた。ただその中において自分をしっかりと確認する時間が必要だった。ただ、自分ひとりの時間を大切にしていただけだ、そう思っていた。

僕は人に自分の話をするのがあまり好きじゃない。

どんなに自分はこういう人間だと他人にしゃべったとしても、どこか隠している部分があつて後ろめたい気がしたし（実際隠していたけれど）、それによって自分が評価されるもの僕の好みとするこゝとはなかった。

はつきり言えば、他の人の考えや恋愛、僕に対する意見などにはあまり興味が持てないでいた。人が何を思おうがなんと言おうが所詮は己の狭い見地であるし、その考え方がすべての一般的道徳に当てはまるはずであると信じて疑わないのは単なる自己信仰に過ぎない。また、正しいこととは世の中の枠からはみ出さないことだと真剣に信じている人達にとってみれば自分の考えを変えるようなこととは世界の終わりに等しいことである。そんな人達の言葉を信じられるはずもないし、信用することなど最初から無理な話だ。人が他人の気持ちすべてを分かりきるなんてことは出来ないし、分かった気になつている人間ほど愚かな存在はない。

それでも、この小さな島国に一億何千万人も住んでいるのだから肩の触れ合うこともあるし、ある程度自分を他人に分かってもらうことも必要なのかもしれぬ。

ただやはり弱く軟らかい自分の存在を人に触らせる気になんてなれるはずもなく、他人の秤勘定で無邪気に傷つけられることだけは避けたかった。

だから少なくともこの当時の僕には自分の中で起こる様々なこと

を誰かに話す気になんてなれなかったし、話そうとしてもそれをうまく人に伝える手だてを何一つ持たなかった。

僕の言うことなんて人から見れば誰にでもあることなんだろうし、この張りぼてで出来た自分の殻の中から叫んだって誰にも届くはずなく、自分の中身を他人に覗かれるなんて考えられもしなかったからだ。

どこに行つたとしても、そこに住み、出会いそして出会つた人たちと長く時間をともにすれば、同じ問題に行き当たる。自分をどこまで出してどこまで隠すのか。それが立場を決める。それが自分の望むべきものではなくとも、我慢できる範囲のものであるかどうかは慎重に考えるべきである。ただそこで自分の作つた、もしくは作られた立場を守ることは所詮その役割を演じ続けるということに過ぎない。それでも僕はこの大学生活における自分の役割や生活を好きだつたように思う。

僕自身その生活に満足していたはずだ。しかし現実には僕に一つの問題の種を植え付けていた。

これは、それが起こり始めたときの話。

この時の僕はよく起きたまま夢を見た。いわば白昼夢のようなものだ。

実際にはそれが夢と呼べるのかは、今でもよく分からない。何故なら、それは僕が自分の部屋にいる限りにおいてはまったくもつて時と場所を選ばなかったからだ。人はうたたねなどというかもしれない。しかし、例えば立った状態から寝ようとするならある程度

の動作が必要であるはずし、寝るにはそれ相応の準備期間があるはずだ。体感として眠気が襲ってきて、欠伸あくびなどをして自分が眠くなってきたことを認識できるはずだ。

しかし、この夢のようなものにはそういった準備期間がまるでなかった。

それは僕の頭を誰かが思い切り殴ったように突然起つたり、それとは真逆に僕が気付かぬうちにそっと誘い込もうとする。気がつけばという言葉も必要なく自分が部屋以外のどこかに存在している。そのことへの違和感さえその夢のようなものが覚めるまで気付くことはできない。

一度、薬缶でお湯を沸かしているときそれが起こり、気付くと僕は床に倒れていた。起きた時には右肩がとても痛く病院で診療してもらうはめになった。そしてその時の薬缶にはほとんど水がなく底は真っ黒に焦げ危うく火事を起こすところだった。ある時には、風呂場でシャワーを浴びている時にそれは起こった。見たいテレビ番組がありニュースの間にさっと入ってしまおうと思っていたのに、ふと我に返ると僕は時間にして2時間ほど肩からシャワーを浴び続け、見たかった番組はとつくに終わっていた。

その白昼夢のようなものは普段はまず人に見せない僕の感情の一つ一つを容赦なく揺さぶり、僕の胸を締め付けた。時には何度も同じ内容で、時には一度見た内容が続いたり、それとは全く別の状況に僕を引きずり込んだりした。そういった現状をどうにもできないまま日々まどろんだ時を過ごしていた。

よくよく振り返ってみると、僕は夢に逃げていたのかもしれない。

現実を夢のように感じたのかもしれない。

その白昼夢のようなものは日に日に酷くなり大学へ通うことの疎ましさや相まって、生活のサイクルは不規則に、あるいは規則的にずれてしまっていた。

一日中、白昼夢を見続けている中で、真夜中にふと現実に戻った時、激しい空腹感に襲われていた。強引にいろんな体勢で眠らされているのでどこやかしこが痺れていたり、背中や首に重い張りがあった。体をできるだけほぐした後、顔を洗い僕はコンビニに向かうとした。そんなときまって一人一人にも車一台にも会わず、見上げれば塗りこめたように黒い空があった。それは白昼夢の続き気のようにだった。コンビニまでの道のりをゆっくりと大きな歩調で進む。歩道でなく道の真ん中を時には鼻歌を歌いながら、時には体の張りをほぐすのにストレッチをしながら。最初に感じたような無人の町の違和感は次第にどこかへいってしまい、自分がそこに馴染んでいくような感覚を覚えだしていた。寝静まった駅のロータリーにはタクシーでさえいない。外灯よりも明るいのはコンビニの灯りだけだ。深夜のコンビニ店員の動きには無駄がない。

店員は、「いらっしやいませ、暖めますか」、「全部でいくらになります」、「ありがとうございます」と必ずルーティーンを守った。ロボットにもできそうだと思うた。

コンビニを出てまた無人の町を歩く。駅からは近いので数件の商店が並んでいる。明らかに学生向けに作ったようである。居酒屋、ゲームセンター、ボウリング場などいかにもである。ただ、そのどれもこれも今は眠りについていてる。

帰りは自分の下宿近くの薬局の横を通る。薬局の横に置かれた小さなコンドームの自動販売機は安いものから売り切れになっていた。

一度、「もうかっている?」、と自動販売機に話しかけてみたが、やはり返事は返ってこなかった。どうも商売人は自分の稼ぎには口が堅いようだった。

深夜のマンションのエレベーターは死んだように真っ暗だった。昇降のボタンを押すと寝ぼけたようにちかちかと電灯が瞬き、億劫そうにゆっくりと時間をとってエレベーター内の明かりが安定する。僕の部屋の階まで上がるとエレベーターはいつもより乱暴に停止する。寝ぼけているのは僕かエレベーターの方かと考えながら僕の部屋へと辿り着く。夜食をたいたら、テレビをつけニュースを見る。そのうちカーテンの隙間から日が差ししてくる。僕は朝を感じる。そして今度は本当の眠りが僕を襲う。

彼女に出会った頃の僕はこんなふざけた生活を毎日毎日繰り返していた。

ともかく、ひどく夢と現実が見分けにくい頃のことであった。

彼女と会った日は疲れていたのかいつもの夢一つ見なかったし、

起きた後も意識がはっきりとして、起きている間に例のものが起るような気配は微塵みじんもなかった。

そして彼女との約束の日がやってきた。誰かとちゃんと約束するなんていつ振りだろう。まあ一方的である意味強制的な約束ではあったけれど…。

その日は第2外国語の授業が入っていたせいでいつもより早く起きた。この授業の教授は毎回出席を取るのだ。始業時には席に着いていなくてはならない。不規則なサイクルで寝起きしているので体がだるく眠気は取れない。着ていたものを脱ぎ散らかしてとりあえずシャワーを浴び、まとわり着く二度寝への欲求をしつかりと洗い落とす。前日、といっても深夜なので同じ日だけ寝る前にしつかりと食べているので胃が重く朝飯をとる気分ではない。体を拭き、髪を乾かしながら牛乳を飲むことで食事を終える。ジーパンにTシャツ、その上にジャージを羽織る。いつもものの一分で着替えは終わる。どうせ誰が見ているわけでもないし、学生のかっこなんてみんな同じようなものだ。教科書を一山にした場所から語学の教科書だけを素早く抜き取り、鞆にねじ込む。鍵に財布に携帯、そしてMDウォークマンをポケットに入れて時計を見る。授業開始まで後十五分、予定通り計算された時間だ。これから原付に乗り裏道を走れば教授が来る1分前には席に着けるはずだ。その間に聞く曲は約3曲。MDの再生ボタンを押すとOASISの「SHE'S E LECTRIC」が流れ始めた。そして原付のアクセルを開け僕は大学に向かった。

授業は教科書のページが進む意外に何の進展も無い。そこに書かれた文章の1センテンスを教授に指名された生徒が読み、その生徒が座っている列の生徒が順に読みついで行く、ただそれだけ。なんとも身にならない授業だけれど、僕らのような意思をもたないリビングデッドな学生たちにはありがたい授業である。その日は僕の番まで回ってきそうもないので、大体今日の講義で終わりそうなどころに見切りをつけ、そこから先を辞書を片手に単語一つ一つに訳を振っていく。こうすれば次の授業は指名されても問題が無い。そしてそれを繰り返せば、試験までに範囲の訳は終わってしまうのだ。単純作業に没頭すると過ぎる時間も早く、終了のチャイムが鳴った。

授業が終わると知った顔の二人が話しかけてきた。

二人は僕と同じ学科で入学時に履修科目を登録するときに仲良くなった二人だ。二人とも僕と同じような不真面目な学生で、人当たりがよく授業に毎回出て講義のノートをきちんとして付けている真面目でかしこい友達を持っていて、講義ノートのコピー横流しをしてくれたりする気のいい友人なのだ。

ちなみにそのコピーのお礼は昼食をおごることでチャラになるのだ。

他愛のない話題でも僕らは話す。話題が問題ではなく話すことが重要だからだ。適当なことを言っただけ、からかったり笑われたりした後で、じゃあまた、と彼らは笑顔で去ってゆく。

彼らはおそらく他の仲間と合流するのだろう。

そのグループの輪の中に最近まで僕もいた。

僕が白昼夢のようなものに悩まされるようになり始めた頃のことだ。遊びにくる友人たちの前で自分がそうなることを知られるのが嫌で自然と彼らと距離を置いた。最近付き合いが悪くなったな、彼女でもできたか、とかいう内輪だけのワイドショーネタも早々に消え去り僕と友人たちは微妙な距離感に落ち着いた。その距離感はサークルの中でも同じだった。花見の後の飲み会に出なかったのも実際はそんな感情も含まれていたように思う。



そのせいで僕は彼女の部屋まで行くことになってしまった。

そして彼女の意見を鵜呑みにした約束をしてしまった。また彼女に会いに行くと。

実際のところ、高々何百円を返してもらいに行く必要があるのだろうか。おそらく僕が会いに行かなければ彼女と会うことは二度とないだろう。

授業の後はすぐ昼休みに入るのだけれど、僕の通う大学の食堂は何件もあるのに、学生自体が多く、いつも混雑するので僕はその時間帯をいつも避ける。大学の図書館の一階には学生のID番号さえあれば自由にネットを見られるパソコンが備え付けられているので、スポーツ情報を中心にだらだらとニュースを流し読みする。その後は購買部の書籍コーナーで雑誌を立ち読みする。そうしていれば、食堂へ生徒が出入りする数が逆転してくる。

それを確認していつものように僕は学食へ向かった。

今日はまだまだ人が多いみたいだ。並ぶよりも先に席の様子を覗く。窓際のテーブルにいた4人がタイミングよく席を立とうとしている。僕はそこへ行き、自分のカバンを椅子の上に置き、お茶をいれたカップをテーブルに置いておいた。この席は予約済みという訳だ。

そしてなかばぼうっとしながら僕は独りで食事を取る。友人たちと一緒に行動することがなくなっても、僕自身に何の感慨も浮かんでこないそのことに僕は気付かぬフリをしていた。食事を終える頃、ふらりと現れたサークルの先輩に席を譲り僕は食堂を出た。

いつものように学食で遅めの昼食を取った後、僕は彼女との約束通り原付に乗って彼女の家へと向かっていた。

前にも言ったけれど、僕の住む部屋から大学へは原付で南へ約十分ほど走った所であり、彼女の家はそれよりもだいぶ下った奈良県との県境の辺りにある。大学前の駅から線路沿いに延びる道をひたすら直進すれば僕の乗り過ぎてきた駅へとたどり着く。その日はうす曇で灰色の空だったけれど、その分風が生暖かく原付で走るにはちょうど心地よい風だった。僕は走りながらあの夜の彼女のことを思い出そうとした。

古びたラーメン屋でのお願い、真っ暗な道を先に歩いていく彼女の後姿、コーヒーを入れる姿など順をおって思い出そうとする。

なんとなく彼女の話した内容を頭の中から掴み沿うとしたけれど、僕が掴むのは彼女のシャツから除く白い肌と節のないつるりとした綺麗な指だけだった。彼女の指に触れることを考えていた。彼女の家に着くまでがとても早く感じた。

ただ駅の辺りにはあの日のような薄暗いイメージはなかった。僕は曲がるべき道を通り過ぎてしまった。Uターンして道を引き返すとあのときのラーメン屋があった。その日は定休日のように店には温もりといったものがまったく感じられず無機質な道の景色として溶け込んでいた。普段より気持ちゆっくりと原付を走らせ注意深く道を探しだした。

そして目的の曲がり角を曲がり、あの夜と同じゆったりとした上り坂を登っていくと彼女のアパートが見えてきた。その前につくまでは全く違和感がなかったのだけれど、注意深く見れば住宅地に建つこのボロアパートはやはり不釣り合いだった。食い荒らされたように骨だけになった屋根付の駐輪場に形だけの気持ちで原付を止め、二階へ上がる。

昼間でも廊下は薄暗く、人気はまったくなかった。しんみりとして肌寒く、かび臭い。

彼女の部屋の前に立つ。呼び鈴はボタンが取れ、配線が二本飛び出

している。僕はドアを軽くノックする。返事はなかった。

やれやれだ、人を呼んでおいて忘れてどこかへ行ってしまったんだろうか。何度かノックするが返事は返ってこない。しかたなくドアのノブを回してみた。

鍵は開いていた。無用心なのか、僕が来るから開けていたのか、会って二日目では性格を把握するには情報が足りない。

ドアを半分ほど開けてそこから中を覗くと彼女はいない。入ったすぐの畳の上に文庫本用のカバーの紙が落ちていた。特に意識も無く僕は僅かに自分で空けたドアの隙間に滑り込むように入り、落ちているカバーの紙を拾い上げた。紙には、お金を下ろしてくる、中で待ってて、と書きなぐってあった。

どうも彼女の言うこと言うことには僕の選択の余地というものがまったくもって含まれていないような気がする。一樣僕が来ることを前提にした行動であるようなので、とりあえずは彼女の帰りを待つことにした。

彼女がいないので僕は乱暴に靴を脱ぎ、部屋の真ん中にどっかりと座り込んだ。

枯れて乾ききった畳。靴下の上からでもざらついてボロボロなのが分かる。居心地悪く座り直す。閑散とした中に不釣り合いに見える白いシーツを被せてある畳まれた布団。几帳面に三つ折りにされている。その向こう側に山積みになされた文庫本。全部小説のようだった。どこかで聞いたことのある日本の作家以外にも外国の聞いたことのないような作家のものまであった。読書好きな人のようだ。僕の知り合いにはあまりいない。読むのは流行の服や情報の載った雑誌、漫画ぐらいなものだろう。僕もそうだといえる。僕の部屋にあるのは、あるのは雑誌、漫画、開くことのない大学の教材、それぐらいのものだ。小説などは中学生のときの読書感想文を書くために粗筋を読んで以来触れたこともなかった。山積みされた本の中から覗く本の題名を目で追う。

僕の興味が一定量を超え、そつと本に手を伸ばそうとしたとき、ドアの開く音がした。もちろん彼女だった。座った体勢から起き上がろうとしていた僕はとても不自然な体勢で彼女の前にいた。変な汗を掻いた。

「ごめん、待った。銀行ここから結構遠くて」

彼女の息は少し上がっていた。一応急いで帰ってきたのだろうか。

「いや、別に」

彼女はそう、とこのあいだは見せなかった企みのない笑顔で言った。僕は口を閉じたまま引きつった笑顔を作って見せた。それをかわすように彼女は台所に行き、薬缶で湯を沸かし始めた。

「とりあえず、コーヒーでもいれるわ」

あの夜と同じセリフ同じ動作。彼女のコーヒーを入れる動きは淀みがなく最初から決められているかのように流れてゆく。僕もあの夜と同じように彼女の指に見とれる。服は変わっていない。居心地の悪さも同じくだ。部屋の中は薄暗くすべてがくすんだ色を見せている。コンロの火の音だけが殊更大きく聞こえる。彼女は僕の存在など忘れてるようにコーヒーを入れる作業に集中している。頭の中を手当たりしだい探り話題を探した。

「平日の昼間だからかもしれないけど、誰もいないみたいだね、アパートの人たち」

しばらく彼女は答えない。僕は無視された気がしてなんだかここにはいけないような気までしてきた。彼女は左手を腰において

右手に持った薬缶でカップに湯を注いでいる。

ぴんと伸びた背中越しに彼女がやっと答える。

「下に三人、上に私を入れて二人しかいないわ」

ほんの一呼吸の間を持って彼女は続けた。

「本当は隣にもう一人男の人が住んでたの。でも、何か足りないものを借りるフリして部屋に無理やり入ろうとしたから、髪を切るとき使ってた鋏で太腿を刺しちゃった。血がいつぱいでた。悲鳴みたいな声出して自分の部屋に逃げてったわ。大家や警察に言おうかと思った、でも面倒くさい事になったらイヤだななんて思ってたら、二、三日したら引越してった。それからはこの部屋には誰も来てないの」

彼女は表情を変えず淡々と話し、淀みのない動きでお湯をカップに注いでいた。彼女の話に僕は返す言葉もなかった気のないフリをして軽く頷いて見せた。彼女はこちらを見てはいなかった。ゆつくりと僕の前へカップを置き、僕に正対して体操座りのように膝を立てて座った。僕のカップはまた取っ手がついているほうだった。僕は部屋の真ん中の畳一畳の中にいた。彼女はコーヒーに映る自分の顔を見るようにカップの中を覗き込んでいる。

ふと、これはなんだろうと考える。苦味という味でしか飲むものであると感じれないインスタントコーヒー。あの優雅な動きで彼女が入れたものとは思えない。そしてひどく懐かしい感じのする畳の座り心地。なによりも変な髪形をした一人の女性。そしてその女性と僕のくつろいだ姿の距離感。よほど仲の良い女友達とでもこんな距離感で僕は話さない。何より彼女と僕の間柄は知り合いという関係よりもまだ薄い。この現実に触れている感覚と僕の常識とのギャップが僕を混乱させている。それを何とかしようと思えばよい

のか僕は迷っていた。

「仕事してるの？」

また彼女はすぐには答えなかった。

彼女はゆったりとした動作で湯飲みのコーヒーをすすり、深く息を吐いた。この間が僕に世界に独りぼっちであるような気持ちにさせた。あるいは業とそういう気持ちにさせられているのかも、という気までしてきた。

静かに湯飲みを置いて彼女が言った。

「してるわ」

深い海の底から這い上がって息を吸い込むようにすかさず僕は言った。

「どんな？」

「ウェイター。オーダーを聞いて、それを客に出す。それだけ、ロボットにもできるわ。楽な仕事よね」

働いてもいない僕にはそれを楽と捕らえることにはいささかの躊躇があった。どうも話題を切り出し膨らませることの苦手な僕はここで話すべきことを探し当てることは出来なかった。

僕は変な間を作ってしまった。

何かとても嫌なことをした気分だったけれど、だいたい相手の頼みでここに来たのに何故こんなことに悩まなくてはいけないだろうと思いはじめた。だんだんとここにいることが不快になってきていた。彼女はねえ、といって僕を呼んだ。

それからしばらくはあの夜と同じく僕のことに対する質問が続いた。

僕が浪人を経てここへ下宿してきたこと、バイトはしていないこと、スポーツ番組ばかり見ていること、彼女なし、暇人、云々。

僕は言っても害のないことだけにはちゃんと答えた。答えたくないことははぐらかしていた。彼女もくどくは聞かなかった。彼女は飲み終わったカップを持って流しへ行き、二つのカップを手際よく洗い自分の手をしつこいくらいタオルで拭いた後また僕の前に座った。今度は出会った日のように膝が当たるぐらい近くに座った。僕は彼女を見た。彼女は真っ直ぐ僕の目を見ていた。それが分かっている僕も目を合わせなかった。彼女の服を見ていた。色落ちしたジーンズに胸の辺りにラインの入った白くタイトなTシャツを着ていた。そのTシャツの首元から覗く鎖骨の辺りは水が溜まりそうなほど窪んでいた。彼女の肌は白く、Tシャツの白色にはない柔らかい質感と丸みがあった。触れ合う膝の辺りから僅かに温もりが伝わっていた。同じ体勢で痺れてきた足を気にし始めたときに彼女は膝を抱えるように座りなおした。

「私のこと聞かないの？」

僕は考えるフリをした。人の事についての僕の意見はいつだって決まっているのだ。

「何をどう聞いていいか分らないよ。まだ会って間もないし……」

「家をでた一人暮らしの女性に心配事ぐらいあるとは思わない？」

一人暮らしの女性の心配事と僕にいったい何の関係性があるのだろうか、と思う。それでも彼女がそれについて何か答えを出せと僕に要求していることは立てた膝を僕の方へ少しだけ近づけたことで

分かった。彼女は少し首を傾げながらじっと待っている。

「押しかけてくる男を追い返すことの出来る女性に心配事があるのかと言われてもなあ……」

僕の答えはどうも彼女の望んだものとは程遠いようで、呆れたようにため息を力一杯吐き出してその不満を表現した。

「そんなんじゃ、女心の分かる男にはなれないわよ」

ほぼ初対面のような人に言われる筋合いの無い距離感の言葉だった。僕は単純に腹が立った。

「聞いてどうにか出来る事は誰が来ても同じことだし、どうにもならないことを簡単に他人に話すなんて言う人はそういない。自分から話すようなことは、どうにもならなくても聞いて欲しいことだ。ただ聞いて欲しいことだ。そうだろ？」

なんでこんなことを言ったんだろうと思った。思ったことを何も考えず口にしたのは随分久しぶりなことのような気がする。僕はまた彼女が近すぎることで混乱していたのかもしれない。

意外にも、彼女は僕の言ったことを頭の中で反芻するように大きくうなずいて見せた。  
僕の混乱は続く。

「僕には人を救ってあげられるような素晴らしい言葉を生み出す頭もないし、人の何かを背負うような責任感も持っていない。だから僕が聞くのは相手の話したいことだけだし、ただ聞く、それだけだよ」



これは嘘だ。気持ちの悪い嘘だ。相手の話したいことなんて僕は聞きたいと思ったことなんてないのだ。ただそれは人とのつながりを保つために必要な許容である。それが今までの人生で学んだ自分というものを隠すのに一番効率のよい手段だと知っているからだ。

「優しいのね、意外と」

「違うよ。ただ面倒くさいのが嫌なんだ。何も出来ないようなことに答えを求めようとすることも、何かを背負ってしまうことも」

なんだか弁明している気持ちになった。膝を立てて座っている彼女は膝に乗せた両腕に顔をねかせ、虚ろな目をしていた。

彼女は僅かな笑みをその口元に添えて優しく言った。

「誰かに頼られたことがあるのね」

何も考えず思いつきでしゃべったのはいつ以来だろう。

自分の話した後に必ずやってくる羞恥心と後悔の入り混じったとても嫌な気持ちのことを忘れていた。でもこの時の僕は話さないわけには行かなかった。きっと彼女がそうさせているんだ。

胸の中のざわつきと何かが過去の自分を呼び戻して僕を弱気にさせた。僕はいつの間にかこれまでの経験から自己防衛のため身につけたはずの殻の中にいた。

「そう、だね…。過去の経験からの言葉かもしれない」

「相手の問題を解決できなくてつらい思いをしたの？」

「つらいのは話されたことじゃなく、相手がその話に対して何の解

決をも求めていないことに気付かなかった自分の愚かさに対してだ」

僕の頭の中で古い思い出がよぎった。そして嫌な気持ちになった。不安定な感情が僕の中で暴れている。思い出したくもない思い出を仕舞い込むのに必要なだけの力を僕は未だ持ちえていない。自分のなかに向いた意識を彼女の声が現実世界に戻す。

「自分に厳しいのね」

「そうでもない。今はそのことを思い出すことも他人のことを考えることもすべてが面倒くさくなっただよ」

「そういう気持ちは私にもあるわ。色んなことが面相くさくなるの、だから家を出たんだもの。結構スキよ、その後ろ向きな考え方」

と、こちらを見て笑った。

後ろ向きな考えと言われてしまった。ただ僕は自分が面倒くさがりなのは認めるが、前向きには生きてきていると思うのだけれど。彼女にしてみるとそれも同じことなのだろうか。あまり話したことのない自分の内側の話を会って間もない彼女に話していることが不思議だった。

何も持たずに他人の前に立つことは危険だと知っていたはずだ。人に自分の内側を晒さらすことは自分の感情の一部を支配されるのに等しい。

何故なら人は他人の気持ちを完全に理解しうることは出来ないし、いつのときも人間は無邪気に他人を傷つける生き物だからだ。

中途半端な理解で人を決め付けたり、他人の会話などから得た他人の情報を軽々しく使うことは相手に目に見えぬ血を流させること

になる。そもそも他人の屈辱や怒りを人それぞれがしっかりと理解できているなら、衝動的な殺人は起こり得ない。外的要因による自殺もだ。

だから僕はできる限り僕自身のことを人に話さなかった。誰に対する怒りも殺意も僕の生活には無意味であるし、それを持つことはエネルギーの浪費だ。

僕はそれを学んだはずだった。ここにくるまではうまくやりぬけているはずだった。彼女との僕の関係は危険すぎた。あくまで僕にとってではあるけれど。彼女といることはさらに僕を混乱に導く。

この世界、といっても僕と彼女のいるこの部屋という空間にだけすべてのスイッチが切れたような静けさがあった。僕はその空気を変えるような話題も言葉も何一つ見つけられない状態になかった。彼女も何かをこれ以上話そうという気は全く無いようだった。

どういうことにしろ、彼女の上目使いに見た僕への視線を外せずにいる。

あまり人に視線を合わせられるのが僕は好きではない。かすかでも自分の内面の弱さにつながるものが発見されるのが嫌だからだ。

彼女の目は大きく、僕の目というよりは、僕の目に写る彼女自身を覗き込んでいるようだった。

僕も彼女の目の中を見た。

彼女の目を見てもその中は思いのほか深く僕は映っていなかった。

「暇だね、何かしようか…」

限りなく自然で透明な彼女のその声はこれまでと違って艶があっ

た。

僕は聞き取れなかったようなリアクションをした。

彼女はもう一度は言わなかった。

ただ、何も言わず両手を畳につき四つんばいの姿で僕に近づいた。彼女の顔には、微笑みに忍ばせた企みとその企みが必ず成功するといったような傲慢にも似た自信がうつっていた。

そして彼女は僕の首に手を回した。

彼女の腕から伝わる彼女の体は見た目以上に細く華奢に感じられた。

どこかで嗅いだことの在るシャンプーの匂いがした。

僕が理性を保っている最後のときに考えることの出来たこと。

財布にコンドームが入ってたっけ？

部屋の隅に眼鏡を投げた。僕は乱暴に彼女のシャツを脱がした。

彼女のしぐさ、彼女のぬくもり、それらを落ち着いて感じる事が出来るようになるのは少しだけ後のことだった。

この日から僕はいろんな意味で日常を失い始めていた。かといつてとくに最近の日常に名残などまったく無かった。暫く悩まされていた白昼夢も見なくなるのだけれど、彼女との生活自体を白昼夢だといっても可笑しくはない気がした。

もちろんそれは少しだけ後になってからである。

ともかく、ひどく夢と現実が見分けにくい頃のことだった。

## 2・僕と彼女と眼鏡（後書き）

完読感謝。つづきます。

### 3 ・性欲と裸体と眼鏡（前書き）

4 話目です。読んでやってください。

### 3・性欲と裸体と眼鏡

何かを振り返るとき（それはもちろん、過去を振り返るという意味で）、憶えている内容よりも憶えていないことに僕は注目する。そして自分の過去の中ですべてどこどこ記憶がごっそりと抜け落ちていくことに奇妙な恐れを抱くことがある。

それはその部分に何があったのだらうかということに対する恐れでなく、結構な量の記憶、この量というのはもちろん主観的ではあるけれど、それが抜け落ちていくはずの自分がまったく普通に生きていけていることに対してである。僕が僕自身であるという認識は今まで生きてきたことを過去から現在まで経験し記憶しているからこそできることであるはずだ。記憶喪失患者の自伝的本や再現ドラマでもあるように記憶が喪失した人間は自分が誰であるかを認識できない。そこに残るのは自我、自分が自分であることは認識できる。それは記憶を無くした瞬間から新たな記憶、過去が出来上がっていくからに他ならない。

そこに見えてくるものは違う自分の始まり。

例えば、痴呆症。

現在の記憶が飛ぶ。そして過去に遡った記憶が突如として湧き上がる。



そのときは昔のその人が覚えているところまでの時代の自分になっ  
てしまう。そうなったときには、それ以降がまったく消えてしま  
う。死んだはずの誰かをどこにいったんだとか、まだ生きている時  
代の記憶で生活してしまう。実際症状が重く忘れている期間、それ  
が取り戻せないとしたらそれは昨日までしたその人が消えてしま  
うことに等しいんじゃないだろうか。

思い出せないだけで消えてはいない記憶の部分それは必ず存在す  
る。例えばその消えていない部分に現在いまの自分が落ちたとするなら、  
僕が僕であることは消えてしまうのではないかと考えてしまう。

振り返る自分はいつもどこか自分とは違う人間のような気がする。  
考え方もモノの見方もすべてが別人のそれであるように思えてしま  
う、そんなことがたびたびあった。

それは随分と若い頃の話だ。弱く小さな自分を隠そうと必死にな  
っていたことのことだと思う。誰かから何かを見つけられることを  
恐れ、自分の中に誰がいて、何が潜んでいるのかを恐れてもいた。  
そうして生きてきて僕はよく思う。

隠された僕はどこにいったのか？

僕がいつ違う僕となったのか？

そして隠されもせず、消えもしないで僕の目の前に浮かぶ彼女も  
しくは彼女との生活、そこに生きている僕。今も消えず、いや消せ  
ず色あせもしない世界、そういったものが僕の中に存在する。

そんな世界に住んでいる彼女について僕はいま話している。

何度思い返してみても第一印象としてはまず、彼女は髪型が変だ。

以前にも言ったが、彼女の髪はボサボサで僕に掃除の道具を連想させる。この部屋に来る前までは彼女は結構髪が長かったらしく新しい生活へのケジメなのか、この部屋に住み始めるその日に自分で髪を切る（どこにでもある一般的な<sup>ハサミ</sup>鋏）ことにしたそうだ。その成れの果てが僕と出会ったときの髪型だった。その彼女の髪が伸びてきたので一度僕が切った。とは言っても彼女の髪型の尖ったところを切り、全体に丸みをもたせ、斜めに切り揃った前髪のラインを真っ直ぐにし、日本人形のようにベツタリと厚みを持った前髪を鋏を縦に使って少しすいただけだ。結局普通のおかつぱ頭になっただけれど、彼女は鏡を見ることもなくただ両手でわしゃわしゃと触った後で頷き、いいと思うと一言だけ言った。自分の髪型を見るための鏡は部屋のそこにある共同トイレの洗面台についているだけで、彼女の部屋にはなかった。その鏡でさえ鏡を形成しているガラスの内側から曇っているらしく、鏡の中の世界はシャガールの描く絵のように幻想的でいつもモヤモヤと霧が掛かっていた。彼女がそこに映ると随分と昔に描かれた肖像画のようにぼやけている。彼女はバイトに行く前に一度そこに自分を写し、手櫛で髪を気持ち直して出て行った。それ以外では彼女が鏡を見ていることを僕は一度として見たことがない。

再び彼女の部屋に訪れたときから雪崩のようなほとんど否応ない力、彼女の誘惑もしくは僕自身の有り余る欲求によって僕自身の生活の流れが変わってゆくだけけれど、僕は暫くその力に抵抗を見せようとした。幼稚な強がりだったとしても、それを認めるのは難しい作業だった。なぜならその強がりとは他人に見せる（この場合、彼女）ためではなく、自分自身に示すためのものだったからだ。己が理性をもって自らの行動を構築しているという態度が過去の自分と決別しているという何よりの証明になっていた。もちろんこれもまた、自分自身に対しての証明でしかないのだけれど。それが奇妙な女性との出会いでこんなにも脆く崩されるとは（もしくは崩れるとは思っていない）思っていた。その原因の中核が理性とはほぼ対極にある欲望であるのだから始末に終えない。

彼女を抱いた日は自らがしたことの意外さとそれを自分の中でいかに昇華するかということに随分と悩むことになった。僕が理性の外に飛び出し、再びこの現実を取り戻した後、僕は彼女の部屋を出て自分の下宿へと帰った。

思い出しただけで自分が恥ずかしくなることがよくある。そのときのことは今までで一番だったように思う。彼女の細く華奢な体がイメージほど骨ばっていないで柔らかかったことや形のよい乳房の温もりを思い出すことよりも、自分が何か他人の前で普段出すことも無いような自分をさらけ出していたことに対する恥ずかしさでいっぱいだった。

それでも僕はまた彼女の部屋を訪れることになった。彼女は僕が気恥ずかしさの中で服を着ている傍で悪戯な笑みを見せながら、「悪いけどまた明日来てくれるかな、結局お金返してないし」と言った。

僕はその言葉に抗うことはなかった。

ただ、次の日から僕は彼女の部屋を訪れ、コーヒーを入れる彼女の姿を眺め、彼女の一方的な話を聞き、それが終わると今日はもう帰るよと言って部屋を出て原付で自分の下宿に帰るということを単純に繰り返した。その繰り返しがいたいということなのかを僕は何も考えなかった。それを考えることが僕自身を今までに無かった変化へと引きずり込むきっかけになってしまつような恐れを感じていたからだ。

でも、そんな無駄な抵抗は彼女によつてすぐに打ち碎かれることになる。

いつものように彼女の言うことを聞きいている間にいつのまにか生まれた沈黙の中で、久しぶりに彼女は僕に質問を投げかけた。

「あなたは何故自分ことを言おうとしないの？」

「結構話している気がするけど」

「わたしが聞いたときだけでしょ」

「そつえばそつだね」

「それは何故？」

「なぜ？」

「私が聞いているのよ」

「分かつてる。自分に聞いているんだ。何故かつて」

「わたしは何でも話してるわよ、あなたに」

君が勝手にしゃべったんだ、と思った。

それでも彼女の言葉の中にはうっすらと怒りのようなものが含まれていることが分かっていて、なんだか酷く後ろめたい気持ちにさせられていた。僕は言葉を選んだ。

「昔から苦手なんだよ、自分のこと話すのって。どこから始めてどこで終わるのか、結局何が言いたいのか、そんなことがまとめられないんだよ」

ひどく言い訳くさい言葉だった。それが彼女の望んだ言葉でないことは明らかだった。彼女は何故こうも一方的な考えを押し付けるのだろうと思う。でもその言葉や率直な態度に僕は腹が立つよりも先に動揺してうまく考えることが出来ないでいた。

彼女はそれ以上何も言わなかった。彼女と僕がした唯一の喧嘩だった。でも実際はこの喧嘩は彼女の作戦だったような気がしている。僕がまだこの世界（単に六畳ほどのボロい部屋に過ぎないが）に入り込むことを恐れていたことを見透かしていたかのように、そしてそれが無駄であることを知っているかのように。僕は随分と後味の悪い気持ちで再び自分の下宿に帰った。

僕は一週間ほど彼女の部屋へ行くことが出来なっていた。そんなことを彼女には伝えておいたのだけれど。彼女は電話というものを持っていないのだ。連絡をとる必要のある人がいないのだ、持つ必要もない。彼女のいない生活は何か不思議なものだった。それまではじっと自分だけの生活にとっぷりと漬かっていたはずなのに。自分の下宿に帰って独り布団の上に寝転がり、彼女の姿と言葉、アノ

部屋を思い出す。この部屋とアノ部屋の違いはいったいどういうものなのだろうと思う。遠くにあるという感じではなく別の世界にあるように感じる。そして何より彼女が存在している世界と存在していない世界ということが非常に大きなことのように感じる。そう考えていくことに時間というものがとても遅く感じられてくる。自分の中にこらえようもない何かに対する飢えと渴きがきていた。今思い出しても彼女と話したような内容は自分の中だけにしまっておいたようなことだった。ただ僕はそれを彼女に話してしまうことで自分が変わり始めているのかもしれない。もしくは単純に僕の性欲の飢えが彼女に向かっていたのかもしれない。

どちらにしろ、このときの僕は色んな意味ですごく彼女を求めている。すごく彼女に会いたくなかった。

僕が彼女の部屋に行くと、彼女は部屋の隅でこれ以上ないくらいに小さくなって置物のように横になっていた。彼女の傍には本が散乱していた。

彼女は「おかえり」、と言った。

意外な言葉だったけど、反射的に僕は「ただいま」、と喋ってしまった。

彼女はそれから一言も口を利かないままゆっくりと立ち上がり僕から背を向けて湯を沸かし、コーヒーを入れる準備を始めた。

畳一畳ほど離れ流しに立つ彼女との距離がひどく遠くに感じられる。

何か息詰まったような空気感と彼女との関係に動揺した僕は、堰

を切ったように彼女と会わなかった一週間のことをべらべらとしやべった。そこに内容なんて全く無く、ただ一日目から順にその日したことあった出来事単純に話した。話さないわけにはいかなかった。彼女は何も言わなかった。そしてまたコーヒーを入れようとする。

その姿に以前見たときのほっとするような気持ちは沸かず、ただただ小さな子供の頃を感じたことのある気付けば周りに誰もいなかったときのような不安が僕を襲った。

そんな僕の気持ちをどうしようもなく揺さぶったのは、彼女がまたコーヒーを持って僕のすぐ傍へ座るといふ行為だった。僕は無言でコーヒーを飲んだ。

その日、僕は自分から彼女を抱いた。なんだかひどく焦っていた。一週間空いた時間を必死で取り戻すように。彼女がどういふ表情をしているかなぞ気にしている間がなかった。

気がつくとも僕は疲れて寝てしまっていた。窓越しに月が見えた。そして彼女は僕に背を向け、月と向かい合うように静かに眠っていた。僕はそっと布団を出て部屋の隅にある玩具おもちゃみたいな小さな冷蔵庫からミネラルウォーターをだしてごくごく飲んだ。冷たさが喉に心地よかった。僕は深く息を吸い込み、ゆっくりとお腹から空気を吐き出した。自分の体がこの部屋に馴染なじんだ気がした。

彼女の背中をじっと見つめた。贅肉のまるで無いシャープな背中だった。背骨のラインが深く凹凸をだしている。僕はその背中を見ながら、彼女が起きていることを感じる事ができた。彼女はピクリとも動かなかったけれど、この部屋の空気がそれを知らせていた。冷蔵庫の横の壁にもたれるように座り、僕は言った。

「君は僕がいない間、何をしていたの？」

「バイトして本を読んで、その繰り返し。他に何もないので、ここには」

「そう…」

掛けられた布団をずらさないように上手に振り返って彼女はいたずらに笑っていた。いつもの彼女だった。

「わたしとセックスしている時のこと考えた？」

「考えた。ずっと考えてた」

彼女は肩肘をついて手のひらに頬をのせ、その姿のまま話し出した。

「あなたにはまだ隠している何かがある気がする。それを表に出されることを嫌がるほどの何かがね」

それは確かに存在する。ただその隠していることは僕自身そのものなのだけれど。彼女は話を続ける。

「少なくともあなたはワタシのここへ来た理由を知っていて、ワタシはあなたが何かを隠していることを知っている。それが私たちが他人でない関係にある唯一の共通のもの。」

それ以外の体の関係はどうなのだろうかとも思うが、僕は軽く二、三度肯き同意する。

「あなたにも今までつらいことがあったと思うわ。でも、ワタシに



もそれはあったのよ。他人には何でもないことにしてもね」

「そういう気持ちわかる？」

「わかるよ」

月夜の仄暗い中で僅かに微笑んだように見えた彼女は布団の中に僕を向かえ入れようとしているように感じた。僕は彼女の隣へ潜り込んだ。彼女は僕の肩の辺りに頭を寄せ、もう一方の肩を掌で掴んだ。僕はじつと天井の方を向いていた。

「ねえ、人生はやり直しがきくと思う？」

「犯罪者みたいな台詞だ」

「結構まじめに話してるんだけど」

「ほんとに犯罪者なの？」

「くだらないこと言わないで」

冷たくあしらうような声で僕にそう言った彼女はほんの少しだけ笑って見せた。

それを僕がこの眼で感じる事が出来たことが、彼女との距離をうまく縮められた理由だとは思う。

「失礼。わかった、まじめに答えるよ。人生にやり直しなんかきくわけないよ。生きていくなんでコトはそれ自体で周りと嫌でも関係を持っていくということだ。そうであるならば、やり直すということ

とは自分の関わってきた人たち全員の人生をやり直すということになる。そこに個人的な思いだけですべてをゼロにすることは不可能だ。もし誰かを殺めたとして、やり直すなら死んだ人間が生き返らなければやり直すことにはならない。誰かを傷つけたなら、その傷が回復するのではなく傷自体が無かったときに戻らなければやり直すことにはならない。これはやり直すという言葉のみを正確に捉えた場合のことだ。ただ何か失敗や間違いを起こしたとして、ただ後悔するのではなく反省をして次に生かそうという気になるなら先の人生には望みがあるのかもしれない。それでもその時失ったものはやはり戻らないけどね」

せつかく彼女に近づいたような距離感の中で、何故こんなことをいったのだろうと思う。悟りきったようなスカした台詞だ。随分と馬鹿馬鹿しい言葉を思いついたものだと思つても思う。彼女はそれに同意も反対もしなかった。僕は不安になってまた彼女を抱くことになった。夜が明ける頃には眠りに落ちた気がする。

よくよく考えてみれば実際のところ、今まで持っていた他人の僕との一方的な距離感の関係はこと頃の彼女との奇妙でやらしい生活によって見るも無残に打ち砕かれることになったのだと思つた。

彼女との生活について話す。

こうして出会った頃の僕の生活は自分の部屋と彼女の家を往復する間に行われていた。

彼女と僕との生活はいたってシンプルにかつ、ワンパターンに彼女の部屋においてのみ続けられた。

本当にこの部屋には何も無い。

そこには六畳の上にたくさんの本と小さな布団と二人と、そしてセックスしか存在しなかった。

部屋にいて僕らはよくセックスをしたが、始める 求める のはいつも彼女の方からだった。いつも決まって彼女は僕にキスをする。彼女はいつもさりげなく、僕の隙を突いて、僕の死角を突いてキスをする。僕が横になろうとする時に、雨が降るのを気にして窓を閉めようとするその時に、僕が帰ろうと玄関のドアを開けて彼女にさよならを言おうと振り向くその時に。それには何か捕食されるようなイメージがあった。いうまでもなく、僕が食料で彼女が狩獵者である。僕と彼女の両方とも眼鏡を掛けている。そのせいでキスをしている間、眼鏡がカチャカチャと顔に当たって痛いだけけれど、彼女は全く気にもしていないようだった。なので、そういう時は決まってもいつも僕が自分のと彼女の眼鏡を外した。僕は彼女の家に行く度、眼鏡を外した。しかしながらセックスにおいて彼女が行動するのはキスをする時だけだった。それはまるで僕の欲望を湧き出させるためだけのように、欲求という蠟燭に火を着けるマッチのように（後は僕が燃え続けるだけだ）、彼女は僕に身を任せるだけだった。それに気付いたところで僕は抗うことは出来なかった。そして僕という蠟燭はその時々を持つ長さの限り、火の消えるまで燃え続ける。実際、いつも僕は興奮した。そして僕は欲望のまま、その尽きるままに自分を解放した。僕の目標のない学生という時間を持て余した身分と、彼女の何もない独り暮らしの状況が奇しくも僕に僕自信も見なかったこともなかった一部分を見せることになる。

端的に言えば、その六畳の畳の上で僕の性的欲求の全てが明らかになることとなった。

人は生まれでた時からストレスを受けて成長する。産まれた時の人間は中心から外へと四方八方に流れ出る欲の塊といって良い。その欲の流れが外的な障害、いわゆるストレスによって色んな角度から接触を受け、押さえつけられながら人は成長する。押さえつけられた部分によって外部と自分との距離を知り、自分を知る、つまりは自我を得る。この内側の欲と外部との境界線が一人の存在といつて良いものでそれがひとの性格でもある。欲望のまま動くようだ、と言われるような人は成長の過程である部分にその境界線を引くことが出来なかったからだとも言える。僕は今まで感情や欲望を単純に人前に現せるほうではなかった。それによって損をすることはもちろんあつたけれど、自分が自分のままでいられるという点では、それに納得できていた。

この時の彼女との行為は僕に自分というものの境界線に大きな欠落があるのではと思わせる事となった。彼女がバイトから帰ってきた後、そしてバイトのない週末の間、僕らはその時間の殆どを布団の上で過ごした。

つまりはそう言うことなのだ。

この部屋のいろんなことを後からだんだんと知っていくほどに僕は知ることの意味を失ってゆくように感じる。そして自分というものが自分自身のことに対していかに無知であったかということ思い知った。

彼女の部屋のカーテンは初めてあつた日以来閉じられていない。春がしばみ始め、夏がゆっくりと咲き始める気配を感じた。エアコンのない彼女の部屋で窓は開け放たれていた。

梅雨に入った。

長雨の止む間際のさあつと細かい幾本もの糸を垂らしたような雨。しっとりとしてそれでいて生温い。僅かに重く暖かい半身。雨のやんだ灰色の景色から微かにのぞきだす青い空、窓は開いていた。覆いかぶさるようにして寝息を立てている彼女のぼさぼさの髪越しに見えるその青がオレンジに染まるのをじっと眺めていることがよくある。そしてこの部屋について考えた。何の変哲もない古びた正方形の部屋。いつしか僕はこの部屋の一部となった。ここに来てからしばらくの間は僕にはそのことについて考える隙間なんて何一つなかった。僕が見ていたのは彼女の顔、彼女の肌、胸、お尻、陰毛、吐息、彼女から覗くひとつひとつを僕はゆっくりと自分の体に染み込ませるように手や舌で触れ視覚から来た彼女の情報を触覚や記憶に取り込む作業に没頭していた。そして流れ込むように眠りに落ちていく。そしてまた目を覚ます。僕はそれを繰り返す。

ついこないだまで繰り返されてきた退屈な日常とはかけ離れた繰り返すこの日常、この今の生活が退屈に感じる日もやがては訪れる

のだろうか。

僕は寂しいと叫んでは何かの一部になろうとする。そして自分が一部となった世界が退屈だと叫びまた飛び出していく。僕は孤独を持ってしか他人を必要と出来ず、退屈をもってしか自分を認識できない。この繰り返しの中の人生を今の彼女との生活が変えてくれるのだろうか。

彼女の頭が揺れ、僅かに触れる彼女の髪の毛をこそばゆく感じて体がひきつる。彼女の手が僕の胸辺りにそつと置かれる。

彼女の手は温かい。彼女は自分の体を僕に押し付けるようにして首を持ち上げた。

「何を見ているの？」

「部屋の中」

「狭い部屋ね」

「この部屋は確かに小さいけれど、考えようによっては小宇宙のようにも思える」

疲労と欲求発散の充足感による気だるさの中で寄り添い丸くなつた彼女の耳元で僕は恥ずかしげもなくそう言った。どんな愚にも付かない考えも想像も浮かんで消えてしまふ頭の中の出来事のように僕は素直に口に出した。誰もいない内側の世界なら何を言っても何を考えてもだれも批判しないし誰も笑わないのだ。

彼女はこちらを向かない。部屋の窓側の隅っこをじっと見つめたままのようだ。

「たまに変わったこと言うのね。哲学みたいなこと言う」

「これをもし哲学というなら、誰でもあると思うんだけどな、自分の哲学みたいなものは。他人には言わないだけで」

「あなたってそんなロマンチストだったっけ」

声は鼻に詰まってこもって聞こえた。

「まさか。無限に広い宇宙をこの小さな部屋に見出そうとしているんだ。僕はれっきとしたリアリストだよ。ただそれは僕の内側にあつたんだ。外側にあると同じぐらい広く、先の分らないくらい深い深い欲求の宇宙が」

「性欲の宇宙？」

肩越しに動く彼女の表情がいたずらににやけたのがわかった。

「そう、だね」

言ったことが本当に馬鹿らしくなってくる。僕は本当に馬鹿なのかもしれない。でもこの時はそれでも良かった。

「私とセックスしている間にそう思ったの？」

「そう思い知つたんだよ」

「衝撃的だった？その自己性欲の発見は？」

「衝撃的自己発見と言って欲しい」

「じゃあ、びっくりしたワケ？」

「うん、それに恥ずかしかった」

「今、布団も掛けしないで全裸で寝ていることより？」

「好きな子に書いた手紙を人前で読まれることぐらい」

「そんなことがあったの？」

「例えだよ」

「じゃあ、居眠りで電車を降り逃すくらい？」

「悪くないね。」

そう、僕がああ電車を降り過ぎすことがなければ、今のこの生活は考えられない。

僕はあの白昼夢の中の生活が繰り返されていたとしたら僕はいたいどうなっていたのだろうか。

たわいもなく行き場のない二人だけの会話はセックスと彼女のバイトの間において絶えず続いた。この部屋には過去も未来もなかった。現在の今<sup>いま</sup>だけ、そこにしかなく、そこにしかいらなかった。

セックスという行為でのみ体の中のエネルギーを使い果たしている気がしていた。それでも何かを失っているという感じはまるでなかった。それだけこの頃の僕には他に何も持たなかったということなのだろう。



しばらくの間気付かなかつたけれど、僕はここにくるまで悩まされてきたあの白昼夢のようなものを見なくなっていた。自分の下宿にいるのは授業に必要な荷物を取りに行くときだけだ、そのせいであるのかもしれない。それにこの彼女の部屋でいくら白昼夢を見てもすべては許されるものであるようにも思っていた。もちろん、確信や自身は毛ほども無いが。

彼女の住むアパートについて話す。

彼女はこのアパートには彼女以外に何人が住んでいるといったけれど、僕がいる間や彼女の部屋へ行く途中や帰る途中、その時々一度してこの住人に出会ったことがなかった。ここに来はじめた頃はそんなことを考える余裕など僕にはなかった。ただ、この部屋にいて夜中に窓を開けて月の出た蒼い空をぼんやり見ていると恐ろしく静かで人の生活感や雑音がまったく聴くことができなかった。そのせいもあり彼女が寝息も立てず死んだように寝ているときには、何もない月の上から独り地球を眺めているような気持ちになった。そして朝を向かえ、まどろんだ浅い眠りの泥に蹲っていた僕の頬がちりちとガラス越しに遠慮も無く射し込む日差しに焼かれている。目を開けようものなら刺すような強さを持った光が僕の網膜を襲うことは分かっている。僕はぐるっとうつ伏せになり、頬の熱さや顔にまとわりつく眠気の残りを剥ぎ取るように両手で顔をこしこしと拭いた。残った眠気を振り払うように猫みたいに体全身を伸ばした。僕が起きると必ずと言っていいほど彼女は流しの前に立っていた。

彼女のコーヒーを入れる後姿をじっと眺めながらここに住む住人

のことを聞き出そうとした。

「以前にも言ったけど、本当に誰もいないような感じがするね」

「そうね」

「君の隣に住んでて、出て行った男の人の他に住んでる人であったことある？」

「あるわよ、一階に住んでるおばさん」

「他には？」

「その人だけ、他の人には会ってない」

「でも、もう何人かいるんだろ？」

「おばさんがそう言っただけ。直接見たわけじゃないの。その必要もないし」

「会ったのは1階のおばさんだけか」

「そう、大家もどつか遠い場所に住んでて、このアパートの管理はそのおばさんに一任されているの」

「よっぽど信頼されてるんだね」

「どうかな、興味ないわ。私に必要だったのは人間関係じゃなくて場所だったんだもの」

彼女はこういつときいつもの冷めたような顔で、抑揚のない会話をしている。彼女の笑顔は僕から何かを聞きだすときの悪戯な微笑と自分のことを話すときの自嘲的な悲しげな笑み、そして僕がつまらぬ話で彼女を笑わそうとするときにみせる僕の話がどれほどくだらないかを表現したかのような蔑んだ笑みだけだった。

彼女の考え方は極端であったけれど、僕はこの現状を二人だけの世界をそれなりに楽しんでいたせいで特に気にも留めてなかった。布団の上での僕らの声が部屋から漏れ出ている心配は以前にティッシュとともにゴミ箱へ捨てた。すでに自分に必要でないものを気にするような社会性は存在していなかった。それはどこかで望んでいたものかもしれない。今まで自分が望んだものが手に入った経験など、何度振り返ったとしても思い出せもしなかった。なのでそれは僕にとって嬉しいことでもあった。

でも、そんなものは意外なほどすんなりと打ち砕かれるのが世の常である。

なぜならば、望みを砕くような変化の始まりはそれに気付くずっと以前から訪れているものなのだ。

午前中のうちに彼女と二人で出かけようとしたとき階段から降りるとそこに彼女以外の住人が初めて顔を出した。僕がその突然の登場に驚いている横で彼女は当たり前のようにその住人に挨拶をした。

「こんには」

五十代ぐらいのおばさんだった。

おばさんは恰幅がよく、大型哺乳類を思わすような体型をしていた。

膝が悪いらしく、右足を引きずるように歩くため、その動物めいたイメージはより強いものとなっていた。

髪の毛にはたくさんの白髪がのぞき、伸びた髪を後ろできっちり結び丸め込んでいた。

おばさんはレンズの黄色い眼鏡をかけていた。

顔は浅黒く、肉体労働者のように長時間陽に照らされた時にできるような深く刻まれたしわが印象的だった。このおばさんにはどことなく非日常というか、影のある感じがした。人を寄せ付けない、信用しない警戒心の強さが体から出ていた。しかし、それはとげとげした他人を不快にするようなものではなかったけれど、相手を好き嫌いではつきりと選り分けようとするタイプのものだった。それでも僕が感じた最初の感情は嫌悪感だった。それが何故かどこからくるものかはこのときは分からなかった。結局は挨拶ひとつ（彼女が一方的にいったただけでおばさんは一言もしゃべらず笑顔ひとつ見せなかった）しただけでおばさんの横をするりと抜けていった。僕は半ば慌てて彼女についていった。ここの住人でない僕にもおばさんは一別もくれることは無かった。僕は彼女に追いつき、おばさんとしつかりとした距離が空いてから質問をした。

「あの方が君の言ってたおばさん？」

「そう、見たのは随分久しぶりのことだけど」

独特な風貌をもったあの人物に対して彼女はまったく興味を示し

てはいないようだ。気にしている僕のほうがおかしい気分になるよ  
うな言い方だった。

ここに新たに登場した人物はその日を境に少しずつ僕らの生活に  
現れだした。僕はそれに関してできるだけ気にしない様にした。

その変化とともに僕の生活も少しずつ変わり始めていた。

大学へ行くことへの理由も行かないことへの理由もすべてがどん  
どん曖昧になってきていた。ただ僕は彼女の部屋へ行くことが選択  
肢の一番目に来ていることは間違いない。それがただ自分の性欲を  
満足させるといういやらしい理由が多分に含まれていることは疑い  
ようも無いのだけれど、それだけでなく彼女自身とこの部屋をな  
より僕は気に入っているのだと自覚するようになっていた。

週末になり僕は出なくてはいけない（出席が成績にかかわる）授  
業だけを終わるとさっさと自分がいた現実的な世界を離れて彼女の  
部屋へ向かった。そして原付を止めて彼女の部屋へと続く階段に向  
かおうとすると一階に並ぶ部屋の一部屋の玄関の前でこそそこそと動  
く肉の塊を見つけた。あのおばさんだった。おばさんは地面にまば  
らに生えた雑草を抜いているところだった。それを発見したと同時  
になんだか場の空気が酷く居心地の悪いものになっていることに僕  
は気付いた。そして早くこの場から離れてしまおうという気持ちで  
階段へ逃げ込もうとした矢先、地面に蹲っていたおばさんの顔がぬ  
つとこつちを向いて立ち上がった。

少しとはいえ大学生生活という現実的な世界を過ごしてきたせいか、

彼女と二人だけのような無防備な状態でおばさんの前に立たずにすむことができた。自分の動揺や小心さを見抜かれぬよう無表情で口をまっすぐ一文字に閉じ、僕は軽く会釈した。

「彼女なら出かけていたよ。買い物に行くと言ってた」

「そうですか」

僕は彼女の部屋へ早く入りたかったけれど、おばさんは老朽化したアパートの階段に折れるんじゃないかと思うほどの大きなお尻をどっかりと腰を落とした。おばさんの横を通り抜けるスペースは一人分なかった。おばさんはタバコを取り出し、火をつけ中身を吸い取る程の勢いで吸い、魂まで抜け出てるんじゃないかというくらい沢山の煙を吐いた。

おばさんは僕を見た。

「あなた、あの娘の彼氏かい？」

「どうでしょう？」

「わたしが聞いているんだよ」

「それに近い存在だと思います」

「付き合うまでいってないということかい？」

「そういうわけじゃないです。ただ一般的な恋愛の過程をとおってきた関係ではないと言つことですよ」

「なに言ってるか分かんないよ」

分からないように言っているんだよと思った。

「僕たちは恋人同士のような生活はしていますが、付き合ったりか付き合わないとかいう確認をしていないんです」

「なんだい、だらしないねえ、それがいまどきの付き合いかたかい」

「どつでしょっ?」

あなたに言われる筋合いも無いことだ。

おばさんは、はぁ、と息を吐き出し腕を組みなおした。呆れている意思表示だ。でも僕にはいまどきの付き合い方なんて知らないし、昔のことだつて知らない。

おばさんは僕をじっと睨んだ。

「あの子は危ないよ」

おばさんは低く重たい声で言った。声のヴォリュームは小さいが、体の芯まで響いてくる声だった。ただそこには特に僕への怒りは込められてはいないようだった。

「こんなとこにいちゃいけない」

「どつで、、、そつですか」

ふざける空気でもないようなので、おばさんの言葉を待つように曖昧な返事を返した。

「いい子だけど無理してる、そうは思わないかい？」

「一人だと自分が自分でいられるって言ってましたけど」

「ほんとにそう思うのかい？」

眉間により深い皺がよった。色んな物が隠れてしまいそうなほど深い皺だった。

「ほんともうそも彼女がつている以上のことは何も思いません」

「随分と自分に都合がいい考え方だね」

それは僕と彼女二人の問題だろ、と思った。

「二人の問題かね、確かにそうかもしれない。年寄りのお節介かもしれない。ただ同じぼろアパートに住む一住民が言うことじゃないかもしれないよ、彼女も他人と極力話そうとしないものね、あんたがここに来るまでは」

おばさんは新しいタバコを取り出し火をつけそれを吸った。煙を吐ききったところで咳をした。その咳には人生の疲れを見ることができた。

「でもね、ここに来るような人間は限られてる。」

そう言ってまたタバコと吸って、また煙を吐いた。

「あたしはね、ここにもう十年以上住んでる。いまどきこんなところに住んでるやつは本当のろくでなしかへタうって金に困ってるよう



な奴らさ。彼女はなにか特別な理由がありそうだけどね。あたしも  
そうだよ、あたしには夫と子供ときちんとした家庭があったんだ。  
あたしはきちんとした主婦だった。だんなも一般的にみやそこそ  
こ稼いでくるサラリーマンだった。子供をひとりふたり作ってたつて  
まあまああの家で、まあまああ暮らしを十分していけたんだ。実際、  
二人で二年、子供が生まれて三年何事もなく生活していた。周りか  
らも幸せそうだと言われてたよ。でも、壊れた。あたしが壊したん  
だ。不倫をしたのさ。相手はよく来る配達屋の男だった。男は本  
性をつまク隠して生きられる人間だった。そして女に潜む僅かな隙  
を見つける才能があった。あたしの他にも色んな配達先でそういう  
ことをしていたんだよ」

おばさんはそこで一息つくともたタバコを一服吸った。タバコの  
先に着いた火が過剰な光を発していた。そしてまた話し出した。

「男を作って、家庭を逃げ出した拳句、男にも逃げられてね、その  
せいで随分無茶な生活をしたおかげで目をやられてね。この田舎ま  
で転げ落ちてきた人間なんだよ」

今度は一服の後に痰の絡んだ喉を直すように咳をした。苦味を感  
じるときのような顔をした。このときの僕には何故かその姿が不快  
に写った。

「こんなボロアパートに住んでいる奴らは多かれ少なかれあたしに  
近いような経験をしてるのさ。人生の成れの果てなんだよ、そこに  
若い女が暮らしているなんて不憫じゃないか、そうは思わないのか  
い？」

僕に訊くような口調でも、そこには当然そうだとする意味合い  
が含まれているので返事をする必要せいはないようだった。おばさ

んの話は続いた。

「人生の中で得られるものなんてほんの僅かで失うものの方がはるかに多いんだよ」

僕はおばさんから眼をそらしたまま何も言わなかった。

おばさんはひとつ大きなため息を吐いた。タバコを地面に落としサンダルで踏み潰した後、両膝に両手を乗せ、持て余すその体重を何とかして前方へずらそうとい動きに入った。ほとんど転がるように前のめりになりながた立ち上がり、僕には一瞥もくべず自分の部屋へ戻っていった。

この時の僕はひどくイラついていた。おばさんの一方的な話しにもそれについて明確な答えを思いつかない自分自身に対しても。

おばさんの言うことには経験から学んだ説得力のようなものが確かに含まれてはいた。けれどその時の僕には彼女のために何をどうするべきかなんて分からなかったし、ましてやそれがあの部屋住人（僕と彼女）意外に僕らのすべきことが何かを分かるとも思えなかった。ただ、おばさんの言うことの意味は僕には既に分かっていたように思う。それでも僕は今の生活を変えることなど考えることも出来なかった。だれより僕がこの場所を望んでいたからかもしれない。

僕は久しぶりに行き場のない嫌悪感に満たされていた。

棘ついた感情を真っ黒な軽蔑へ変え、彼女の帰りを待つ間それを弄んでいた。

僕はこのおばさんをつつとおしい存在だと思った。もう二度と会いたくはなかった。

本当に二度と会いたくなかった。

彼女が帰ってきてからも、その日おばさんと会ったことは彼女には話さないでおいた。

そして僕は彼女とセックスをした。

そしてまた僕は目覚める。

僕がこの布団の上から見ることでできるのは、彼女の寝顔の他には透き通るように白い胸の橋梁を通してみるむっ節操に生い茂る木々と空のみだった。この住宅地に不釣り合いなボロアパートが存在しえる理由はこの木々のむこうにある神社のためだった。神社のさらにむこうは山になっており、今あるアパートの場所に家を建てると神社は孤立してしまうのだ。彼女が聞いたところによると意外と歴史が古く、由緒正しき神社であるらしい。ただ、こじんまりとした神社なので管理する人はおらず、年に数回近所の人たちで綺麗にして拜むだけだそう。特にこの辺りは古い神社や寺を大切にすると土柄のようで文化遺産なんかもたくさんあった。

有名などころには僕が小学校の頃、修学旅行でいったことがあった。

その時のことは随分と昔のことのように感じる。同じ場所であっても全く違った場所に感じられる。彼女の部屋にしてもそう。

僕が自分の育った町からこの町へ越してきてから日々過ごすことに望郷の念にも似た距離感を感じる思いは薄まっていったのに、ただか数駅ほどしか離れていないここは本当にどこからも何からも遠く感じられる。

忘れ去られたような場所は忘れられるだけの何かを持っているのかもしれない。

ここでは部屋にふたり何も身にまとわずにいられるように、僕は世界から自分を守るための殻を脱いでいるのかもしれない。僕は彼女に聞かれたことを何一つ迷わず正直に話すようになっていた。自分の弱さであるとか醜さであるとか、相手に突き返されれば直ちに相手を憎悪沸き起こさせるような危険なものであっても僕は話した。彼女がそんなことをしないと確信や自信はまるでなかったけれど。

僕らの行動範囲は少しずつ広がっていった。しかし、それは二人での生活を行うのに必要な最低限の生活必需品が減ったからという理由に過ぎなかった。そんなときいつも彼女はジーンズのミニスカートの僕が着てきたアディダスの緑色のジャージを羽織っていた。

彼女と僕の会話はどうでもいいことをどうでもいい角度から検証してみるとということがほとんどだった。

性欲と食欲の話になった。

「…、食欲と性欲は同時に発生しないでしょ」

「したくなる時と食べたくなるときか、そういえばそうだ」

「無人島に流れ着いたみたいで状況で食料もない。そこで食欲と性

欲が同時に発生するとあなたが私を食べたくなるのかな？」

「極限状況のような話した。ただ、それは単純に僕を食べたくなくなるということだと思う。性欲じゃなく食欲の方だ。そもそも食欲は共有できない欲求で性欲は共有できる欲求だし」

「どういうこと？」

「例えば、ただ食料として君を食べれば一時的に食欲は満たされるが、性欲は永遠に満たされない。食欲は個人欲で相互には満たされない。性欲は個人欲であるが相互欲でもあつて相互に満たされる」

「無人島に流れ着いたら、死ぬまでセックスしているという意味？」

「だいぶ違う気がする、けどそれもいいかもね」

彼女は笑った。そして少しマジメな顔をして見せた。

「この世界に二人きりになる場所なんてあるのかな？」

「それには関係的と環境的な状況が考えられる。関係的というのは人間関係のこと、他人と接触しないでいる状況、環境的というのは場所のこと、さっきの無人島みたいな状況だね。人が住んでない場所はあると思うけど、そこで生きていけるかどうかは怪しいね」

「水と食べるものがあれば問題ないんじゃない？」

「それはサバイバルでしかない。そしてこの話は明らかに別方向へとズレている気がする」

その意味不明な話が結末を終える前に僕らはアパートまで戻ってきた。2階の部屋へ上がる階段のところにあのおばさんがいた。犬に餌をやっているところだった。僕はまた嫌な気持ちになった。

おばさんが僕らに気づいたところで、僕は軽く会釈を、彼女はこんにちは、と言った。おばさんは彼女に「こんにちは」、と低い声で言い僕にはじろりと視線を投げかけただけだった。悪くした膝を支えるように起き上がりそのまま自分の部屋へ入って行ってしまった。

この時の僕は未だ胸の中に合ったおばさんへの憎しみのような感情を抑えようとしていたせいで状況をうまく認識していなかった。そのため僕は彼女のとの生活の変化の兆しのような話を彼女にしてしまう羽目になった。いつ思い出しても不快になるのはこの時のことだった。

犬には首輪がしてあったが、鎖はついていなかった。彼女はもくもくと食べる犬に触ろうとした。

「待つて、餌を食べているときに知らない人間が触ると噛むかもしれない」

僕は反射的にそういった。彼女は僕を一瞥した後、しゃがみこみ頬杖をついてじっと犬が餌を食べ終わるのを待った。

「犬のこと詳しいのね」

「いや、そういうことを聞いたことがあったただだよ」

自分自身の意外な発言と彼女の言葉に僕は動揺していた。そこには微妙な雰囲気と沈黙が空気を重く押し留めているようで、そのこ

とに彼女が僕の態度に不信感を抱くことになってしまった。僕は彼女と犬とに距離をおいた。

「犬嫌いななの？」

「いや、好きだよ」

「じゃあ、なんでそんなに遠くで見ているの、こっちに来たら」

「…、その資格がない」

「なに、資格つて。犬を可愛がるのに資格つているの？」

僕は思ってもみなかった言葉が自分の口から出たことに、少し可笑しくなった。

そしてふと過ぎった過去を消そうと努力するために、軽く二度額いた。

「そう、僕はそれをなくしたんだ」

「話が見えないよ」

「僕の住んでいたところでは犬をかわいがるための免許があつてね。以前年一回更新の日に行くのを忘れてね、ほつといたら失効してたんだ。免許の無いまま可愛がると、違反切符を切られて罰金を払わされてしまうんだ」

「おもしろくないその冗談、犬が嫌いなら嫌いって言えばいいのに」

思いのほか彼女を怒らせたみたいだった。

たいして面白くも無い冗談は彼女に普段とは違う僕の行動への疑問を抱かせた。そこにある隠された部分をそのまま隠しておくことを彼女は本当に嫌がることを僕は知っている。そして僕らの関係をこじらせる可能性をも秘めていた。だから今の僕には彼女にそれを隠すことはできないでいた。やれやれと思いつながら僕は空を見上げ、過去を振り返りながら言った。

「僕の家では昔からずっと犬を飼ってきた。僕が生まれてからもそれはずっと続いてきた。親が飼っていた犬が死んで、僕が欲しいと行って犬を飼いだした。僕は自分で選んだ犬に名前をつけ、餌をやりに、散歩をした。かわいがった。僕にとってもなついてくれた。賢い犬でお手やお座りを一瞬で覚えた。物を投げれば素早く口にくわえて僕のところへ持つてきた。名前を僕が呼ばれば遠いところからでも全速力で寄ってきた。ただ、僕はどうしようもないくらい馬鹿なガキで、遊んでた玩具にあきたように飼い始めて一年もしないうちにその犬の世話をしなくなった。友達と遊んだり、テレビをみたりして他に楽しいことがあって、世話自体がめんどくさくなっていった。それから親が餌をあたえ近所に住んでた叔父さんが散歩に連れて行った。僕は自分の普段の生活から犬の存在を忘れていた。学校から帰った時も、友達と遊びに行くときも。存在に気づいたのはその犬が人を噛んだ時だった。散歩をしている時に同じように犬と散歩をしているおばさんを噛んだんだ。一度もそんなことしなかったのに。僕はその犬が怖くなっていつにもまして避けるようになっていった。その事件があつてから誰も散歩へは連れて行かなくなった。そのうちその犬はだんだんと動かなくなっていった。その犬が弱って死にそうになったとき僕は久しぶりに犬のそばにいった。そこには恐怖するような犬は存在していなかった。ただ、ぐったりとふせて尻尾を振り、僕を嬉しそうに見る姿は子犬のころ連れ帰った時そのままだった。本当に嬉しそうだった。そいつはただこの時をまっていたんだ。僕は一度もそんなこと気づいてやれなかった。自分が



してきたことの残酷さを知った。自分の存在を忘れられることそしてただ待ち続けることの辛さ、そういつたものを何一つ気付けなかった。自分が最低の人間であることを知ったんだ。その日の夜は台風で大雨が降ることもあって犬を家の玄関に入れた。僕は毛布を持ってその横で寝た。次の日は玄関から犬小屋に戻し、しっかりと毛の手入れをした。弱っていても尻尾を振ってそれを喜んでいてくれるように見えた。その日僕が学校から帰ってくると犬は死んでた。リードが犬小屋の壁に引っかかりその後暴れたのか首に巻きついて首を吊ったようになって死んでいた。硬く強張った体で横たわり、口からはだらりと舌が垂れていた。そのことに誰も気づかず、学校から帰ってきた僕が最初の発見者だった。家の近くには埋めてよい場所なんてなかったから、ゴミと同じ扱いで捨てるしかなかった。それから家では犬を飼うことをやめた。そんな感じで、僕にはもう犬をかわいがったり、飼ったりする資格がないんだ」

全く持つてどうでもいい話だ。

いまさらながら僕は言うべきでなかったと思った。自分の中で今まで忘れていた出来事だったしそれは今まで誰にも言わなかった話で、恥ずかしかったことと、人に話してそれがどうにかなることではないことだったからだ。

どうにも出来ない事を他人に話すことはあまり良いことではない。それはもともとが解決できないことであり、話し合う議題としては相手に辛過ぎるから。そして他人はいつも以上に優しくなる。うまく答えることのできない話には人は弱くなる。それを話すのは卑怯なことだ。僕はここへ来て色んなことを忘れていることに気付いた。

彼女は犬の顔を両手で挟んだまま、深く考え込んでしまった。

「たかが犬のことなんだけどね」

言った後で今の今になっても全くそう思えない自分に驚いた。全  
ては過ぎたことだけれど思い出すことで湧き出す感情の揺さぶりは  
何一つ変ってないように思う。それに耐えられる今はただそのこと  
に免疫が出来ているだけのことで、初めて受けた今よりも幼く小さ  
な自分には随分とショックだったことが余計に理解できてしまう。

沈黙の中、犬の呼吸だけが聞こえた。

彼女はとても真剣に考えて言葉を選んでいった。

「子供の頃のことなんだから…」

重く小さな声だった。彼女は言葉を途中で放った。

「忘れると？」

「無理なのね」

「無理とかいう範囲の話じゃないんだ、自分の中にそれがないこと  
に気付いてしまったんだよ。前にも話したよね、人生にやり直しは  
聞かないんだ。一度失ったものはもう二度と戻らない」

「絶望的な言葉を言うのね」

「そうだね、でも本当のことだ」

「もっといい加減かと思ってたけど」

「いい加減さ。だから無くしてはっかりなんだ、いろんなものを」

また自分が言ったことを後悔していた。この場所に彼女といえるこ

とで僕はどんどん無防備になっていく。

「無くすことってつらいよね」

自分の家族のことを言ってるのかもしれない。でも彼女は何も失ってない。自分からは見えなくしているだけなのだ。でも僕は同意した。少なくとも彼女は僕を気遣ってくれているのだから。

「まあね。でもこの場合は、そのうち実家に帰って犬をかわいがる免許を取り直せば済むんだ。ペーパーテストで80点とれば合格する」

彼女は僕が言ったことに疑問を見出すまでに暫くの間があった。

「何の話？まだ言ってるの」

彼女は呆れたように深く息を吐いた。

「馬鹿みたい。あなたやつぱり、いい加減よ」

彼女はまた気を使ったように微笑んでくれた。

よく言われるよ、と僕は笑った。

僕はいつも自分の内側に触れられそうな質問に対しては一切をはぐらかしてきた。大体がそれでやり過ぎせるがそうでないときは単純に難しいことは分からない莫迦のようなふりをしてみせた。相手が呆れるのを見てほっとしていた。この時も同じようなフリをしたが実際の理由はちがう。彼女もそれを知っている。今日話したことの内容はここまでにしたい、ということだ。

僕は彼女にそろそろ部屋に帰ろうといった。彼女は少し名残惜しそうに犬に手を振っていた。

僕は彼女が犬の世話をしだすのではと不安になった。彼女には色

んなことを話すようになったけれど、今日話したことをまた話すのも犬に携わることも出来ればしないでおきたかったからだ。

部屋に帰ってからの彼女は少し変だった。

その夜は彼女はいつもの以上にいろんなことをしゃべった。あいかわらす僕の方からは何も聞かなかったのだけれど、自分が生まれる前両親は男の子が欲しかったこと、自分が覚えてる一番幼い頃の思い出、好きになった男の子のこと、中学の時、担任教師がみせたいやらしい視線に気がついたこと、友達が自分の思っていた人間でなかったことなど彼女は見境なく何でも苦もなくしゃべった。眠そうな目でたんと、それはどことなく僕にしゃべっているのではないような気がした。誰に対してもなく、自分の覚えているものを持ただ吐き出しているように。それはなんだか僕に胸の痛みを感じさせた。それはこの僅か六畳の世界の中に染み出した彼女の感情だと感じた。そんなにも彼女は僕に気を使ってくれたのだろうか。あんな話はするべきじゃなかったと思った。

話が途切れた時、彼女は壁にもたれた僕のひざの上で小さくなっていた。僕は彼女の顔を覗き込んだ。見上げた彼女はくちづけをしていた。いつものように僕の隙をついた。そしてまた俯いたままじっとしていた。僕は彼女に気づかれないようにすうと深く息を吐き、そして勢いよく息をすった。肺の中の空気を入れ替えたように、頭の中にある想いを入れ替えようとした。僕のＴシャツを掴んだままの彼女の手を握り優しく引き離し、彼女を抱き上げた。彼女は悲しいぐらい軽かった。僕は立ち上がって布団を足で広げ、その上にゆっくりと彼女を載せた。彼女は目を逸らせていた。

本当のことをいうと、僕はほんの少しだけこの状況にイラついていた。こんな僕の過去の思い出にこの部屋にあるものを掻き回されるのはごめんだ。この頃の僕に必要なのは今の生活だけだったし、人に何かを分け与えるほどの余裕なんてなかったからだ。ただ、明日にまで彼女がこの状態を引きずって欲しくはないと思っていた。僕は彼女を抱いた。それが彼女にとって最善ではないことは分かっていた。ただ、この時の僕にはそれ以外何も思いつくことができなかった。僕がこの部屋に来て彼女にすることができたのは彼女を抱くことだけだった。それ以外に何もなかった。このとき僕は本当に自分が他人に対して少しも優しい人間でないことにまた気付いた。

事実はいつも残酷だ。

自分というものを知るたびに僕は僕を嫌いになる。

僕は彼女の前に性欲と自分の殻の中身の一部を差し出した。彼女はある意味でそれを受け止めてくれた。それでも僕自身の小心さといやらしい性格を隠したまま彼女を引き寄せようとしている。彼女は自分の抱えてきた過去を差し出した。それによって彼女というものの現状に至るまでの過程がおぼろげながら見えてくる。

彼女が家を飛び出してこんな部屋にまで来て手に入れようとしたもの、それはきつと人が単純に想像できそうな理想的な家庭の外に存在するある意味で生々しい現実の世界なのだろうと思う。

彼女の過ごしてきた部屋、つまり家庭はこの世界で生きていくには少しばかり温かすぎたのだ。その温もりがドアひとつ隔てた外の世界にはあまりにも少なく、学校生活などで触れ合う外の世界に住む友人たちにはその冷たさがさも当然のように振舞われ、親に対する不平不満を言っているのに対し彼女にはそういった感情が何一つ存在しない。それは自分が友達たちを同じでないことを意味している。その違いは時として嫉みや憎しみにも変わる可能性を多分に備えている。そのことを思い知る度に彼女は傷ついてきたのだろう。だからといって自分から家庭を壊していくようなことが出来るほどこのときの彼女は利己的ではなかったのだと思う。主観的な優しさを与える家族は多くいても、世の厳しさを教える家族はそうそういるものではない。彼女は生きていくための術を与えてはくれなかった家族を恨んでいるのかもしれない。世間とのギャップと彼女自身が持つ利己的な気持ちと家族を思う優しさの葛藤が限界にきたことが黙って家を出た理由ではないかと思う。

下の部屋に住むおばさんは彼女がこの部屋にいるのは危ないといつた。でも彼女は自分がこの部屋に来ることで世間へと自分をなじませようとしているのだ。それが暖かく隔離された理想的な家庭から現実的な世界で生きていこうとする彼女の意思であったなら、転げ落ちてきた人間よりはずっと前向きだと思う。

ただ、落ちてきたのではないとしたら、いつか彼女はここからは出て行くのだと思う。その思いを僕は浮かぶ先から忘却の底へ押し沈めようとした。その行為さえ忘れようとしていた。

彼女が眠った後も僕はうまく寝むることができなかった。  
何かを忘れるための明日はなかなかやってきてはくれなかった。  
僅か布団半分のスペースで僕は嫌悪感に頭の中をかき回されていた。

それでも明日という日はやってくる。彼女にも僕にも。

僕は眠りに落ちた。

### 3・性欲と裸体と眼鏡（後書き）

完読感謝。随分苦しくなってきましたが、年を越すまでには次を書き上げたいと思います。  
続きます。



#### 4・白昼夢は終わりの始まり（前書き）

時間の無い中、何とか2008年中に間に合いマシタ。

この章から若干残酷な描写が出てきますので、お嫌いな方はお控え下サイ。では。

#### 4・白昼夢は終わりの始まり

同じ場所から見える風景の変化を眺めるのが僕は好きだ。

真つ暗な夜空が次第に白んで朝焼けに染まるその時に見える青とオレンジの間にあるエメラルドグリーンの空の境、夕闇が迫る重く深い深海のような空の色。そのどれもが気付かぬうちに、しかし着実に変化しながら僕の視界に現れてくる。同じ場所にいるという退屈さが僕に次のステップを踏ませる。それは、日々変わるものの中で動き続けている時には何にも気付けないということに等しい。ただ周りを見渡せばいつも僕はそこに取り残されている。

同じところに留まることは普通の人にしてみればそれこそ退屈なこと、誰もが他人とは違う自分にしかないものを見つけたがっている。それは一億何千万人といふこの国の中で見つけ出すにはあまりに困難なもので、そして客観的判断と主観的判断の狭間に存在するアイデンティティなどという言葉をこの社会が受け入れたときからこの社会の誰も彼もが同じようにアイデンティティを求めだした。それ自体がアイデンティティの喪失といっていい。それでも誰もそれに気付かず、むしろ気にしないようにして社会は一貫して個性を求め、そのための教育をし、育てようと躍起になった。決して自身に個性を見極める力があるかどうかは触れないままで。個性とは見分けるもので作り出すものではない。なぜならば、同じ人間と

いうものは一人も存在しないし、人はいつも独りで生まれ、独りで死んでいく個の生き物であるからだ。誰かも分らない若い世代という名をつけた集団に対して、お前たちには個性が無い、なんてことを言う誰かがいるとしたら、そのぼつかり明いた二つの節穴を隠すサングラスでも買ったら、と言ってやればいい。

僕は自分が他の誰かと違ってなどいたくは無かった。それでもそう思えばそう思うほど僕は自分の内側ばかりを見つめ、そして自分が他の誰にもなれはしないことを認識する。そして必ず人一人には誰とも共有できない場所があるのだと思う。

ただ、僕はあの時ほんの僅かな期間であるけれど、その共有できない場所を彼女と共有していると思っていた。疑いようもなく一部のすきも無くそう信じていた。

そして、今ここで僕が独りで存在していることがそれが間違いであったことの証明だ。

この世には現実的経験よりも確かな先人の残してきた教訓というものが山のように存在する。それをしっかりと心に留め、その教えを守るのであれば我々は未だ経験したことのない危機も乗り越えることが出来る。ただ、実際のところ僕達はその教訓を知らながら人生の重要な場面で見事に転んでみせる。つまるところ、人間という

ものは理ことわでなく、感情に生きる未完成な動物であるからなのである  
うか。

どちらにしろ、僕が彼女との関係をどうすれば良かったのかとい  
う問題はいつも付きまとう。それが酷く煩わしく感じられる時と、  
感じることも出来ないほどその問題の中にどっぷりとはまり込んで  
いる時とを僕はずっと繰り返している。

その波は僕をどこに連れて行くのだろうか。

君はまだそこに居てくれるのかい。

食べさしだけれど、このサンドイッチをあげるよ。

君の好きな魚も入っているよ、サーモンだけど。

さて、どこまで話したっけ？

夏という季節が僕たちの住む辺りを覆いだしても、現状の生活に  
たいした変化は起こらなかった。京都の夏は蒸し暑い。もちろん自  
分が住んできた町から相対的に考えてみてだけれど、それでも今ど  
きこの暑さの中で冷房もなしで生活をするなんて思ってもみなかっ  
た。ただ彼女を見ているとこの暑さに対するリアクションが態度に  
も表情にも一切出てこないのなんだかそこまで暑くないような気  
もしてきた。それでも特に暑い昼間には、水でぬらしたタオルで、

体を拭き蒸発で体温が下がるのを待った。この頃になると、昼夜関係なく窓は開けられたままで部屋の外の誰をも気にすることはなくなっていた。

彼女は（僕もだけれど）布団の上にいる間は何も着ることなく裸のままだった。しかしながら、コーヒーを入れたり本を読んだりほかの事をするときにはきちんと布団を畳み、必ず服を着た。それが僅か一時間の間でもだ。一度そのことを彼女に聞いたら彼女は「脱がす楽しみもあるでしょ」と言った。

その通りだと思った。

彼女の服はすべてがよく使い込まれていたが、もともと良い品質のものであったのか生地がしっかりと古着のような味わいがあった。この部屋へと持ち込んだ服はさほど多くないらしいが、彼女は毎日組み合わせを変えて何種類にも着こなして見せた。僕のような野暮つたい人間には持ちえない色や形の組み合わせに関して秀でた才能が見受けられた。結局僕はいつもそれを乱暴に脱がすのだけだ。

彼女の裸体は女性的というよりは、少し中性的に見える。体のラインには女性的な丸みはあまりなく痩せ気味で骨ばっている。でも太股から踵までのラインはあくまで柔らかい曲線で膝の持つ継ぎ目のような節目を作らないような繋がりを見せ、足の先までつるりと淀みのない流れを作っている。デニム地のミニスカートから覗くその両足はこの部屋にある景色で一番のものだと僕は思っている。そのことを彼女にいうと、以外に恥ずかしかった様子を見せた。しばらくの間怒ったような態度（彼女は普段、表情をあまり変えないの

で大体の雰囲気から察した）をしていたので、ジーンズやパンツばかりはかないように最近は無黙って布団の上から見ることにした。

この年の梅雨は長く、雨の日が何日も続いた。僕は原付が故障していたので、彼女の家に住み着いていた。前にも言っただけ、この部屋には本当に何も無い。独りの時には少しぐらい散歩に出てもよかったけれど、おばさんに出会う可能性を考えると嫌な気持ちになるのでやめた。結局彼女がバイトの間は暇なので部屋の隅に沢山つまれている小説を読んでみることにした。漫画を読むことと違って文字だけを追うことは僕にはとても苦痛な作業だった。一度彼女に字ばかり見ている退屈じゃないか、と聞いてみたことがある。彼女は文章を読むのではなく、書いてある情報から情景を自分で立ち上げるの、と言った。

「情景ねえ」

僕は首を振りながら、ふうと息を吐いた。僕には持ち合わせていない表現だった。

「そうよ。漫画でもドラマでも映画でもなんだった方がいいけど、そんなのは全て向こうから与えられたものなの。それを観て感じることは人それぞれだけれど、伝えようとしているものは作った人のものよ。私たちには選べないの」

「小説は違うの?」

「小説は文字しかないもの。全てを自分の想像によって人物や雰囲気

気を作らなきゃならないの。それはその時々の人々の心の状況によっても変化するの。だから読むたびにその物語は内容を少しずつ変えるの。私はそれが好きなの。時期によっても読みたいものが変わるもの。それに昔はおもしろくないとおもっていたものが月日を経て読み直すと今まで読んできたものの中で一番の存在になることもあるわ、自分の理解する力の成長で今までは読むことで掴むことができなかつたいろんなものを吸収できるの」

「ふむ、そういうものか」

僕はそれが理解できるとも出来ないともとれる曖昧な返事を返した。彼女はそのことに別段気にしている様子もなかった。

彼女が珍しく張り切ってしゃべっていたことを思い出した。

彼女は本当に読書好きのようだった。彼女の近視も読みすぎからくるものだろう。バイトから帰って食事が終わった後、布団に入るまでの間に彼女はいつも壁にもたれ、立てた膝の上に小説を載せサルのように小さく丸まって読みふけている。小説の内容から創造した世界へ入り込んでいるのだろうか、ピクリとも動かない。彼女の横で僕も読んでみるのだけれど、自分の創造っていつても海外の小説に出てくるような生活を想像しようも無いし、僕には絵のない文章はいつまでたっても字の羅列でしかなかった。僕の前には誰も登場しないし言葉は情景には変らなかった。

それでも僕は小説を読んだ。幸か不幸か時間はたつぷりある。挑戦と退屈の間を何度も行ったり来たりしていた。彼女がバイトに行き、帰ってきて僕の間をつくまでそれは続いた。

原付が壊れてから僕は現実世界に戻ろうとしていない自分がいることを日々感じている。

別に戻れないわけじゃないが、もう僕は幾日自分の下宿に戻っていないのだろうか。この部屋にいると正確な時間の流れがうまく掴めない。彼女を抱いているときが夜だし、眼が覚めたときもしくは彼女が入れてくれたコーヒーを飲んでいるときに朝で、彼女がこの部屋にいないときが昼だ。そして次第に暑くなるこの気候が夏が来ることを教えている。僕の時間というものを感ずる術はこれだけしかなかった。彼女は一応バイトの関係もあつて一週間のサイクルで動いているようだが、この部屋にはカレンダーというものが無い。全ては感覚任せだけれどそれをとくに嫌とも思えないのは本当に僕がここにいることを望んでいるからだろうか。けれども自分が最初から戻らないつもりではなかったことは、携帯の充電器を持ってこなかったことから自分自身を疑うことはしなかった。

今までは無くすと困るように危機感を持っていつも持っていた携帯電話も、この部屋では何の意味も成さなかった。意味なく誰かに連絡することも、つまらないことを長々と話すこともそれはそれなりに大事なことであったようにも感じていた。どこかへ忘れたときの不便さもつい最近までは自分の中に確かに存在していたはずだった。でも今はそれさえも忘れてしまっていた。

あるとき、すべてが寝静まったような夜の底で僕は虫の音のような携帯の最後の音を聞いた。電池切れの音であるはずなのに、それは蝉の一生が終わるときの呻きのような鳴き声に似ていた。思えばこの部屋に訪れ始めた頃は友人達からの連絡がちよくちよくあつた。サークルにも参加しないことで僕のことを本当に心配するような電



話まであった。それなのに僕は日々蒸し暑くなる夏の夜、彼女の甘い香りや唾液の混じった滑る汗と疼く様な下半身の悦楽の中でそれらすべてをうっとおしいものと感じていた。やがて、だれからの連絡も無くなった。当然といえば当然のことだけれど、そのことが自分にとってどういうことを意味するのか考えるべきであったはずなのだ。それなのにそういう行為を僕はどこかへ捨ててしまったらしい。コンドームやティッシュと一緒にゴミ箱行きになっているのかもしれない。僕の考えや思いはその一部をアウトプット（出力）することを完全に止めてしまったように思う。そして欲望という短絡的な行動への思考と彼女との二人だけの生活を思う思考だけが僕の日常を支配していたのだと思う。僕はその考えだけを欲していた。それがいかに馬鹿げて幼稚な発想であることは言うまでも無いかもしれない。

ただ、人は無いものばかりを強請る生き物だ。でも欲しがったものを得た時に無くなったモノに僕らは必ず気づく。

僕が故郷を離れ、大学生活の中で築き上げてきた友人たちとの関係は、僕の人生において一番居心地の良い環境であったはずなのに（白昼夢に悩まされる以前までは）。こんなにも自分が利己的でもない人間であったのかと、普段なら嫌というほど持て余すはずの自己批判さえこの頃になると少しも沸いては来なかった。それでもどこかに残った、どうにか自分がいた生活、人と交わりのある生活に戻らなければという危惧は存在していたと思う。それが日々薄らいできていることにも恐れはあつたはずだ。

でもそれは自分でも予想できない出来事に襲われることで全く異なった恐れへと変ってしまった。

それは梅雨の時期のちょうど真ん中辺り、世界中が水浸しなんじやないかと思うような雨の多い頃の昼時に、僅かな雲の谷間がこの部屋の上を通った日のことだ。

その日の午後は彼女の買い物に付き合い外に出た。彼女は僕の緑のジャージを羽織り、デニム地のミニスカートに素足にサンダルで出かけた。朝のうちは彼女の髪が幾分伸び随分と目に余るようになったので、最近僕がまた切った。テレビなんかでみる美容師のまねをして切ろうとした。彼女の部屋に櫛はないので指で髪を挟み鋏を縦に使って切ってみた。結局は不ぞろいで、たいしてよい出来ではないけれど、彼女はありがとうといった。僕が彼女からありがとうといわれたのはこれが初めて最後だった。彼女の髪型はショートボブになった。もちろん前向きに考えてのことだけれど。

買い物の帰りがてら二人で神社のほうへと散歩を試してみた。その日は朝から振った雨のせいで今の時期には珍しく肌寒く、それでいて湿気を多分に含んだ粘り気のある風が心地よく吹いていた。部屋から見る雰囲気と違って林は以外に木が並び揃っていた。ずいぶんと大きな、というか縦に長く伸びた木ばかりだった。神社の境内はそのほとんどをその大きな木々に取り囲まれていた。彼女の部屋の窓からも神社の存在自体をはっきりとは見ることができないほどだ。梅雨曇の陰気な空と林に押さえられて薄暗くなった細い参道を二人で歩く。彼女のサンダルの踵をする音が不思議と懐かしく感じられる。雲の動く鈍い響きが遠くから聞こえてきた。言葉を何一つ発せずふたり歩いていると、鼻先に雨粒が落ちるのを感じた。ふと空を見上げ雨を感じて彼女を見た。彼女はとりあえずあそこまで行こう

と境内のほうへ早足で駆けた。僕もそれに従った。

夕立が糸のような細い雨をつれてきた。

薄暗く濁った色を見せる空とは対照的に神社やそれを取り巻く木々達は本来の色を取り戻したかのように目に映える緑と匂いを発していた。石畳の上で彼女のサンダルがカラカラとなっていた。

雨が次第に強くなってきたので、賽銭箱の辺りの雨どいの下に二人で腰掛け、石積みされた道の先をただ、ぼうつと見ていた。雨しぶきの返りが地面の輪郭を奪っている。道の先の石段からは景色があやふやになっていた。

肌寒さが少し増してきた。彼女の肩が僅かばかり僕の肩に押し付けられたように感じた。

僕は彼女を引き寄せ手を握った。

彼女の手は悲しいくらい冷たくなっていた。

彼女は何も言わなかった。そしておそらく、何も見ていなかった。無表情の彼女は物言わぬ人形みたいに思えて少し怖かった。

僕は彼女の温もりを確かめるために不揃いな黒髪に頬を近づけ、彼女の匂いをゆっくりと深く吸い込んだ。

彼女の温もりを感じながら、ビートルズのRainを鼻歌で歌っていた。

「誰の歌？」

「ビートルズ」

そう答えた後で音楽でさえ聴かなくなってしまうことに僕は気づいた。

次第に雨はやみ、辺り一面を霧が覆っていた。霧は思いのほか濃く、いつのまにか僕らのいる神社と世界を絶望的に遮断していた。僕ら以外のあらゆるものの存在を感じなくなっていた。

そこは二人しかいない世界だった。

「真つ白だ」

この状況がうまく認識できないで僕は数メートル先からは全てが色を失っていることに気付いていながら、それを口にするのに幾分時間がかかった。彼女に対して言ったのでなく、口から無意識に出た言葉だった。

「ここはどこかな？」

彼女が眠そうな声でそつと言った。その声は僕の体の中から聞こえてくるようだった。

その声は僕の中でよく響き、僕は頭の中にあるもやもやした物を引き出すきっかけになった。

「どこかで見たような気がする」

まだ何も頭の中には浮かばなかったけれど、それには確信めいたものがあつた。

「子供のころの思い出？」

「少し違う。こういう状況になったことがあるんじゃない、この場所を、この景色を見たことがある気がするんだ」  
それは何よりもリアリティがあつた。

「行ったことある場所？」

「どうかな、夢で見たのかもしれない。でもやけにリアルに感じるんだ」

「思い出せないのに、実感だけあるのね」

「うん、昔じゃない気がする。どこだろう」

彼女の質問に答えることでこの場所の意味を探ろうとした。輪郭さえ掴めなかったけれど、彼女の言葉が僕にその答えを導いてくれた。

「きっとこれはあなたの世界よ」

「僕の世界？」

「あなたが住むあなたの世界」

「僕が住む僕の世界」

「そうあなたの世界、だって誰もいないじゃない」

「そう、かもしれない」

不思議と納得できる話だった。

「ここがそうなのね」

「そうだね、そうかもしれない」

「何も無いね」

「何も無い、誰もいない」

「静かね」

「静かだ」

彼女が言ったことを考えた。

きつとこの景色に感じるものは、僕の心のありようだと思う。

僕は今までずっとここに居たようだ。そして、これからも。

何も無い誰もいない白くかすんだ無音の世界、それが僕の世界と  
いうことが。

自分がひどく寂しい人間のように思えた。いろんなことが怖くな  
った。

僕は強く彼女を引き寄せた。彼女は繋いでいた僕の手を強く握っ  
た。彼女の手はまだ冷たかったけれど僕には彼女のその行為が嬉し  
かった。今にも泣き出しそうな気持ちになった。

「ようこそ、僕の世界へ」

彼女を見ないで言った。白く湿った目の前の景色に向かって。

寒さは少し増してきていた。

彼女の頬に触れた。

彼女は僕の胸元から僕を見上げた。

僕らは唇を重ねた。

長く深く、互いのぬくもりを奪い合うように。

部屋に帰るまで僕らは口を利かなかった。

部屋に帰り灯りもつけずたたんでいた布団を引き、互いの眼鏡を外した。

もちろん、僕が。

鼻の奥でまだ神社のかび臭さが残っている。寒い中に長くい過ぎたのか、頭が重く、鉛が詰まっているようだった。彼女の肌に触れてもぬくもりは伝わってこなかった。部屋の暗さのせいか今までの寒さのせいなのか、彼女の僕を見る目は焦点を見失ったように真っ黒で瞳には何も移ってはいなかった。そのことを僕はただそうなのだという認識でしか受け入れることが出来ずそのうち頭の奥が痺れてくる感覚を覚えた。それはだんだんと強くなって体中に広がっていった。彼女の股にわけ入って彼女を抱きしめたとき、彼女に触れている部分の感覚がなくなってしまった。ただ体にはゆっくりと温かさが伝わりそれが全身を包んでいった。その温もりが次第に熱くなっていくようだった。彼女に触れている感覚がなくなった後、彼女と僕との境界線を失ったような体はチョコレートのように溶けて混ざり合ってしまう気がした。そこには自分のかたちを失う怖さがあった。いつしか眼の前には日差しとの差し込む明るい場所を目を瞑ったときのようなぴりぴりと光の弾けた様な文様が浮かんでいた。それ以外は何も見えなかったけれど、そばにいるはずの彼女が泣いているような気がした。それは自分が泣いているようでもあった。この部屋の外ではゴロゴロと遠くで雷の音が聞こえていた。その音はとても遠くで聞こえたけれど、雷は小さく僕の体の中に落ちていく気がした。僕は本当に何も見えなくなった状況で彼女の温もりだけは感じていた。彼女の肌に触れていることよりももっと熱く粘り気のある温もりだった。それは波打ち際で感じる波のように一定

の周期で寄せては返す、不思議なものだった。体が溶けるイメージが終には顔までを覆って頭の先まで全部溶けた感覚を味わったところで酷い疲労感と眠気がやってきた。

怖い、自分の枠がなくなるイメージ。

そしてサクツサクツという硬いものを突き立てるような音が耳の中から聞こえてきた。

目の前は依然として暗い。

本当の暗闇だ。これ以上ないくらいの暗闇の中から目を開けると、そこに見えたのは見慣れない天井だった。

そこは今までいた彼女の部屋でなく、見も知らぬ部屋の中だった。僕は自分がベットに寝ていることに気づく。頭だけを動かして辺りを見渡す。そこはあまり広いとはいえない洋室で部屋全体がよく使い込まれたくすんだ石灰色の壁で統一されていた。

いつのまにか肌寒さが皮膚全体を包み、じわじわと体の芯まで冷やそうとしている。自分がベットに横になっていた状態から上半身だけ起き上がるとギシギシとベットの軋む音が聞こえた。年季の入った木製ベットならではの音だった。ふと目に留まった壁に埋め込まれたような作りの赤茶色のレンガで出来た暖炉は使い込まれているため炭で煤け、それでいて使われなくなった期間の長さによりそれ自体が石化されているように本来持つべき暖かな質感を失っている。辺りをもう一通り見渡したところで、いつのまにか自分がその部屋を中心に立っていることに気付く。玄関らしきドアは僅かに開かれ、外から吹き込む冷たい風でギィギィと鳴っている。

僕はベッドから起き上がって、ドアに近づいていく。石でできた



ような床は非常に冷たく、素足で歩くと痺れる様な痛みがあった。ドアに近づくとつれ外から吹き込む風が強くなる。僕はドアを手のひらで押すように空けた。外は靄でうつすらと白く風が吹くことでゆっくりと辺りが開ける。地面には萎びた草がやる気なく生えている。見えているのは玄関から2、3メートルの辺りまで、それ以上は真つ白な霧で覆われている。どれだけ覗き込んでもその先は見えてこない。まるで神社から見た景色みたいだった。

玄関からそつと地面に足を踏み出したところで僕の体は突如重力を失い、ゆっくりと落ちていくような感覚が体を襲い、また僕を暗闇が包む。この暗闇は自分が目を閉じていることだと気付く僕は目を開けた。

目の前に見えたのはいつもの天井だった。

体が重い。それが彼女のせいだと気づくのに時間が掛かった。

彼女の不揃いの髪が首元に当たる度に体を揺すった。彼女は僕が起きたことに気づいて、顔を上げて僕を見た。

僕は呆けたように彼女をじつと見ていた。

「何、どうかした？」

彼女は眠そうな目で僕にそういった。

「さつき、変じゃなかった？」

「何が？」

「その、抱いていたとき、、、」  
「うまく言葉が出てこなかった。」

「別に。いつもどおりよかったわ。変なこと言わないで、明日も

バイトがあるの」

彼女は強引に僕の腕をひっぱり、その上に頭を乗せて眠ろうとした。

よかった？

彼女はそういった。いままで一度も言ったことがない言葉を。

彼女はセックスについて僕に一切感想を聞いたことがなかった。僕もそんなことを聞かなかったけれど。僕を誘う行為が彼女の目的でその後はどうでもいいんじゃないかと思ってしまうくらい彼女は無関心だったのだ。僕はもう一度彼女を見た。

彼女は疲れているらしくすすうすと深い呼吸で眠っていることが分かった。僕はさっきの彼女とのセックスと後で見た夢のことが気になってまったく眠れなかった。この部屋ではこんなこと一度もなかったはずなのに。

ずっと変わらないと思っていたこの小さな世界で何かが少しずつ変わり始めている気がした。それは未来への不安ではなく、すでに決められている未来への確信であったかもしれない。でもこの時の僕にはそれを受け止める勇氣なんてなかったし、それがあつたならこの二人だけしかないような世界に逃げ込んだりはしなかったはずだ。

この部屋へ来て何度目かの長い夜がまた訪れている。

その日の夜更けにはいままでが嘘みたいになり雨がやみ、雲はかけらもなくなっていた。

痺れてきた腕をそつと彼女の頭の下から引き抜き、痺れを取るのに二の腕をきつく揉んだ。眩しいくらい月の光が部屋中のものを真っ白に染めていた。色を抜き取られたようだった。腕の皮膚には彼女の髪の毛の痕がくつきりとつき、ざらざらした肌触りだった。彼女

は死んだように寝ている。ぴくりとも動かない白んだ彼女は、冷たい陶器のように見えた。

ひどくまとまり難い今日の出来事を必死に考えようとする。

彼女とのこれまでにないセックスの感覚、ほとんど欲求に任せていたものと違う自分を失うような感覚。その後で神社でのあの奇妙なイメージと重なるような夢を見た。同じような静けさと寒さ、違うのはそこに彼女がいるかどうかだった。この出来事は僕に何を訴えかけているのか。

僕の中で何がどうなっているのか。考えはまとまりを見せず、ただ時間だけが過ぎてゆく。

僕はいつもどこかへ逃げていたのか。何から逃げていたのか。そしてここは僕が求めていた場所なのか。

何も無いこの部屋の暗闇は月明かりですっかりと眼前から消えていたけれど、不安という暗闇はずっと僕の中にとどまり続けた。それでもやはり夜は明け、また朝が来る。

それからしばらくはらくはどうかということもなく僕の望んだ日常が繰り返されていた。

この頃なぜか、僕は同じ夢をよく見た。ただその夢は自分の関係ある人たち、もしくは全く関係の無い人たちが登場するわけでもなく、恐ろしかったり楽しかったりもう一度見たいとか、見たくないとかいう解釈のできる夢とは随分かけ離れている。更に言うのならその夢は終わりがよく分からず、夢だとも気づけないまま自分が起

きて生活を始めようとしている時に振り返って思い出せば見ていた気がするという類のものだ。それは思い返すほどたいしたものではなくて、ただ自分がじつとぼやけたような景色を見ているだけの夢である。実際何を見ているかは正確には分からなくて、分かるというより感じるという範囲でその視界の向こうには自分の知らない多くの人たちが沢山いることが認識できている。そしてほんの僅かな雑踏の音が自分の耳に聞こえている。その夢の景色は僕の感情に何一つ語りかけてこない。そのことを考え始めた時、僕はふと自身自身が感じることを拒んでいるのではと不安になってくる。その不安はいつも決まって控えめにとどまり続け、少しも大きくはならず絶えず僅かにそこにあるのみである。ただそれは確実に存在していて、少しも消えることが無い。僕はそれを抱えたままただ眼と耳で景色を感じているだけ、そんな夢だ。

そんな夢を見た気がしている今日も僕は彼女がバイトに行っている間の時間をなんとか潰そうとしている。狭い布団の上で窮屈に二人で寝るといふ行為はかなり体に負担をかけるのか朝から体が硬くなっていく様子で僕はじつくりと時間をかけてストレッチをする。痛みが伴わない程度に呼吸をしながら体の各部分をしっかりと延ばしていく。しっかりとほぐれた後で腹筋、腕立て、スクワットと基本的な自重による筋力トレーニングをする。最近は殆んど運動というものをしていなかったため、随分とその筋トレがつらく感じている。それでもたつぷり時間が有るので休みながらしっかりと一通りのメニューをこなし、程よい疲労を感じたまましばらく休む。体からは汗が滲み出てきたのでタオルを水で湿らせてしっかりと体を拭き、流しで頭を洗った。

今日はわりと天気が良好だったため、おばさんが下にいないことを確認してから僕は彼女の部屋をでて散歩することにした。アパートの入り口からは反対側の神社方向へ歩く。アパートと神社を挟む林は木が余りに大きすぎて森と言っても差し支えないぐらいだった。

この初夏の最中でも木々の生い茂った下を歩くと随分とひんやりしている。林を抜けた先に石で出来たこじんまりとした鳥居がある。そこを抜けて石畳を歩いてあの日と同じような賽銭箱の横に腰掛けてみる。そこから見える景色はあの時は全く違って見える。本当に同じ場所かと思うぐらい違って見えた。彼女と見た景色や夢で見た場所のイメージはいつたどこから来たものだろうか。彼女の言ったように僕の頭の中に存在する世界だとしたらこの場所から見えたものは僕だけの眼に映っていたのだろうか。彼女は何も無いと言った。それは霧で真っ白になった眼の前の景色だけを見ていったのか、それとも僕の見たものを彼女も見えてくれたのだろうか。意味のない考えだけが僕の頭の中を回っている。はっきりしない感覚が不安を引き寄せようとしている。無性に彼女を抱きたくなった。彼女のいないこの時間がもどかしく感じたのはこの時が初めてだった。僕は部屋に戻ることにした。

アパートまでたどり着いて玄関のほうに回りこむと、おばさんがいた。犬は連れていかなかった。

おばさんは地面に根を張ったようにどっかりと折りたたみの小さなイスに腰掛け、自分の手に届く範囲にある草だけをぶちぶちと抜いていた。

僕は少しだけ会釈してすぐ階段を上がろうとした。

「あんたあの子を殴ったりするのかい？」

唐突で意味の分からない質問だった。僕は聞こえなかったようなリアクションをした。

「あの子を殴ったりするのかと訊いてるんだよ」

「僕は女性に手を上げたことなんて一度もないですよ、彼女がそう言っただんですか？」

僕は少し大きな声で怪訝な気持ちを前面に出してそう言った。

「いいや、言っていない。あたしがあんなこと彼女に聞いたら一言怖い人です、て言っただよ。だからあたしはてつきりあなたが暴力を振るってんのかと思ってね」

「女性に暴力なんて生涯一度だって振るったこともないですよ、彼女の顔見て腫れてるとこなんてないでしょ、怒鳴ったこともないですから」

「確かにそんな声一度も聞いたことないね、なにかあるかと心配してただけけど、あんなそんな暴力男には見えないものね」

このおばさんの話す彼女のことは僕の中には存在しない部分だった。このことは僕にとってショックだった。僕の知らない彼女がいた。出会って僅かしか経っていないけれど、彼女は本当によく自身のことを僕に話してくれたと思う。そして僕は彼女のおおよその輪郭は掴んだつもりでいた。それなのに僕の知らないところでおばさんに僕のことを怖いなんて話しているとは夢にも思わなかった。

「前にも言ったが、あの子はきつとここを出てゆくよ。その時あんたはどうすんだい？」

「わかりません」

僕は頭の中の不安とおばさんへの嫌悪や彼女への混乱で動揺していた。僕の言葉に呆れた顔で何か言おうとするおばさんの口を塞ぐ様に僕は言った。

「本当に分からないんです。ここにくるまでには、僕に選択権はなかったような気がするんです。それは彼女のせいにする訳じゃなくて、何も考えられなくなっただんです。この生活が続くならそれがかまわないそう思ってます」

「ここはあなたにとってそんなに居心地のいい世界なのかい？」  
おばさんは続けた。

「ここは誰のためにも存在する世界であって、誰のためにもならない世界さ。長くいれば抜け出せなくなる人間もいるし、逃げ出しなくなる人間もいる。彼女だってそのこと自体を怖がってるのかもしれない。あんたはそうならないのかい？」

このおばさんの言う言葉はやはり僕をイラつかせる。話しがどこかに落ち着く前に僕は階段を上がった。

僕は出会った頃からこのおばさんのことが好きになれなかった。正直この世界の不純物だった。二人の関係において僕には不必要と思える話題をいつも僕に押し付けたからだ。

僕は、将来の不安など毛ほども感じる事が出来なくなっていた。

彼女の部屋で感じるのは日々暑くなっていることと、尽きることなく突如湧き上がる性欲、疲れによる眠気この三つだけだった。こんなことは生きていた中で初めてのことと、何をどうすることも思い浮かばなかった。出口のない迷路のようだ。僕は不安を感じるようになった。この生活にも彼女の存在にも。僕は意識をしっかりと保つために、本を読み、彼女と出来るだけ話をしようとした。ただいつしが僕は不安を忘れ、この時が永遠に続くような気がしていた。というよりもそんなことさえ何も考えないようにになっていた。

この平行世界の終わりの始まりに関しての僕の気持ち話す。

物事には始まりと終わりがあって、生きとし生けるものはすべて時の過ぎ行くにまかせて朽ちてゆく。それが単純に終わってしまうこともあれば、徐々に終わりに近づいていくものもある。どちらも辛く悲しい感情を揺さぶってしまう。けれど感情の揺らぎも日を追うごとに薄まっていく。そういうものだ僕を知っている。

ただそれに気づくのは全てが終わってからだ。いつもこの時の僕は終わりが来るなんて気付けなかった。それはこの世界のこの時が僕には居心地のよい場所だったから。僕と彼女は布団の上で色々な話をした。いままで人に言ったことのない思い出や、自分の存在を証明するための考えなどを。でも、実際に僕らの先について話したことがないことなんて気付けなかった。そこにどんなものが待ち受けているなんて気付けなかった。何度繰り返しても僕は気付けない。



僕は終わりの始まりを繰り返している。

これは夢のようなもの見たあとの出来事だ。

嫌な夢を見たような気がする。シャツは汗でべったりと体にはりつき、暑さの不快感をあおっている。Tシャツを脱いで水道の蛇口を捻る。勢いよくでる水に頭を突っ込み、そのまま体に散ってゆく水で体についた汗を拭いた。

気持ち少し落ち着いて来たところで辺りを見回すと彼女はいなかった。彼女はすでにバイトに出てるみたいで部屋にはいなかった。そんなことはこの生活で初めてのことだったけれど、特に何の感情も抱かず僕は布団をたたみ起きることにした。

窓から外を見下ろすと草むしりするおばさんがいた。いやな雰囲気があった。

ただ、何故か僕はTシャツを着なおしジーンズを穿いて階段を下りた。

いつもは階段を下りてくるとこちらが何か言うまでこっちをジロリと見続けてくるはずのおばさんは振り返らず草むしりを続けている。僕はおはようございます、とだけ言って横を通り過ぎようとした。

突然くるつと振り返るおばさんは黒目がいやに大きく、口を大きく横に開き舌をベロン、と出していた。その舌は変に長く顎くらいまで垂れていた。その顔に僕がぞっとすると同時に僕はおばさん

の両手で強く引つ張られ、しりもちをついてしまった。涎を垂らしながら僕に顔を近づけたおばさんは息荒く悪態をついた。

「毎日毎日さかりのついた犬みたいにセックスばかりしてどうしようもない存在だね、あんた。彼女はいつたいあんたのなんだ。ペニスを突っ込むための穴かい？」

獣のような匂いと口から垂れる涎の匂いが鼻を突いた。僕は強烈な悪臭に顔を背けようとした。突然おばさんの女性とは思えない腕力で顔をつかまれ無理やり目と目を合わされた。

「どうした答えられないのかい。この世界があんたの都合のいい世界ならあの娘はあんたの生活の付属品だね。性処理の道具だろ。それぐらいにしか思ってないんだろ」

ギリギリと絞まるおばさんの手の強さに顔が引き攣る。匂いはさらに不快になってくる。おばさんの腕の力は以上に強く、僕の両手で振りほどこうにもどうやっても外れそうに無かった。不気味な逃げ出したい衝動と何か強烈な怒りが僕の中で暴れだした。何とか起き上がるうと両腕と背筋の力で地面を押そうと暴れていた。その時地面についた左手に何か硬く冷たい物体の感触があった。僕はそれを握りつぶさんばかりに握り締めおばさんの側頭部を強く打った。おばさんの顔は一瞬僕の視界からそれまた戻ってきた。おばさんの目は宙に浮いていた。それでも僕の顔を挟んだ両手は離れなかった。僕は続けて何度も何度もおばさんの頭を左手に握った何かで強く殴った。二度三度と殴るにつれ、いつのまにか僕は自分の意思でそれをとめることができないでいた。まだ僕の顔から両手は離れていない。それでも押さえつけられている感じは少し弱くなってきていた。勢いをつけて強く殴ったせいで横倒しになった後、今度は僕がおばさんの上に馬乗りになってまた何度も左手を打ちつけた。空を見た

おばさんの両目は焦点が合っていないのに、いつまでも僕を見続けている気がした。それがまた僕を恐怖させた。僕は左手に持っているものを今度は両手で握り、おばさんの顔の中心に向けて振り下ろした。体が上気して汗が背中を伝っていた。それでも体の芯は寒く震えるほどだった。そのうち、おばさんの両手がいつのまにか離れているのに僕は気付いた。僕の両手と握り締めていたものとはひとつのものになってしまったように引き離すことができないでいた。ゆっくりと左手の上に重ねた右手を離し、ついで左手の指を力いっぱい伸ばそうとした。ゆっくりと伸びていった5本の指からぼつと硬い物体は地面に落ちた。その物体は何かよく分からなかった。何であるかが全体にべつとりとついた血のせいで認識することは不可能だった。両掌を見ながらゆっくり曲げ伸ばしをする。耳には先ほどまで圧迫されていた感覚があった。体がそのことを恐れてか視点をあわせようとしなかった存在、自分が馬乗りになった人体の顔にゆっくりと焦点を合わせてみた。おばさんの顔であった部分は渦上にめり込んで真っ黒だった。両手は大の字に開かれていた。そのものの生き物の熱は全く感じることはできなかった。覗き込んだ顔の渦はとても深く地球の反対側まで続いている用を感じられた。

僕はゆっくりと立ち上がった。少しでも気を抜くと膝が抜けてその場に崩れ落ちそうだった。蝉の音が聞こえた。その骸をそのままにふわふわする足取りで僕は階段を上がった。手についた血がドアノブにつかないようにして部屋に入った。自分の顔を確認するものは何一つこの部屋にはなかった。流しにたつて肘を使って蛇口を開き手についた血をとろうとした。洗っても洗っても血は取れなかった。手を執拗に洗っているときに自分のしたことの大きさを知らせる正常な感情がゆっくりと近づいてきていることが分かった。遅れてきた恐怖が足の先を伝って近づいてきている。膝が震えだした。睾丸がきゅつと締まってきた。なにか今にも笑ってしまいたい衝動に駆られた。頬がひきつる感覚を感じ始めたときに僕は自分が目を

閉じていて、辺りが真っ黒であることに気付いた。あるはずの体を感じることができないでいた。突然左胸の辺りが震えだした。そのめを明けると彼女が僕を心配そうに見ていた。

「うなされていたけど、大丈夫？」

体の痛みがある首から背中が張っていた。自分の状態を認識する。僕は彼女の部屋の流しの前で倒れていた。

彼女が何かを言っているがそれど頃ではなかった。僕は弾けた様に目の前に両手を持っていった。

血は、両手についた血は？

彼女が帰ってくる時死体は？

いろんなことを同時に考え始めた僕の頭の中に両手には血が全くついていないことが伝わるまでに随分とかがかった。

これは例の白昼夢のようなものか。しばらくなかったのに。

彼女は酷く心配していた。

僕は寝不足でこんなところで寝てしまい、変な体勢で寝たせいで悪い夢を見たのだろうとっておいた。

どうやら僕は本当にあのおばさんのことが嫌いらしい。

できれば二度と会うことがないようにと祈った。

その望みが叶えられたかのように、僕はおばさんとはずっと会わなかった。

この白昼夢は自分が彼女と今の生活を望む気持ちが入り混じったものなのだろうと思うほかはなかった。そしてこのことを僕は彼女には言わなかった。なにより僕は今の生活が失われることを恐れていたように思う。

彼女の別れ話を聞くまでは終わりが来ると思わなかった。本当に思わなかった。

そして夢と白昼夢が僕を苛む事も何一つ疑わなかった。

#### 4・白層夢は終わりの始まり（後書き）

完読感謝。続きます。

## 5・終わる白昼夢

「理由聞きたい？」

いつもと何も変わらない雰囲気で彼女がこの部屋を出るといった。僕はそのことを「今日も暑いわね」、というどうでもいいような日常の会話のように聞き流していた。大事なことや大切なことをよく僕は聞き逃すことがあるのだ、今も昔も。でもそんな僕を気にとめることもなく彼女は続けた。

「自分の星に帰るのよ。この地球がどれほどくだらないかもよく分かったし、人間という動物のことも調査し終わつたしこれ以上調べることが必要なあることもないと判断したの。だから出て行くの」

僕はそう、とだけ言って今日も暑くなりそうな空の雰囲気を感じて窓の外を見ていた。

僅かに吹き込んだ風は熱気を含んでいた。

僕らの間に沈黙が下りた。

彼女はしばらくして、咳くようにゴメンナサイと言った後、自嘲気味に笑って本当のことを話すわ、と言った。

「いきなり言われたの。結婚をして欲しいって。バイト先の店によく来るお客さん、真面目そうな人。冗談かと思っただけどそれから何度も言われた。ずっと無視してただけどそれでも週に一度は来てた。本人はもう半分諦めていたみたいだね。いろいろ考えてみ

たけど、そのほうがいいのかなって」

ふざけた作り話だと思って聞いていた。彼女の口からそんなどこかで聞いたようなB級空想話が出ることに驚いた。僕は呆れたようにハアと息を吐いた。

僕は何か言おうとしたけれど、それを押さえ込むように彼女は本当よ、と強い口調だった。

この部屋でいつも出くわしていた彼女の作り出すものとはまるで違った沈黙が降りた。

台所に立つ彼女は僕が彼女の方を向いたのと同時に窓の外に見える雲ひとつない空を見上げた。

「今日も暑いわね」と彼女が言った。

洗い物を終えていつものように彼女は手についた滴を必要以上に払い落とし、丁寧にタオルで拭いた。僕とは反対側の神社のある林の見える窓側に沿って座った。

開け放たれた窓の外を見る。それはなにか遠くにある一枚の写真のように見えた。僕はその写真をじっと見ていた。

そして外を見ることを止め、彼女の視線は畳に向かっていた。しかしその視界にあるものはそれ以外の何かだった。



「もう夏が来てるわ。じきに秋になってすぐ冬が来るの」

彼女は自分が振り返る過去の連れてきた感情を押し殺すように抱えた膝を強く抱きしめた。何かに耐えているようにも見えた。

「冬はとても嫌な季節。暖をとるものが布団しかないんだもの、毎日とてもとても寒くて一日中部屋の中で着られる物全てを着こんで布団に包まってた。真冬は押入れの中で寝たりしたこともあったのよ。狭い押入れの中に居た方が空気が温まり易いから。でもそんなの何の役に立たないほど寒いので、どうしようもなく寒い。きっとここよりずっと北の国ならこんななんでもないのかもしれない。でも私にとっては心にも体にも生きてきた中での一番の寒さだった。一度は何とかやり過ごせたけど…」

彼女は自分の過去の思い出にはまり込んでいた。そして話しを続けた。

「だけど、私はもう一度この部屋で冬を越すことは出来ないと思ったの」

確かにこの京都の冬は底冷えがするほど寒い。山に囲まれた土地だけに山壁とどんよりと重そうな冬の雲に押さえつけられ寒気は流れることなく土地に染み入る。

ただ、この熱い季節のさなかに真冬の寒さを思い返すことには僕には難しい作業だった。でも実際のところ、彼女が話す内容を受け入れがたいものにしたものはもっと他に存在していた。それは彼女と僕の関係でなく、僕とこの部屋の関係に他ならない。

彼女の意思一つで僕の、もしくは僕と彼女の生活、つまりはこの部屋はなくなってしまうのだ。そのことは意外なほど僕の頭には存

在していなかった。振り返れば下に住むあのおばさんにも忠告をされていたいし、時々はそのことを考えることもあったはずの彼女がここを出るという選択肢が僕の中ではごっそりと抜け落ちていた。そのことを意外に思いながらも、それが僕の気付かないところで進出し、後戻りできないところまで来ていることを理解してしまっていた。

それでも一つの可能性としての話、それは望むべきものでなく受け入れるべき可能性としての提案を僕は思い浮かべる。

僕の部屋へ来れば。

その言葉はことのほか現実感を欠いていて掴みようもなく、僕の外側へ運び出すことが出来なかった。本当はそんなこと思っていないかったかもしれない。僕はこの部屋の他に自分の帰るべき場所があるなんてことときは頭の片隅にも抱いてはいなかったからだ。それにおそらく彼女がそれを受け入れないことも分かっていたから。僕の下宿の部屋にこの部屋に存在しているのと同じ世界はきつと存在していないし、なにより彼女はそれを望んではないようだ。彼女は自分がこの部屋を出ることになるといいう決定事項を僕に話しただけだ。

すべては僕がこの部屋に来たときと同じ何一つ変わってはいなかったのだ。

彼女はいつも望むものは自分で手に入れる。自ら家を出てこんなところで暮らしはじめ、僕と出会いそしてその生活に僕を捕りこんだ。そして今度は本当なのかは分からないけれど、違う存在を捕りこもうとしている（もしくは、逃げ込もうとしているのかもしれない）。

全ては彼女が決めることなのだろう。僕はその中の選択肢の一つ

にしか過ぎなかったのだ。

僕の思いを蚊帳かやの外に彼女の得意の自虐めいた話は続く。

「きつとずっと二人だけならあなたと幸せに暮らしていけたと思うわ。でも、あなたには先を見るといいうことがないわ。変わっていくことに対して。いつまでもこんなところで二人だけで生きていくことは出来ないもの。私がこの今の生活を恐れていたことがあなたに分かった？ただとりあえずこの部屋に住むことから始まって、持っていたお金がどんどんなくなって、生活が苦しくなってゆくことに全身で気付き始めて、バイトを始めた。しんどいわりにお金って手に入らないわよね」

彼女が自分の世界の話をも自分の言いたい限り続けようとしているようにも思えた。でもそれは僕が彼女を理解できていなかっただけのようにも思える。この思いも僕の世界だけの話だ。僕たちは言葉の通じないまま自分達の好きなように話していただけなのかもしれない。そして相手の言っていることを自分の都合のいいように解釈して納得してきただけなのだろうか。気付けば、彼女の話は元の話とはかけ離れた広がりを見せている。

「もう、周りの人たちにもうんざりなの。みんななぜ人がどういうことをしてきたかなんて聞くのかしら。家族は？兄弟は何人？どこに住んでいるの？出身はどこ？彼氏はいるの？そう言っただけが捨ててきたもの総てをみんなが一つずつ私の前に引きずり出してくるの。私はどこへも行けない。私は私でしかない。もう限界なの。ほかの誰でもいい誰かになりたい」

ほかの誰でもいい誰か、僕がいつも抱いていた存在。僕が誰よりも一人を望んだときのことだ。

だとするならば今の彼女の中には彼女だけしか住んではいけないの

かもしれない。きっと結婚するという相手でさえそうであろう。今の自分に疲れたと言うなら、彼女に必要なのもう揺らがない安定した生活の保障だけだ。それだけは僕にも分かった。

僕が彼女との未来に不安を感じていたのも事実だった。この生活は心地よかつたけれど、留まっていた。社会に適応し繋がりを産み出すような流れは全く存在しない。二人だけの生活であって、二人だけでしか行えない生活だった。そして何より僕自身が中途半端な学生という立場でしかない。この居心地のよさは、そこが普通でないからであることを僕はいつからか忘れていた。

このどこか中に浮いたような生活は僕が望んでいたものそのものでもそれは彼女が望んでいたものではなかった。いや、彼女は本当は何かを望んでさえいない。失うことの怖さを知ること、自身に諦めを付けようとしたただけだ。

いつのまにか彼女は泣いていた。

「ごめんなさい、怖いいろいろなことが。ここにいと色々と考えすぎてしまうのよ」

僕は彼女に触れることができなかった。

決して泣いている彼女を見たからではなく、そこに潜む本当の理由はほかにあった。彼女の吐き出した思いは、ただこの部屋に流れ出るばかりで、実際は何一つ噛み合っていないことに僕だけが気付いていたからだった。

その日の夜は小さな布団の上で背中を向け合って寝ることになった。

僕の中では、自分の考えの浅はかさとこの部屋の下の階のどこか

に住むおばさんが話したことが現実に取りこりえたことへのなんとも  
いえない羞恥と屈辱とが入り乱れていた。僕はこの部屋に混在する  
どこへも辿り着かず、どれも結び合わない人間という虚ろな存在の  
愚かさを頭の中で弄びながら布団の上で寝転がっていた。彼女がい  
つ泣き止みそしていつ寝たのか、そしていつ次の日になったのかは  
何度その場面に戻っても思い出せない。

その日は僕たちが抱き合うことなく二人で布団に寝る初めての日  
だった。そして最後の日でもあった。

彼女とのこのときに話した会話がどれほどリアルでも、この平行  
世界を何度繰り返しても彼女が別れ話をし、僕が彼女の部屋をでる  
日のことはどうもぼんやりとしてあやふやな感覚でしか存在してい  
ない。それが何を示しているのか、自分にどれほど大きなことだっ  
たのか。この場面を思い返すたび僕は自分の頭の仲がからっぽにな  
ったような気がしていて、何一つ考えを思いつくことが出来ないで  
いる自分に苛立っていた。

現実の過去を振り返ってみても、自分が今までに手にいれること  
のできなかつたものは、数え切れないほどたくさんあったけれど、  
失ったものといえばさほど数多くはない。手に入らないものは自分  
の能力や立場によるものだと自らを蔑めば事足りていた。失うもの

はいつも失っていない自分という過去と対峙していなければならぬ。失うものは何かを変えたり、努力したりすることでやり直すことのできないもの、時間の流れに乗る僕ら人間には何をもってしても過去というべき振り返る存在でしかなくなってしまうものだ。この部屋や彼女との生活がその失われるものになってしまう。

彼女が僕との関係に終わりを告げてから、幾日かは現状と同じ日々が続いた。彼女を抱き、布団の上で過ごす時間も。そのなかで彼女は少しずつこの部屋を出る用意をしていた。

あまり多くの物が無いこの部屋にも片付ける物はあるようで、大きな段ボール箱が一箱いっぱいになった。残ったのは、コップ二つにやかん、インスタントコーヒー、小説の山、そして布団を残すのみだった。

彼女は小説を全部僕にくれた。

彼女はもう読まないから、と言った。

今年の梅雨の終わりを知らせる夕立が降った。ここにいる僕が感じる雨のにおいも畳みの感触もたれた壁のざらついた肌触りもすべて現実的な感覚で感じるものであるし、何より彼女の柔らかい温もりはそれを感じることで僕という存在があることを教えてくれる。何かを人から隠し、それを見つからないように距離感を保つことで自分の存在を保とうとする。それは誰でもやっていることのように思っけれど、果たしてそれは現実を生きていることになっ

ているのだろうか。よく本当の自分はこんなんじゃない、と話す人を見ることがある。人前でうまく自分を出せないことを悲観した言葉なのだろう。でも僕には本当の自分というものがどういうものであるか明確に自覚することができない。今まで僕は僕を演じた部分は確かにあった。ただそうじゃない僕は、彼女の前にいるこの男では決して無いと思う。

では僕は誰だ？

子供の頃の思い出したくない僕はどんな僕だった？

大学にいたころの僕とこの部屋に来た僕の違いは？

そしてこの部屋を去った後、僕はどうなるのだろうか。

遠い過去とつい最近の過去、これからの未来、そして現在<sup>いま</sup>。そのどれもが自分であるはずなのに、全く違うもののように感じる。

もう一度振り返って考えてみても、彼女の言っている結婚というのはおそらく嘘だ。バイトを辞めてから、彼女は一度もこの部屋を離れていない。相手がいるとして、電話をかけに行くという行為さえ見せることがないのだ。それでも彼女がこの場所を離れるという。

次の場所を見つけたということだろうか。

彼女もまた僕と同じように誰も知る人のいない町へ行こうとしているのかもしれないと思った。傷つくことから逃げるために。それならばやはり彼女にとって僕は自分らしく生きることへの障害の一つでしかなかったということだろうか。

この時初めて思ったのだけれど、僕が来るようになってからこの部屋に増えたものは何一つなかった。

本当に何一つ。

バイトをやめた彼女は時間を持て余すようになったのか、僕を連れて散歩へ出かけるようになった。そしてあの林の中の神社へと向かった。この夏の猛暑の日にあつて反り返るように見上げねばならないほど高くなった木々の下は昼時とは思えないほど涼やかで過ごしやすかった。ただ、僕たち以外は誰一人として見当たらなかった。まあ実際のところヒートアイランド現象などという問題まで起こしているこの国でエアコンのある家から出てわざわざこの人気がない場所に涼みに来るような人もいないだろう。何よりもまず普通に生きている人達はそんなに暇ではない。

僕たちはあの日みたいに賽銭箱の奥の階段に二人で腰掛けた。鳥居から神社まで続く道に沿って木々の隙間から覗く直線的な空にはあのときのような曇り空はなく、どこまでも澄んだ目にしみるような青さだけだった。木々の陰を落としたほの暗い景色に真っ直ぐな青いラインのコントラストは写真に残したくなるような綺麗なものだったけれど、今のここからはどこにもいけそうにない、息が詰まりそうなほど絶望的に完全な世界であるように感じた。これがあの時と同じ場所だなんてとても信じられなかった。どこにいてもどこへでも行けるような感覚はもう失われてしまったということだろうか。呆けたような僕の間隙をつくように彼女がくちづけした。いつものように自然にさり気なく奪うように、そして悪戯な微笑。あの部屋にいる時とやら変らぬ行動だった。ただ一つだけ違ったのはその彼女の仕草に僕はいつもの焼け付くような性欲は沸きあがってこなかった。お互いの眼鏡を外すこともなく、彼女の服を脱がすこと



もなく、丁寧に愛撫することもなく下着を乱暴に剥ぎ取ってセックスという行為を動物がするそのように僕達はただただ繰り返した。そこにあつたのは僕でもなく、彼女でもなくこのくだらない世界を覗けばすぐに見つかるような、ただの性欲に乱れた男と女でしかなかった。彼女にも自分にも嫌悪感と苛立ちを感じる。それでも何もできないままでいる自分という存在の根幹が短絡な欲求と理性の弱さに満ちていることを憎んだ。その憎しみは行き場もなくなってもその日を繰り返すたびに今もおりのように僕の中に積もっている。

互いの汗を不快に感じたのはこの時が初めてだった。

彼女はこの部屋をでるための準備を、なにも行っていないのはと思わせるほど、曖昧に行っていたように思う。彼女はこれからのことを一切話したりはしない。誰かと連絡をするということも一度も無かった。僕らは彼女がこの部屋を出ると言ってから数日かを殆どどの会話をせず、それでいて片時も離れることなく一緒に過ごしていた。僕はその中でいつもの後から思い出すような夢を見ては目を覚まし、この暑い季節に体の芯まで冷えてしまうような家の中にいる白昼夢を繰り返し見ていた。その白昼夢を見てしまったあとでも彼女の態度に変化は見られなかった。僕は自分がどんな状態で白昼夢を見ているのかを知りたかったけれど、彼女にそれを聞くことは出来なかった。もとより彼女にはそんな僕のことなど本当にどうでもいいように見えた。この部屋にあるものは、僕の存在も含めて彼女にはすでに過ぎてしまったものであるような気がした。

それでも、僕は片付けるものがなくなつた日その日が最後である

と知った。

僕は彼女に帰るよといった。彼女は明日でいいと言った。その日も僕は彼女を抱き布団の上で寝た。とても暑い夜だった。

僕はその夜、寝苦しくて目が覚めた。

流して顔を洗い両手で水をすくって飲んだ。生ぬるい水が不快な暑さを少しだけ癒してくれた。何気なく窓の外を見る。

窓から見える景色は今日も月が光る蒼く深い空と絶望的に暗い林だった。そこにひっそりと存在する神社のことを考えた。この窓からでは木が邪魔して神社を見ることが出来ない。あの夕立が連れて来た不思議な体験のことを考える。そして彼女が終わらせようとしているこの世界のことを考える。どちらも現実味の無い内容だった。それでも霧に包まれたようなあの世界はこの先の現実よりも随分リアルでいつも僕の中に存在している気がしている。それはあの時、彼女が言ったようにそれが昔から存在している僕の世界だからだろうと思う。僕の中の一部は常にあそこにいたのだ。それを気づかさなかったときはとても悲しい気持ちがあった。それを彼女と一緒に感じることで僕はそれを消し去ろうとしていたのかもしれない。僕が過去に置いて来た自分から離れ現在いまここにいる僕として生きていくために彼女を利用しようとしたのだ。僕は結局自分自身のためだけに彼女とのこの生活を望んでいた。そのために他のものをすべておざなりにして何も考えないようにしていたのかもしれない。その盲目的な思想が彼女には不快だったのかもしれない。おばさんが一度話していた彼女が僕を怖いと言った話はそういうことなのかもしれない。

結局、僕は自分の都合のいいように自分を取り巻く世界をうまく造り替えようとしていただけかもしれない。このどこからも隔離さ

れたような生活に巻き込まれたのは僕ではなく彼女だったのかも  
れない、そう思う。

ふと、気づけば僕は自分のいる場所の状況や方向感覚を失っ  
ていることに気付いた。目に映る景色は先ほどと変わってはいない。そ  
れなのに自分が立っていれば足の裏に感じるはずの畳に触れている  
感覚も流しに触れているはずの手の感覚も全く感じられないでいた。  
ただ何も感じられないまま景色だけはずっと自分の目に写っていた。

その目に見える景色の先には先ほどは見えなかったはずの神社が  
見えた。

神社は月明かりに照らされて薄暗くあってもその存在ははっきり  
としている。

これも夢だろうか、それとも白昼夢であろうか。

それでも不快な暑さはいまだに感じられている。自分が目を閉じ  
ている感覚もないまま、目の前があんてんをひかれた様に真っ暗に  
なっってはまた景色が見える。

それは神社までの暗い林の景色に変わる。

虫の音が五月蠅く響いているなか僕の体は背中から何かに押さえ  
つけられているように重い。自分の体が思うように動かない夢は今  
まで何度か見てきた、それでも重さのために体に現実的な疲労や汗  
を感じるのは初めてだった。

僕は誰かに負ぶされたような感覚のまま重い体を引きずり神社の  
境内を通り過ぎ更に闇の深い木々がそびえる林の奥へ向かっていた。

普段見る夢と同じようにその中で行っている自分の行動にはつきりとした理由を見つけないことは出来なかった。でもそれを考えている間、いつの間にか自分がザクザクと地面を掘っていることに気が付き、これはあの陰気な家に居る夢と繋がっているんだと妙な納得を受けいれている自分がいた。そう思うことで自分の体が軽くなっていることに気がついた。そして自分が何故穴を掘る夢ばかり見るのかと思い始めたとき、体の疲労からであるのか自分が膝をつきそうによるけるのを感じた。体が感じるはずの地面の感触は全く無く、辺りが本当の闇であることに気付く。暗闇の中で何かがどさっと落ちるような音を聞いた。

そして誰かが僕の後頭部を思い切り叩いたように僕は眠りに落ちた。

そしてまた、ざくざくという音が聞こえる。両手に何か握られている感覚がある。酷く冷たい。掌に刺さるような冷たさでと歪に響く金属音で僕は自分が何をしているかを知る。それと同時に自分の視界がひらけすべてを見ることができるようになる。温度の低さに白んでいる大地にわずかに空いた穴が見える。ざくざくという自分が穴を掘る音。僕が掴むのはシャベル。僕はここで固い大地に穴を掘っている。

どれが白昼夢でどれが夢でどれが現実なのか、僕は本当にどうかしてしまっただよう。なにか感情的な自分には出会うことはできないでいるけれど、彼女との別れが来ることで自分の心に影響が出たことで白昼夢はまた繰り返されるのだろうか。

硬い地面をシャベルで掘るといふのは過酷な肉体労働だけれど、寒さは少しも収まらなかった。それでも疲労だけはやはりやってきて僕は曲げたままでだるくなった腰を伸ばした。そこで初めて景色を見渡す。僕がこの夢の中で住む場所は空中に浮かぶ小さな島のよゆうなもので、周りは削り取られたよゆうな崖だった。一回り辺りを見渡しただけで僕はこの場所の状況をすべて理解した。それは最初から知っていたように。ただ忘れていただけのように。僕はシャベルを置き、崖ぎりぎりまで行ってみる。そこから谷を見下ろすとしるんだ景色の遠くへ広い街を見ることができた。その街はとも近代的で高層ビルが幾つも立ち並んで耳を澄ませば車の走る音やクラクションを鳴らす音がほんの僅か聞こえてくるよゆうな気がした。僕はその街を知っている。それは知っていると以前に僕以外の全ての人たちが住んでいるそのことを認識しているのだ。僕がいる場所からは絶対にたどり着けない場所。僕が知っていてそれでいて僕を知らない人たちが住む街。

そして僕はその街を見るのを止め、さっきまでの仕事をしようとする。振り返った僕が見たものは地面に掘られた穴。縦長に掘られた穴、一人がすっぽりと納まりそうなくらい大きな穴、僕が掘った穴、その横には掘り起こした土が積み重ねられたひとつの山とひとつの大きな木でできた箱が存在した。

僕は穴を掘る作業を止め、シャベルの先を地面に立て、柄のところに腕を乗せそこに上半身の体重と顎をあずけ、じっと木箱のほうを眺めていた。僕自身はそれを自分の両眼の中の方から覗いているよゆうな奇妙な感覚があった。

そのうち両頬に妙なハリを感じているじぶん気付いた。そのハりは最初とても違和感があったて頬が腫れているよゆうなイメージを持っていたが、そのうちそのハリが何であるか僕は気付き始めた。

そうか、僕は笑っているんだ。

再び起きた時には異常なほど体に疲れが残っていた。彼女の荷物をまとめるのを手伝ったせいかもしれない。痺れる様な感覚を持った二の腕をしばらく手で揉んだ。布団には僕一人だった。彼女の存在はこの部屋には感じられなかった。そのことに何故か僕は違和感を感じることが出来なかった。

体の疲れと寝起きのだるさが僕の思考能力を奪ったのが暫くじつとしていた。そして自分の意思でなく義務感から彼女を探そうとした。開け放たれた窓からは朝もやの中神社へと続く林が見える。ここから見える外には彼女はいない。僕は部屋をでて、トイレへと向かった。個室になった洋式のトイレはすべてが空いており誰も入っていない。それを見たあとで僕は男性用のトイレで用を足した。

そしてはつきりと認識した。どうやら僕が寝ている間に彼女はどこかへ行ってしまったようだ。なぜか荷物を入れたダンボールはまだ残っている。でも僕は帰るべきだと思った。僕は何一つ彼女にかけるべき言葉を思いつけないからだ。それは彼女も同じなのかもしれない。うつすらと夜が明け始める。新聞配達のカブが滑らかでシンプルなエンジン音を響かせている。

朝早く僕は彼女の部屋を出た。小説はスーパーのレジ袋に入れた。神社へは行かなかった。あの場所へは妄想のようなおぼろげな二人の世界は存在せず、現実的で短絡的な欲望の残り香しか存在してはいないからだ。

今日は一体何日で何曜日なのだろうか？

それが今まで僕がいた世界から戻り現実の世界へ入っていくためには必要なものであることを知って可笑しくなってくる。彼女との生活自体は酷く規則的なものだったような気がしていた。それは僕たちが眼鏡を外し布団の上で抱き合う時とそうでない時の繰り返しという意味でしかないのだが。現実はみな週末や仕事の休日を中心として一週間をめどに回っているのだ。

夕焼けとも見えるような朝日のオレンジを体に浴びながら、アパートからの坂道をゆっくりと降りてゆく。線路に突き当たって、駅のある方へ曲がると次第に人の姿を目にするようになる。普通ならごくあたりまえの景色に僕は随分と違和感を感じる。彼女と僕以外の存在を久しぶりに感じたからだだった。

改札を抜けて電車を待つ。一分もしないでタイミングよく電車が停まる。電車の中にはほとんど人は乗っていない。出張でも行くのか大きな荷物を持ったサラリーマンや僅かに学生がいるのみであった。それでもなんだか自分だけが浮いているような感じがした。人の目が妙に気になる。僕は妙に周りを意識してチリチリする神経を落ち着かせるように目を閉じた。ひどく疲れていたけど眠気はまったく起きず、乗り過ごす心配は無かった。

僕の住む、住んでいた下宿の最寄り駅には十分ほどで着いた。こんなに近かったのかと思う。

駅から降りると見慣れたコンビニが見える。僕は食べるものを買おうとコンビニに入った。まだ七時前だったけれど、コンビニの店員は交代したのか依然に何度も訪れていたときに見た店員ではなか

った。生真面目そうに必要以上に生き生きとしていらっしやいませといった。僕は牛乳とミネラルウォーターとパンを買った。コンビニを出て部屋までの道のりは白昼夢に悩まされていた頃と同じ道順だった。人がぼつぼつと歩いている。こんな朝早い時間にこの辺りを歩くのは初めてであるような気がする。薬局の横を通り過ぎるときコンドームの自動販売機を見た。まだ彼女のところに通っている間は行かたびに買っていたような気がする。買ったたびに周りへの羞恥心は薄れていったように思う。自分が本当に頭の悪い生き物のようない気がした。そして僕は自分のマンションへ着いた。

久しぶりに自分の部屋に帰った。この部屋が自分のものであることに違和感があった。自分の部屋にいる気がしなかった。部屋にある何もかもが所有者を僕と認めていない気がする。彼女の部屋と比べると随分と雑然としている。建物のボロさに隠れていたけれど彼女はきれいだっただのかもしれない。洗濯物のたまりや布団の乱れ、漫画や雑誌の散らかし具合から僕は彼女の部屋これほど長く居座ろうと思っていなかったことに気付く。しばらく何も考えることが出来ず部屋の真ん中に立ち尽くしたまま、ただただじっとしていた。

それから十分ほどして思いついた行動は、風呂にはいることと寝ることだけだった。

僕は元の生活に戻った。

とはいっても、僕という存在はどこに戻ればいいのか全く分かっていなかった。大学では以前の友人がひどく遠くに感じられた。何ヶ



月も音信不通なら当然のことなのかもしれない。僕は彼らと一定の距離を保ったまま付き合っていくことにした。このしばらくの期間のことを深く聞かれたくなかったし、うまく話せる自信もなかったからだ。

ただ、ちよつとした旅に出ていたなどどうでもいいような嘘とふざけたような態度を繰り返すことで友人達も必要以上のことは聞かなかった。彼らも僕が聞かれたくないことがあるのだということをしりげなく理解してくれていたのかもしれない。そういう風に思えたのは随分後のことで、このときはただ聞かれなくなったことで面倒がなくなつたぐらいにしか思えてはいなかった。それほど自分だけのことに精一杯だったのかもしれない。

帰ってきて僕も僕の部屋では変な夢や白昼夢のようなものは見なくなった。ようよと自分の体が自分の部屋にも馴染み始めた頃、また原付が壊れた。何となく直すきつかけが掴めなくて電車を通うことにした。朝時刻表に従って電車に乗り、時間割に沿って大学に行き、また電車で帰った。昼は起きているための昼であり、夜は眠るための夜だった。

茹だる様な夏の盛りには、自分の部屋に帰ってきた時の違和感も、大学での疎外感も完全に薄れていった。

サークルにも顔を出すようになり、何事もなかったようにまた友人たちとの生活を楽しむことができるようになった。ただその中にあって僕はまた僕を演じている。あの部屋に存在した僕は彼女が消えてしまったことでそっくりそのまま切り貫かれたみたいに抜け落

ちた感覚が常に存在した。中身が空っぽのような自分が、普通に大  
学生生活をしていることがなんだかひどく怖かった。鏡や建物のガラ  
スに写る自分がどこか作り物のように感じることもあった。夢や現  
実がどちらもありアルに感じられながらもその一部が作り物であるよ  
うにも感じてしまう奇妙な感覚が僕の中では渦巻いていた。ただ、  
それをどうすることも出来ないまま時間は過ぎていった。

前期の授業が終わり、試験期間に入った。そしてそれも終わり、  
約二ヶ月ほどの休みに入った。

大概の人たちはやはり実家に帰る。地元の友達にも会いに行くだ  
ろうし、実家ではお金を使うことも無くメシにありつけるからだ。  
僕は去年と同じようにこの町にとどまり、市営のプールの回数券を  
購入し、人の少ない午前中にプールで泳ぎ続けた。昼には大学まで  
行き、休みでも空いている学食で昼を済ませ、下宿の近くにある市  
立図書館へ行く。

図書館には映画のLDレーザーディスクが置いてあり、借りるだけでなく視聴コー  
ナーが設けてあるのでそこで見る事ができる。それを一本観た後  
でスポーツ紙や情報誌に一通り目を通し下宿へ帰る。帰り際に夕食  
を買い込み出来合いのものを温めてそれを食べる。彼女との生活の  
中で存在していなかったテレビは表情を変えず置物のようになって  
いる。ついでないだまでは意味も無く付けっぱなしにしていたはず  
なのに。必要性を何ひとつ感じないことが不思議だった。それでも  
風呂だけは違った。毎日湯船に湯を張り、じっくりと入った。濡ら

したタオルで拭くだけでは得られない心地よさだった。

風呂から出て髪を乾かし、冷蔵庫から買っておいたビールを取り出す。そして部屋の片隅に置かれていたスーパールの袋から小説をひとつ取り出し、壁にもたれてそれを読み始める。アルコールが脳に達して眠気を催し始めるとそれに逆らうことなく布団に入り眠りのなかへ落ちてゆく。なにも遮らない死んだように静かな生活。これが僕が望んだようなどこからも遮断された世界か。その世界にあるのは、僕が今までいた彼女の部屋での生活との違いを確認する作業ばかりだった。どうにも苦痛ともいえない複雑な感情が息巻いている。静かな生活で静かであるはずの心の底は酷く波打ち悶々とする日々が続いていった。プールを泳ぐ距離が長くなっても、クロールのスピードが上がっても、酒の量やアルコールが強くなってもこの思いのざわつきは収まりを見せてはくれなかった。

陽は日々日暮れの時間を遅くしていき、昼は長く長くなってゆく。いつものように図書館を出て、夕食を買うためによったスーパールで僕はあるものを見つけた。それはどこにでも売っているインスタントのコーヒードだった。彼女の部屋にあったものと同じだった。それを買って帰り、湯を沸かしてコーヒードを作った。彼女の手際に比べ単純な作業なのに僕の動きは無駄が多く無様に感じた。それでもあたりまえのことながら、その味は彼女の入れてくれたものと変わらず、ただの苦味のある温かい飲み物でしかなかった。流しにもたれてコーヒードをすすりながらふと自分の部屋の窓の外を見る。そこにあるのは僕のいるこの下宿と同じような学生マンションの一部が見えるだけだ。見慣れた景色であるはずなのに、ひどく息苦しくなった。僕は飲みさしのコーヒードを流しに捨て、鍵と財布だけを持ち部屋を

出た。修理済みの原付は暫く乗っていなかったのになかなかエンジンが掛からなかった。

ようやく掛かったエンジンの出す煙は驚くほど白かった。

僕は彼女の部屋にもう一度いった。彼女の後にはまだ誰も入ってはいない。玄関の鍵は開いていた。部屋は西日が強く全体がオレンジ色に染まっていた。

畳の上に座り、目をつぶれば今も彼女の裸体と眼鏡の当たる音が思い出された。そこに残るのは彼女のいなくなったことへの寂しさではなく彼女を抱いていた今までの僕の欲望の大きさだけが残っていた。僕は興奮していた。それはことのほか大きく、そしてあまりに恥ずかしく屈辱感にも似たようになってしまいそうなほど僕の感情を揺さぶった。この畳に寝転がり、その欲望をここで吐き出してしまいたい気分になったけれど、それはやめることにした。自分の創造の中で彼女をまた抱けてしまうのは自分にとってあまり良い事ではないような気がしたからだ。僕は夕日に背を向け赤ん坊のようにうずくまった。

彼女の朝食を作る音で起きることはもうないのだ。

手のひらを見ると血のように真っ赤に染まっていた。

日が落ちて夕焼けが強くなってきている。まだ夜でも暑い時期だったけれど、この陰湿な部屋の中に居るせいか、体温の下がるのを感じる。

そして僕は次第に重くなる瞼を閉じ、何かの音に耳を澄ました。聞き覚えがある。いつもの彼女が台所で奏でている音。本当に聞こえているようだ。

でも、僕は畳の上で寝てはいない。そう例の夢の中だから。僕は固いベットから体だけ起こす。台所のほうを見ても彼女はいい。よくよく聞けばその音は台所でなく家の外から聞こえてきていた。僕は家を出てその音に耳を澄ます。音は確かに聞こえていたが、彼女の部屋にいた最後の夜に見たあの夢ではあった筈の穴がどこにも見当たらなかった。ただ音は次第に大きくなっていった。でもそれは僕の耳に聞こえてくる音のボリュームだけを大きくしているような感覚だった。

そして何か変な違和感が僕を襲う。そして違和感の原因を僕は探し当てた。

地面が少し盛り上がっている。僕が掘っていた場所だったところだ。

そして何かが地面から這い出してきている。僕は目を凝らす。

盛り上がった地面はそのしたからの力の強さに耐えかねて崩れ始める。地面から出てこようとしたものは、持て余した力でズボツとい気負いよく飛び出した。

それは人の腕だった。

その腕には見覚えがあった。青白く土に塗れてはいるけれど、あの芸術的な節のない指の曲線は彼女のものに間違いなかった。

そうだ。

僕が連れてくるはずだったのだ。

次第に全てが外に現れてくる。ただそれは不完全なままだった。

土の被さったボサボサの髪の毛の下から覗くはずの彼女の大きな瞳は、白く無機質な塊に空いたただの暗闇でしかなかった。

扉の前でただ立ち尽くす僕のほうへその骸は土の中から歩き出そうとした。自分の体が凍り付いているのが分かる。土まみれになった体を引きずるように草の上を這ってこちらへやってこようとしている。そのうちにボサボサの髪の毛は徐々に抜け落ち、青白い皮膚は剥がれ始めている。

骨は無残に崩れ落ちた。頭髮は辺りに生える草たちと同じように時折強く吹く風にたなびいていた。僅かに皮膚のついた彼女の右手はそれでも僕のほうへ動き出していた。五本の指を奇妙に動かし玄関へと続く道を肘のあたりを引きずりながら間違はなく僕のほうへ向かってきていた。恐怖と混乱で感情が溢れ出しそうになるその瞬間に目の前が真っ暗になった。

彼女が住んでいる部屋だった。体には決して季節のせいではない汗でびっしょりだった。背筋と首ものにはまだ今まで見ていたものが現実性を残しているような悪寒が残っている。僕は膝を抱え込み晩夏の暑さが体に染み渡るのを待った。

僕は彼女を連れて行くことが出来なかったのだ。誰もいない二人しかない世界へ。これがその報いなのだろうか。

部屋を出た後、神社へと歩いた。鳥居を通り境内へ向かう。相変わらず人気がない。ここからでは木々が邪魔してあの部屋は見えなかった。あの時と同じ場所に座ってみた。彼女を見た最後の日も見たけれどやはり、そこからは全く違った景色しか見えなかった。本当にあの霧の中でいた場所と同じ場所なのだろうか。どちらにしろ僕と彼女のあの部屋での生活は終わりを告げた。彼女の一方的な理由によるものだけれど。先ほどの夢は、彼女との生活の喪失が僕にどれだけのものであるかを教えるためのものだったのではないかと思う。

そうでないならこの現実感の無さや感じるべき寂しさをこの身に感じることもなく何の感慨も沸かない現状を受け入れられそうもない僕はあの霧の囲むどこからも隔離されたような寂しい場所を彼女に見せた。それは僕の心の在処であって弱さという体の一部が暮らす世界。

僕は彼女がいた部屋を後にすることにした。帰り道には今まで気づかなかったものがたくさん目に入ってきた。並行して進む電車の中を覗けば、どこを見ることもなく感情の消えた顔でじつと目的地に着くのを待つ人達、線路の反対側の田んぼに張られた水とそこから漂う泥土の臭い。そこには体に実感できる現実と暑さがあった。僕は失いかけた日常に戻ることにまた不安を覚えていた。

夕日はその燃えるような赤色を電車の中まで突き刺している。目に映る僕の両手は血のように真っ赤に染まっている。

もう残りの僕の大学生活の中ではあの駅で降りることはまずないと考えていい。

彼女のことを考える。彼女は変わってゆくだろう。綺麗だった細

く長い指も特徴的なあの髪型も。家族とは再会したのだろうか。またもとの家族に帰るのだろうか。そうならば彼女の言った本当の自分なんて見ることはもう出来ないのだろうか。何もかも意味のない考えだった。

すべては失われてゆくものだ。

ただ僕の中にはいつまでも残ってゆく。

この時この場所、そして彼女が、神社から見た景色が。

色あせない原色の住人達、彼らは僕が生きる日常の何気ない一瞬に潜み、時として溢れ出し、僕の前へと姿を見せる。彼女は僕の中に住む住人、きっともそれ以上でもそれ以下でもない。

ただ、それはいつまでも存在し続ける。

そして僕の白昼夢は終わる。



## 5・終わる白昼夢（後書き）

完読感謝。次が最終話です。

## 6・僕に住む住人

そして今日も僕は公園のベンチでタバコをふかし、仕事をサボっている。

それが今ある現実の世界で、僕は僕へと戻る。どれほどの時間が過ぎたのか分からないが、体にはずっと同じ体制をしていたときよくな体の張りを感じている。

火をつけたばかりのはずだったタバコは、いつの間にかフィルタ―以外は灰になって靴の上に乗っている。タバコを挟んでいた指の隙間を感じているはしるような痛みは火傷によるものだろうか。

このタバコの灰みたいに、僕は今も独りで時間を浪費するように生きている。

よくよく思えば彼女と別れてからずっとそうしているようにも思える。実際そう言い切れないのは認めてしまうのが怖いからなのかもしれない。歳をとったと人が感じるのは、昔を振り返ることが多くなったことに気付くときだと誰かが言っていた。僕は歳をとったのかもしれない。でもこの平行世界のように振り返る過去は少しも過去になってはいない。

それでもやはり、この目に映る現実は今も確実に時を刻む。

公園の入り口から子供づれの女性が遊具のほうへ歩いていく。子

供は遊具を目にするとそのおそらく母親である女性の手を振り解き、一目散にブランコに飛び乗った。垂れ下がる鎖を掴んだ両手でバランスをとり、両足の振りで上手に勢いをつけてブランコを漕いでいる。その揺れに身を任せながら風を感じているその顔は何より嬉しそうだ。僕は子供が好きじゃないけれど、子供のような大人を見ているのよりはずっと気が楽だ。ただ子供が飽きるまでじっとそこに付いていなくてはならない親は大変だなと思った。

しばらくどこを見るとということもなくブランコに乗る子供のほうを向いていると、母親らしい女性の視線を感じた。僕がそちらを向くと女性は険しい表情でこちらを睨んでいる。僕は一瞬、会ったことがある人だろうかと考えただけけれど、自分がすぐに女性が睨む理由を思いつけなかったことに思わず苦笑してしまった。

そうか、そうなのだ。

あの女性に僕が何かをしたわけではなく、何もしないでただ女性の連れていた子供を見ていたことが問題なのだ。この大概の人たちが働いている昼過ぎの時間帯に公園のベンチからじつと子供を見ている男、それは子を持つ人たちにとって怪しい人間以外の何者でもないのだ。この世界ではのんびりと公園で暇を潰すことも許されないような時代になってきているのだ。何もかもが随分と変ってしまったなと思う。まだあの頃はそうではなかった気がする。そんな気がするのは、僕がまだ社会とは隔離された学生という身分だったからに違いないのだろう。

彼女との生活が終わってからのことを話す。

大学は不平不満をぶつぶつ言いながら卒業し、一社会人として社会と出るため就職活動をし、会社へと入った。

大学生活で得たものというのは、頭の中の抽斗ひしだしをどこをどう探しても見つけれそうに無い。失ったものは彼女との生活と浪費することのできる時間だった。それがこれからの人生にどう関わってくるのかということとその頃は考えられもなかった。でも彼女の部屋で過ごしたような気持ちで生きていける場所はもう二度とないことだけははっきりと分かっていた。

現実的世界の定義として、人は人と触れ合うことでしか生活を維持できない。それが社会というもので、社会性とは人が複数集まってこそ生まれるものらしい。

ただ、彼女の部屋、もしくは彼女しかいなかった世界から離れ、僕が生きていかなければならないこの世界にはどうも触れ合わなければいけない人が多すぎる。それはあの生活を繰り返してきた僕には随分と違和感を感じさせられる。だからといって忘れられたような静かな場所では人は長くは生きていられない。だから僕はまた別の場所を求めた（彼女が求めたように）。そこへ行くのに必要な事は今まで経験したことを最大限利用しなければならず、そして足りないものは僅かばかりの間でも必死になって身に付け自分を取り巻く環境から下される評価に耐えなければならぬ。社会に出るということはどうやらそうということらしい。

僕が普通の大学生のように生活をもどしてからは、彼女の部屋で暇つぶしにしていた読書が残りの大学生活の中でどんどん幅を利かせるようになり、最終的に僕は就職先の希望を（僕自身やりたいことなど何も見つけられてはいなかったが）絞るうえでその中心となった。もちろん単純に読書好きなだけで仕事場が決まるなんてことも無く、採用を得るまでにはそれなりに苦労した。

そして僕は東京のあまり大きくはない製本会社に入った。

その会社では本屋からの注文を聞いて扱っている書籍を店舗ごとに卸していく。僕はその得意先の本屋に本を卸す仕事に就いた。とくに何の能力も必要としてはいない。会社で注文を受け、本が揃うとそれを車に積み込み得意先へ順に回っていく。店の中へ運び入れ、店長と在り来たりな世間話と本の売れ行きや新刊の卸の商談をする。実際それが良いものであるかないかに関わらず、売れるものは売れ売れないものは売れないそして毎日次々と新しい本が本屋へと並んでいく。この業界が不況というのは本当のことだろうかと思ってしまう。そんな疑問でさえ平坦な毎日には全く影響をあたえることはない。

ここでの僕は特に何の問題も起こしてはいない、今までだったとうだった。能力も態度も存在も、とくに目立つわけでなく、人一倍の仕事ができるわけでもない。かといって仕事をしないわけではなく、波風をたてる堅物でもない。職場においておけば、それなりに機能するが、他の誰かでも特に変わることも無い。それが今の僕だ。ある時期にひどくそれを望んでいたような人間像だった。今思えばこれは実際の僕なのかもしれない。今まで深く考えすぎていたのかもしれない。

この町でも僕は同じように他人と付き合いその中でできる限り都合の良い自分の立場と居場所を決める。そしてそれを壊さないよう

にうまく立ち回っていく。

平日は会社へ行き、週末は（当たり前障り無く作り上げた）仲間たちと飲みに行くこともあり、休日は布団の中で二日酔いが醒めるのを待った。それを年月の分だけ繰り返しその中で恋人をつくりセックスをし、そして別れた。

何も考えず生きることがいかに簡単なことか。

それができている自分に腹を立てることもない。

振り返ることと、その過去と今の自分を比べることで自分というものを少しづつ知りながら、同じ何かを失いながら日々をただ死んだように生きている。

ただ、酷く疲れたとき、電車に乗ると決まって彼女との出会いの日を思い出した。

いつのまにか眠気が僕を襲う。そんな折には降りる駅を降り過すことに期待さえ覚えた。

このまま寝てしまいたい、そして僕をまたあの場所に連れて行ってくれないか。

浮かび上がるのは、彼女のおぼろげな姿、しぐさ、細い体。そして僕を非難する声、涙、眼鏡と裸。そしてあの夏の蒸し暑さの中にあって背筋をつたう汗が冷やりした感じを覚えたあの白昼夢の中、穴を掘る音。

でも、ふと思い出すのは彼女の泣いている姿でしかなかった。

「…あなたは何も求めなさすぎる。とても深くて怖い。どこまでいっても誰もいないんだもの」

今まで一度として見ることの無かった感情が剥き出しになった彼女の態度が僕には随分と現実味を欠いたものに写った。

「あなたは無言のまま何かを要求しようとする。何も求めないでただ受け止めようとする。あなたといると私は私自身の中にある何かを差し出さなければならなくなる。どんな辛かったことでも嫌だったことでも、そのせいで私がどんなに歪んでしまったのかもどんなに傷ついているのかも全てさらけ出されてしまう。そしてあなたはそんな私をそれが当然のように受け入れてしまう。それが怖かった」

両手で力の限り膝を抱えて何かに必死で耐えようとするように小さくなった彼女は僕を見た。彼女の感情を揺さぶった原因となった僕に関しての怒りを込めた視線ではなく、自分の中に存在した苦しい気持ちを吐き出したことを後悔しているような視線を僕に向けた。

「私は結婚する。何も考えない普通の人と。決まりきった生活で、幸せなフリをして、決まりきったセックスをして、子供を作って育ててだんだんとセックスしなくなって夫より子供にだけ目が行くようになって、女の部分をすこしずつ忘れていくの。私という存在なんてほかの誰でもよくて、幸せなんて他人と見比べてしか感じられなくなるの。でも、それは誰もがそうなってゆくことなの。自分だけじゃなくて他の誰かもそうなの、それは退屈であるけれど、不安ではないの。誰かのように生きればいつでも、安心なのそこに逃げ込めるのよ。あなたのだこにも逃げ込める場所なんてなかった。あなたの前にいる限り私は私でなくてはならない。醜さも嫌らしさも少しの偽りも無くその前に差し出さなくてはならない。ある意味で

は自由だけれど、それはある意味では辱め以外の何物でもない。私にはもうあなたの前に出せるものが無い。これですべて、もう何も無いの。何も無いのよ」

彼女がそう言った時、僕はうなだれる彼女の向かい側の壁にもたれてじっと彼女を見ていることしか出来なかった。あの時、僕が彼女の傍によって抱きしめていれば状況は変わっていたのかもしれない。彼女に対してしてきた仕打ちに対して謝ることができれば、また違った結末が待っていたのかもしれない。でもこの時の僕には彼女の言っていることの意味さえ理解できてはいなかったように思う。ただ自分いた世界が終わってしまうことを受け止めようとしているだけで、彼女の気持ちなんかは何一つ考えてあげられなかった。

その胸を掻き毟るような思いは平行世界を繰り返すたび何度も何度も繰り返された。

それなのに彼女との生活全てを手に入れたと思った頃のことはいつもあやふやなままだった。あの梅雨の日の神社での出来事をはつきりと思いつき出すことはできなかった。神社もあそこから見える景色も思い出せるのに、彼女と一緒にだった感覚がまったく無かった。思いつく神社にいたのは、いつも僕一人だった。やるせない気持ちの波に押し潰されそうになる。

帰れる場所はどこにもない。過去は過去のままに日々薄れて行く。それなのに僕が出会った幾人かの人たちとの思い出は今もただ消えることなく僕の中で続いている。

そこにはいつも彼女がいた。何もかも鮮明で色あせることもないのにただそれに触れることが出来ない。そう、触れることができないのだ。



感觸の無い現実、それが僕の中の平行世界。

触れている現実はこともなく崩れてしまっけれど。

この世界はごく単純な日常の中で存在している。意識することを失うような日常がコピーされた用紙のようにならずんとそこへ溜まり続けた。それが彼女との世界が終わりを告げてからの僕の人生だった。

ただ、その終わりは突然でありながら、滑り込むように自然に訪れた。

結果的に僕にとっては一番暑い日になった日のこと。

僕は前日の夜に約一年ほど付き合っていた女性と別れることになった。どこにでもいる普通の女性で、普通に出会い普通に一年ほど付き合っていた。

いつものように待ち合わせ、夕食を終えた後に彼女の家へと向かった。

その女性が結婚の話をしたとき、その先の将来の夢を話し出した。

ただ憤まじやかな生活の中で二人の子供と犬を一匹飼いたいなどと話し出した。僕はそのとき初めてその女性の前で白昼夢を見ることになった。その間もその女性の話は続き、その後で僕は何かをしゃべっていた。僕の視界がはつきりとして女性を見たときその女性は顔を引きつらせて目に大粒の涙をためていた。すごく当たり前のことだけれど、僕は白昼夢を見ている間にその女性を決定的に傷つけるようなことを言ったのだらう、それだけは分かった。

それでいて僕は目の前で泣くその女性に何の感情も抱けずにいる自分に気付いてもいた。悪いのはどう考えても自分であるはずなのに、取り戻そうとすればなんとかなるかもしれないのに。

女性の家から自分の家まで歩いて帰る間僕はその女性の泣いている顔一つ思い出すことはなかった。

その夜、僕の心を支配していたのは今になって他人の前でこんな白昼夢を見るようになることの原因だけだった。

大学生活で白昼夢を見ることになった時の不安に押しつぶされてしまいそうな嫌なイメージを思い出した。どこか期待感を持っていた日常の変化が白昼夢という形で起こったことに僕は予想以上に動揺していた。それはこの平坦で退屈な日常であっても自分は心の底ではそれが続くことをどこかで望んでいたのだということに気づかされたからだ。失いそうになると気づくようなことが今の僕にもあるということがなんだか可笑しかった。

何もかもが零れ落ちていく気がする。

僕は何かを築くことなんて出来ないのかもしれないと思う。

時はどんどんと流れていく。

それでも彼女との思い出の糸はずっと結びついたままで僕という一枚の生地は日々薄くほどかれていく。何が悪いのか、何が間違ったのか？

なぜ僕だけがこんな目に遭う、なぜ僕だけがこんな白昼夢を見る？

そして僕は創造をする。この平行世界を己の頭から切り離すには現実の彼女の存在を消すしかないのではないか、と。

そうすればこのどうしようもない現実を死んだように生きるだけでよくなる。

日々自分の生活まで犯し始めた彼女の影を見て今の僕は本気でそう思っていた。

できればうまくこの世界のすべてから逃げてしまえばいいのかもしれない。でも僕はその選択肢を選ぶ強さを持つことができない。自分が消えてしまうことを想像するたび、今度は別の部屋が僕を待っている。とてもとても深い過去の部屋だ。

どうしようもない過去が残した僕への戒め、それは幼少期に染み付いた死への恐怖。体が弱かったことでいつも自分の隣にあった自分が消えてしまうイメージ。血を吐いたときの動揺。逃げ切れないのかと思う失望。そこから逃げてきた自分には死というものがないのか受入れられるものではなくなっていた。全てはもう過去のことなのかもしれない。でも彼女との世界のように僕の頭の中に深く刻み込まれている。

今がどうであれ僕にとって消えることは楽になることでない。消えることは救いではない。

死の救済よりも生ける屍を選ばざるを得ない。

そう、僕は何よりも死ぬのが怖いのだ。

その夜は熱帯夜だった。

寝苦しい夜が連れてきた夢は現実と白昼夢が入り混じったものだった。

彼女との別れ。

おばさんを殴った白昼夢。

そしてさみしい丘の上にたった家の夢。

彼女の腕が土の中から出てきた夢

全てが繰り返し、全てが僕の感情を揺さぶり、全てが終わりを告げた。

暗闇の中で不快な汗の中、見上げる天井はどうにも違和感がある眺めだった。彼女といたあの部屋の天井と違うという理由だけだと思う自分が今も存在している。

僕はじつとりと掻いた汗をシャワーで執拗に洗い流し、着替えを終えた後、タバコを買いに外へ出た。夏という季節が近づいたたびに彼女と過ごした世界が頻繁に夢に出てくる。とてもいい思い出とは言いがたいそれは僕の神経をすり減らすには十分な夢で、起きた後

は逆に疲れているような気持ちにもなる。夜風は温くシャワーで熱くなつた体には不快でしかない。吸いさしのタバコを吐き捨てて、買ってきた缶ビールを道端で飲む。喉ではじける発泡と冷たさが僅かばかりの心地よさをもたらしてくれた。その心地よさに抵抗することなくため息を漏らす。

「そこでふと僕は道端に立ち止まる猫を見つける。

猫はじつとコチヲを見ている。

僕が白昼夢を見た公園のベンチで見かけた猫と似ている気がした。

「あの時は最後まで話を聞いてくれてありがとう」

僕がそう言っても、猫はまったく動かないまま僕の方を見続けた。

現実もあの平行世界もどちらもどうにもならないようなものになつてしまった。

こんな世界がいつまで続くのかと思う。

ビールを飲み干し、空き缶を自販機の横のゴミ箱に入れ、帰ろうとした。

「…そんな世界ももう終わるよ。君がそう望めばね」

振り返つた道端には猫の姿はもう無かつた。

僕は今にも大きな声で笑い出しそうな自分を抑えようと口を掌で塞いだ。

崩れそうな体を自販機にもう一方の手をついて支える。

何もかもが壊れていく。

次の日は珍しく朝早く目が覚めた。ベットから起きてカーテンを開き、窓を開ける。朝もやの中ごちゃごちゃした町並みが見える。鳥の鳴き声が聞こえ、上を見上げると電線に止まっているのが見える。ビルやマンションが隣接したこの街では仰ぎ見なければ空は見えないのだな、といまさらながら思う。それでも車も人通りもないこの早朝は何故だかは分からないけれど酷く懐かしく感じる。思い出したように体を伸ばし、心地よい感覚を覚える。最近にはなかったハッキリとした意識で日常が始まるうとしている。今ならば自分がしよう意識したことがそのままダイレクトに行動に現せそうな気持ちだった。ただそれは何かの目標を見つけた時の人が持つようなモチベーションとは違っていた。自分の内側から溢れるあらゆる感情や思いの発散先がただ一つの出口に向いてしまっただけのことだ。そのことに自分でも分からないような可笑しみを覚える。

窓を開けたままで僕はキッチンへ向かいコーヒー一杯分強の湯を沸かす。冷蔵庫から前もって荒めに挽いていたコーヒー豆を取り出し、一人分を専用のスプーンで掬う。紙製のネルを湯で湿らせ濾し機に取り付け

カップに湯を垂らし暖めでおき、サーバーをコンロに置き火がつくぎりぎりのガス量に保つ。沸騰した湯を中心に垂らしそこから八の字を描くように軽く湯をかける。そして一度ふたをして暫く蒸らす。また蓋を開け、八の字を描くように湯をかけ始める。沸き立つ湯気

に煽られる様に香ばしいコーヒーの臭いがあたりを満たしてゆく。抽出は最後までせず目的の量までコーヒーができるとフィルターをさつと外す。お湯を入れて温めておいたコップからお湯をしっかりと切り、サーバーからコーヒーを注ぐ。ミルクは入れず、コーヒーの苦味による口当たりの硬さをとるためにほんの少しだけ砂糖を入れる。スプーンで2、3回かき混ぜたところで、最初の一口目をすすする。僕は薄く入れるのが好きなのでこのときに失敗かどうか分かる。薄く入れすぎれば、水の味と砂糖の甘味が目立つ。うまくいけばコーヒーの苦味が残りすぎず僅かな甘味が醸し出される。今日はまずまずだった。自分でも気付けば異常なほどコーヒーの入れ方や味にこだわっているなと思う。今と比べると彼女の入れてくれたインスタントは随分とまずかったなと思う。ただどんなにこだわってコーヒーをいれようとしても、彼女が見せた淀みの無い流れるような動きは出せないように思う。今日という日に限って僕がコーヒーにこだわっているのは、まずいコーヒーを飲むことで彼女を思い出すことを避けていたのかもしれないと気付いてしまう。笑ってしまうようなことであるのに、僕の中からは少しも笑う感情は湧き出してこなかった。

シャワーを浴び、髭を剃り、歯を磨く。風呂場から出た後で鏡台の前に立つと目の前には目の辺りが幾分落ち窪んだ、どこか体の内部が病んだように青白い顔の男が立っている。この頃の白昼夢と寝不足のせいで体調にも以上を期しているようだ。これじゃあ会社の同僚に病院で見てもらえといわれるだけの事はあるなと思う。

ジーンズにタイトな水色のTシャツを着た。押入れの中を探り、ノースフェースのリュックを取り出し着替えと読みかけの小説と冷蔵庫にあったミネラルウォーターを放り込んだ。いつもより多めの歯磨き粉をつけた歯ブラシでしっかりと歯を磨き、鏡に映る自分の顔をもう一度まじまじと見た。あの頃より幾分肌の質がかさかさになった気がする。歳をとるとはそういうことだ。

すべての準備が整った後、僕は会社に電話を入れた。二日程休みが欲しいといった。ダメだと言われたら辞めてもいい気分だったけれど、今まで一度も休んでなかったせい、会社からはすんなりとOKが出た。肩透かしを食らった感じだったけれど、とにかく休みが取れたので僕は今住む町を飛び出し、あの場所へと向かうことにした。行くまでに地球の裏側ほど遠くに感じられた。そこに僕の欲しいものがあるかとか、昔を懐かしむ気持ちとかはまるで湧き上がってこなかった。ただ何もなくなっていることを自分が体で認識したときの行動を思うと少し嫌な気になった。

ただもう電車は出てしまっていて、僕はそれに乗っていた。

新幹線は次第にスピードを緩め始め車内アナウンスが京都駅への到着を告げる。

数えるほどしか出て行かなかった街中には差ほど思い入れはないはずなのに京都タワーが見えるとなんだか妙に懐かしい気持ちになった。

ホームに出るとすぐ熱気が僕を迎える。盆地である京都の夏はひどく蒸し暑いことを思い出した。そして少しだけ自分の頬が緩んだことに気づいた。ホームから降りて改札を抜けるとすぐ正面に近鉄線の改札がある。この近鉄線の改札だけは何故か未だに切符を窓口で駅員が売っている。予想はしていたけれど、観光客らしい人たち



で改札の前はごったがえしていた。それでも改札を抜けてすぐうまく急行に乗ることが出来た。じわじわと掻き始めていた汗はひんやりとした車内にいるうちにおさまってきた。

平行世界の中と同じ場所には近づいているが、この自分の視界に写る景色一つ一つが現実であるせいか白昼夢に陥る気配は無かった。そして今まで持っていたその不安もどこかへ消えている。仮に寝過ごしたとしてもアノ場所へは辿り着くような気がしていた。

急行を降りて、各駅に乗り換える。全てが始まったような乗り過ごしてきたあの駅は数年の間に新しい駅に作り変えられていた。その新しい駅に沿うようにゆっくりと町の作りも新しく変えようとしているようで、古びた町並みにぼつぼつと新しい建物が目立っていた。そのことが随分と現実的で僕は胸の痛みのようなものを覚えた。現実も変わっていくのと同じように記憶が少しずつ失われ変わっていくのだとしたら、想い出は作り物なのかもしれない。好い想い出も嫌な想い出も時間の流れの中で造り変わってゆくのなら、僕の彼女との生活の想い出はいつたい僕の中の何が何のために造り変えていくのだろう。

線路に沿って歩いていく。陽は高く、じりじりと僕の肌を焦がす。ジワリとした汗が滲んでくる。

線路沿いを曲がり坂を登る。

坂道の先を見上げると住宅がずらりと並び、その家々の防壁が坂道を浮き立たせている。こんなに長かったかなと思う。しばらく坂を上っていくと視界の端に突然緑が飛び込んでくる。神社の前にあるあの高く切り立った木々を作る林だった。その林のほうを見ながら住宅街を歩いているとずらりと並んでいた家々の間に急に隙間ができていく。そこがあの部屋があるアパートの入り口だった。

それはそこにあつた。何一つ変らぬ有り様で。

すでに忘れられたような存在感のアパートだったそれは、僕にはあの時から全く変化がみられないような感じがして変な違和感を覚えた。老朽化の時間感覚が狂っているような気がした。

二階へと上がる階段の手すりも錆びているが、あの時から全く進行していないように思える。

僕は階段を上がりあの部屋を目指す。部屋の玄関までのかび臭さもあの頃となんら違いが無かった。

部屋のドアを開ける。カーテンの無い部屋の中は夏の日差しを受けて全てが鮮明に僕の視界に写った。それでも白昼夢は訪れることも無かった。部屋には当然ながら何一つ物というものが存在していなかった。

靴を脱いでたたみの上を歩く。ざらついた感覚が懐かしかった。

そして窓から神社のある林のほうを見る。いつも見ていたようにここから神社は全く見えなかった。

そして僕は湧き上がる可笑しみを抑えながら、自然と呟いていた。

ここは違う。

ここは現実の世界だ。彼女はいない。そしてあの平行世界もここにはない。

当たり前のことを当たり前だと感じるためだけに僕はここまでやってきて（もしくは戻ってきて）、そのことを認識することのためだけに今ここに立っている。そのことに今気付いてしまったことに笑い出しそうになる。同時に体に入らなくなって僕は窓枠にもたれ掛かった。そしてふと下を見下ろすとそこにはあのおばさんがいた。あの頃と同じような姿で草むしりをしているようだった。暫

くおばさんをじっと見ているとおばさんはゆっくりと立ち上がった。そして振り向き僕の方を見た。僕とおばさんは暫く互いに互いを見続けていた。

そして僕は部屋を出て下へ降り、アパートの入り口とは逆のおばさんがいる林側へ向かった。

おばさんはそこに立っていた。

「久しぶりだね」

「そうですね」

「ここはあの頃と何一つ変わってないだろう」

「ええ、本当に何一つ。おばさんもまったく変わったところがないですね」

「そう、見えるかい？ かもしれないね。でもね、あたしの目は変わったよ。もう周りの景色が分かることはなくなったよ。分かるのは明るい、暗いそれだけだよ」

おばさんは自分の瞳が僕に見えるように色眼鏡をずらした。そこには青白く濁った二つの盲目が僕を見ていた。僕は死んでいる魚の目を思い出した。

「気にすることはない、いつかは誰も何も見えなくなるんだから、ただ、この場所はあるの言うとおりの何も変わってない、何も変わらないんだ。あたしがいる限りはね」

「僕は随分歳をとりましたよ」

「当然さ、人間はみな年をとる。ただね、人にはいくつになっても変わらない、変えられない場所があるんだよ。あんたが今いるこの場所がそうさ。それが現実の自分と離れていくのは誰でも辛いものさ。そうだからこそあんたはここへ来たんだろ」

僕は返事をしなかった。おばさんの言っていることはそのようにも思えたけれど、僕はここに来た理由の本質をまだ自分の中に見出せてたいなかった。

「彼女とはあれから一度も会ってません」

おばさんは大きな指の隙間に小さなタバコを器用に挟み、深く頷きじつと僕の話の続きを待った。

「それなのに僕は彼女のことばかり思い出してしまうんです。何も言わず別れたことに後悔しているわけじゃないんです。ただあの時、彼女にかけるべき言葉があったような気がするんですけど、それが何であるか未だに答えが出せません。だから忘れることも出来ないまま日常を無意味に生きてしまっている」

「答えが出せれば、忘れられるのかい？」

「いえ、忘れるとかいうことではなくて。むしろ忘れる気はありません。ただ失ったものを元に戻したいんです」

「失ったもの？」

「それ自体よく分からないものなんですけど、あの頃の生活が何が現実離れしすぎていてそれが終わってもいまだに現実にうまく自分が馴染めていない気がして。ずっと同じことを繰り返してるんです。誰かと出会って、傷つけて、別れて後悔だけがのこって」

「それがあなたの人生じゃないのかい」

「人を傷つけるだけの人生になんの期待も持てないんです。それに今の僕の現状にも」

「自分が磨り減ってるようで怖いのかい？随分と情けない意見だね」

「はい、正直自分がどんどん削られていって現実から消えてしまっ  
んじゃないかという気がしてるんです。削っているものが自分自身  
であることも分かっているんですが」

僕はあの頃には考えられないほど素直に自分の気持ちを話してい  
た、というよりいつも出来るだけ避けていたので、きちんとした会  
話自体今が初めてだった。

おばさんはしばらく黙っていた。沈黙はどうしようもないくらい  
深く、意識は出口のない迷路に入ったように同じところを彷徨って  
いる。曲がった腰をゆっくりと伸ばし、急に踵を返しておばさんは  
言った。

「暑いだろ、部屋へ上がりな」

そう言つと玄関の戸を大きく開いたまま中へ入っていった。僕は  
何も言わず静かにその言葉にしたがった。

おばさんの部屋は間取りは当然ながら彼女の部屋となんら変わり

なかった。

おばさんは色眼鏡をはずした。やはり眼球は濁り、黒い部分は死んだ魚ように真っ青だ。

「あの頃あなたはあたしを憎み、殺意にも似た感情をもっていたね」

「そうですね」

僕は正直に答えた。

殺意までは持っていないかったと言いたかったけれど、おばさんの前ではどれも無駄であるきがして反論はしなかった。

「あの世界を壊す存在だと考えていたんだろうね」

僕は同意も反対もせずおばさんの話の続きを待った。

「あなたはここで禁忌タブーを犯した。現実の彼女をあなた自身の内側の世界へ住まわせようとした。それは無理なことだ。自分が閉じ込めた自分の半身を満たすためだけの生贄にする行為だよそれは」

濁った二つの目がコチラをじっと見据えている。僕はその目をじっと見ていた。

「あなた、わたしが誰だかわかるかい。わたしがあなたにとってなのであるかが分かるかい。何故彼女がここにいないでわたしがここにいるのか。考えてごらんよ。あなたはすでに理解しているはずさ。何故ここがこのままなのか、ここがどこなのか」

おばさんはそれ以上話を続けようとしなかった。ここにこれ以上

いてもあんたに何一つ良いことなんてないよ、早く戻ったほうがいい、そう言つて立ち上がった。僕はおばさんに続いて立ち上がつて、何も言わず部屋を出た。

日差しがじりじりと肌を焼く。僕は掌で目に刺さるような日差しを遮りながらアパートを見回した。

本当にここは変わっていない。辺りを見れば完全に不釣り合いなこの場所が何年経つても残っていることはやはりどうも不自然だった。あの、おばさんもだ。目は何か白く濁っていたけど、それ以外は全く何一つ変わつてない気がした。記憶が曖昧だけれど着ていた服も、サンダルも同じだったような気がする。

いまさらながら僕は何をしにここへ来たのだらうと思う。ここが変わつてないことは意外だったが、うれしさはこみ上げてはこなかった。何かが変わえられるなんて思ったのではなかった。何かを取り戻せるなんて考えてはいなかつた。ただ自分の中の何かがここへ向かわせていた。

それが何であつたとしても実際、彼女とはもう出会うことなんてあるはずがないのだ。

僕らは名前さえ知らないのだから。

それでも、僕は彼女との生活、あの世界を今でも愛おしく思っている。

あの頃の僕らは誰かであつて誰でもなかった。  
世界にたつた二人で存在し、ただ、対でしかない。

自分とそれ以外。

その認識だけ。

それだけで十分僕らはやって行けた。

あの小さな世界では。

この暑さの中に長くいすぎたせいか、急に視界が歪みぐらりと地面が揺れるような感覚に襲われる。

崩れそうな体を両膝を手で押さえることで何とか支えている。歪んだ様な目の前の世界に何か動いていることに気付く。それは犬だった。

野良犬は僕の方に寄ってきた。

当時おばさんが世話していたときの犬とは違っていた。

ただ、僕が子供の頃に飼ってた犬と似ていた。似ているというより、そのもののような気がした。

また過去が現実の中に流れ込もうとしている。確かこの場所で彼女に僕は自分が飼っていた犬が死んだ話をしたことを思い出す。そして彼女に話していなかった部分を僕は思い出す。



犬が死んだ日の夜、大きくなった犬が僕を噛み殺す夢を見たことを思い出した。

自分がしたこと、してあげられなかったことへの罪悪感や後悔で寝つけが悪くようやく眠れたころ僕は夢の中で自分が犬に噛み砕かれぐちゃぐちゃされている夢をみることになった。そのせいで暫く不眠症のような症状になってしまったことがあった。

無理やり引き出されたような思い出がリアルに感情を刺激し、僕は恐怖した。体は硬直してうまく動けない。

この世の理は等価交換であって、つけはいつか払わねばならない。それがいまであるならば、僕は静かにそれを受け入れなくては行けない。僕は咽笛を噛み千切られ死を受け入れる気になった。

それでも、その野良犬は僕に擦り寄ってきた。僕は無意識に手を出していた。犬は僕の手を舐めた。

現実と過去の入り混じったようなあきらめの感情の中、あらゆる後悔や自分のしてきた罪の意識から本当は許されたい自分に気付いてしまった、そして今許された気になった愚かな自分がいることにも。

僕は泣いていた。

僕は謝りたかった。失った全てのものたちに、そして何より彼女に。

「…それですむと思っっているのかい？」

「犯るだけ犯って、彼女を捨てたようなもんだろ。最初から長く付

き合つ気なんてなかつたんだろ。だから名前も言わないで本当だか  
分かんない彼女の別れ話をすんなり受け入れたんだ。それがいまさ  
ら惜しくなったのかい？」

犬の顔はいつのまにかおばさんの顔になっていった。そして鼻の  
辺りからおそらく僕が平行世界で見た夢の中で手に握った何かで殴  
りつけた箇所から顔が擦れ、中へと沈み込んでゆく。そしてあの時  
と同じように真つ黒な穴になった。

ただ、あの時とは違って穴の中を僕は見る事ができた。

そこから覗くのはひとつの崩れた頭蓋骨。その頭蓋骨が誰のもの  
であるのかを僕は知っている。右側頭部が崩れてぽっかりと空いて  
しまっている。その空いた場所には靄に包まれた街並みに浮かぶひ  
とつの孤立した小高い丘、そしてそこに建つ小さな家が見える。

そうだ、夢で見た僕が住んでいた浮島だ。

崩れた頭蓋骨の口がかたかたと開き喋りだす。

お前は都合の悪いことを忘れてるんじゃないのかい？

僕は両手で犬のようなものの首を力いっぱい絞めた。犬のような  
ものの足が地面から離れるぐらい締め上げた。犬のようなものは足  
をばたばたともがいていた。ただ、頭蓋骨は何度も同じような言葉  
を喋り続けている。その言葉は僕の頭の中に直接響いてくるように  
感じる。

僕はさらに力を強めようとする。頭蓋骨の口から漏れ出る言葉は

犬のようなものの首を絞める力の強さに比例してかすれ小さくなつてゆく。

「あ、あ、あの子はあああう、お、おまつ、があははははっ！」

言葉はハッキリと聞き取れなくなっていくが音のポリウムは次第に僕の中で大きくなっていく。

両手に力をいれていくごとにその力に反発するような弾力が帰ってくる。それが怖くなって僕はまた力を入れ始める。それを繰り返しているうちに反発は次第に弱くなり、僕の両手を受け入れられるように萎んでくる。生き物の生への執念と諦めが両手の中にあつた。

やがて犬のようなものの足が力なくだらりと垂れた。

僕は両手を離れた。どさりと犬のようなものは地面に落ちた。

体にひどい疲労と大量の汗をかけた不快感があつた。

蝉の声が聞こえた。辺りを見渡す。

大きく伸びた木々の合間に神社が見えた。僕はまだ温かい犬のよつなものの足を掴んで引きづりながら神社のほうに向かつていた。木陰は思いのほか寒気がするほど涼しく、思わず首を引っ込めた。誰もいない神社脇の大きな木。僕はその木の辺りに何か見覚えがある。犬のようなものを掴んでいた手を離し、その大木の横に僕は穴を掘り出した。地面は夏場でもひんやりとして冷たく黒い粘土質であるため手で掘るには骨が折れた。一度引いた汗もまたじわじわとたれ始めた。爪の間に石が入ってきたような痛みを感じる。それでも体は動きを止めず湿った土をどんと掘り返していた。僕は手

に何か当たるのを感じる。白く長い塊、そしてくすんだ水色をした生地のようなもの。僕はそれが何かを知っているような気がした。それでも僕はそれに対して何の意識も抱かず引きずってきた犬だったものを掘った穴に落とし上から土をかけた。立ち上がると腰に重い張りを感じ、ゆっくりと背伸びをした。目の前がちかちかして立ちくらみがしたのを木にもたれかかってじっと耐えた。土のついた膝と手を払ってからゆっくりとアパートの方へと戻った。おばさんが気になったのでそこを離れる前に一度玄関を見てみることにした。

出るとき閉めたはずのアパートのおばさんの部屋のドアが開いていた。僕はその部屋を覗いた。おばさんはそこにいた。おそらく二度と起き上がらない姿で。大の字に倒れ眼鏡は顔から外れ、濁った両目は見開かれていた。ただ顔は真つ黒ではなかった。口から垂れた舌も長くはなかった。ただおばさんの首には鬱血して紫になった跡が見えた。僕は静かにドアを閉めてその部屋を出た。

両手には泥にまみれ、錆びついた鉄のようなにおいがした。

僕はアパートをあとにして、重い足取りを無理やり倒れこむように前のめりに送り出しずると坂を下っていた。日差しが恨んでいるかのように僕を刺した。不快な汗が体中から噴き出してくる。

アパートの敷地から出て線路沿いの道まで続く坂道を下る。自分が酷く疲労していることに気付く。足取りがことのほか重い。この道が不快なのは何度目のことだろう。駅に近くなったところで彼女と初めて会ったラーメン屋を探した。あの頃あったラーメン屋はすでになくなっていた。今となっては本当にあったかどうかも怪しいものだ。自分の現実は何一つ自信をもてなくなっている。出会った日の夜と同じように向かいの上りの駅のほうに向かう。

踏み切りに差し掛かると、遮断機が降りて僕は立ち止まる。目の前がくらくらして飛びそうな意識の中で、それまでははっきりと聞

き取れていたカンカンカンという踏み切り音が誰かがポリウームを弄った様に次第に小さくなってゆく。この雰囲気を僕は覚えている。あの白昼夢だ。でもそれはあの頃僕が彼女の部屋で見た夢の続きだった。

粘り気のある大気と灼熱のような日差しを僕は感じなくなっている。そして体に吹き付ける強い風には夏の臭いなぞどこにもない体を刺すような痛みを感じさせる冷たさがある。そしてかびた様な草の臭い。そうだ何年も前に何度か嗅いだことのあるにおいだ。

現実にも夢も白昼夢も入り込んでくる。

僕は辺りが真っ黒なことに気付くがそれと同時ににやけてくる。自分が目を閉じていることを気付かされるのは以前にもあったからだ。僕は目を開ける。やはりここか。あの頭蓋骨の中に見たあの場所、それがここだ。そしてその場所は間違いなく僕の中に存在している。いや、正確に言うならばずっと存在していた。

見覚えのある陰鬱な空、大気のくすんだような灰色に負けている草の緑。そして狭い大地。振り返ればまた見覚えのある小さな家がぼつんと立っている。玄関のドアは開かれている。

僕は少しだけ彼女の手が地面から出てきたあの夢を思い出し、背筋に悪寒を覚えた。今さらそんな感情を思い出すのも変なことなのだけれど。彼女が出てきた場所を向く。確か穴を掘っていたところと同じはずだ。結局ここへ彼女の一部、というか思い出のようなものなのだろうけれど、連れてくることは叶わなかったようだ。ただその穴はまた掘り起こされているようだ。また穴が開いていてその横には掘ったときに出た土が盛られている。

僕はそこへ近づいていった。穴を覗いてみる。そこに以前見たような腐り崩れた彼女の姿はなかった。そして彼女が埋まっていた穴には人一人が入るぐらいの木の箱がある。その前に僕はたった。僕の立っている目線から箱の底はせいぜい2メートルぐらいのだけれど、なにか高層ビルの屋上から地上を覗き見るような感じがあった。じっと見ていると穴の中に引き込まれそうな感覚を覚える。そのとき誰かが僕の背中を押ししたような感触があった。無防備な状態で木箱に肩から落ちたので、痛みにはばらくは動くことができなかった。夢の中でこんな痛みを感じることに違和感を覚えながら狭い木箱の中でうつ伏せになっていた自分の体を何とか仰向けにしようとする。木箱は肩幅ぎりぎりぐらいなので、体を入れ替えるのがひどく難しい。やっとのことで仰ぎ見た僕の目に映ったのは上から見下ろす僕自身の姿だった。その僕はにやけた顔のまま手にスコップを持っていた。

そのスコップで僕に土をかけた。ざくつという音の後でひんやりとした土が僕の体にかけている。それは次第に重くなり自分の体が埋められていく感覚がどんどんと強くなる。肺がうまく空気を取り込めず息苦しくなってきた。

体には土のかけられていくひんやりとして重苦しい感覚を感じているのに、現実の僕には踏切が開いたのが分かった。そして自分が歩き出していることも。意識が夢の中と現実とに同時に存在しているようだ。その混在した世界の中、頭の中ではまだシャベルがザクザクと土をかける定期的な音が続いている。体を圧迫する土の量に呼応するように踏み切りを横切る僕の足取りも重くなり、一步を踏み出すのも苦しくなってくる。ただ僕は歩みを止めない。それが自分の意思なのかどうなのかも分からなくなっている。

駅のホームに上がる階段の手すりに僕は身を任せながら自分を削るように壁にはいつくばって階段を上がる。誰かが僕を見て何かを言っている気がする。それが何であるかも今の僕にはハッキリとは分からない。ただ駅のホームに立ち目の前に電車が止まることだけ

を待つ。

電車が運んできた熱気を含んだ風がやむと乗車口が開いた。僕は白昼夢の中で土に埋められていくたび、重くなる体を引きずるように乗車口へ歩いた。

そして僕はようやく電車に乗った。車内はひんやりとしており、居心地の悪さを感じた汗が服と皮膚の間に隠れ不快な密着感を出している。僕の耳の中ではまだシャベルで僕が僕に土をかける音が聞こえている。体にかかれていく土の重さを実感するたび体がどんどんと重くなってくる。そしてその重さが僕の体から意識を引き剥がしていくような気がしている。僕は座席に座る。

電車の硬い質感の座席が次第に軟らかくなっていくような感覚を覚える。そして、座席深く潜っていくようなイメージが僕を襲い、目を開けていても自分の周りが真っ暗になってきている。そして僕の体も次第にそれに同化してきている。見上げたそこには僕自身がいる。そして笑っている。

そうか、そういうことか。

ボクはこれを待っていたのか。

いいさ、僕はもう疲れたようだ、選手交代だ。

しばらくすると眠気が襲ってきた。また乗り過ぎすかもしれない。それならそれで構わなかった。帰るところなんて僕にはないのだ。僕は抵抗することなく瞳を閉じた。警告音がなり電車の扉が閉まる。のっそりと動き出した電車が僕の体を揺する。僕は目を閉じ眠りの中へ、誰もいない失うことのない深海のように深く孤独な世界へとたどり着くことだけを僕は望んだ。

僕は風を感じる。電車の冷房ではない風の冷たさが体の芯を冷やしていく。

この風を僕は知っている。そしていつも感じていた。

僕は目を開ける。

僕のたどり着いた場所はその反り立つ崖の上に建った家。

仰ぎ見る空は薄暗くどんよりとした雲に一面を覆われている。

雲の隙間はどこにも見つかりそうも無い。

そしてその家の前に独り座り、自分以外の人達が住む町並みを見下ろしている。



ともかく、彼女と出会ったのはひどく夢と現実が見分けにくい頃のことだ。

## 6・僕に住む住人（後書き）

完読感謝。なんとか最終話まで書き終えることが出来まシタ。初の長編で大変デシタガ、挫折しなくてよかつたデス。誤字や表現のおかしなところはおいおい直して行きたいと思いまス。感想、批評いただければこれ幸いデス。暫くは短編を書いていく予定デス。暗い作品ばかりなので、明るいモノを書ければと思う今日この頃デス。ありがとうございますいまシタ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3789f/>

---

僕に住む住人

2010年12月2日03時04分発行